

平成21年度国庫補助事業

芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書

岩ヶ平刻印群（第176地点）

—徳川大坂城東六甲採石場XIII—

芦屋廃寺遺跡（第113地点）

打出岸造り遺跡（第56地点）

2011年3月

芦屋市教育委員会

平成21年度国庫補助事業

芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書

岩ヶ平刻印群（第176地点）

—徳川大坂城東六甲採石場XIII—

芦屋廃寺遺跡（第113地点）

打出岸造り遺跡（第56地点）

2011年3月

芦屋市教育委員会



1号石材（全形俯瞰）



1号石材（刻印撮写）



I区全景(南から)



II区全景(南から)



東区全景(東から)



SD01掘削状況 (東から)



SD01掘削状況 (北から)



SD04土層断面 (南東から)



SD04検出状況 (南東から)



SD04上層掘削状況 (東から)



SD04下層掘削状況 (北東から)



SD04下層遺物出土状況 (北東から)



土器溜り1～3検出状況(西から)



土器溜り1～3掘削状況(西から)



土器溜り1 土層断面 (東から)



土器溜り1 中層土器出土状況 (北から)



土器溜り1 中層西部土器出土状況
(南東から)



土器溜り1 中層西部土器出土状況 (北東から)



土器溜り 1 下層掘削状況
(北西から)



土器溜り 1 下層掘削状況
(北東から)



土器溜り 1 完掘状況
(北東から)



土器溜り1下層土器出土状況
(南西から)



土器溜り1下層土器出土状況
(南東から)



土器溜り1下層北部土器出土状況 (北東から)



土器溜り1下層北部土器出土状況 (北西から)



土器溜り1下層南部土器出土状況
(北西から)



土器溜り1下層西部土器出土状況
(北西から)



土器溜り2土器出土状況(南西から)



土器溜り3土器出土状況(南から)



土器層り1～3掘削状況
(南から)



Ⅱ区南部掘削状況
(西から)



北壁土層 (南東から)

序

昭和15年（1940）に村から市へと躍進した芦屋市は、昨年、無事市制70周年を迎えることができました。

わが街芦屋の歴史を紐解くと、実際は市になってからの年数の百倍以上の長さの歩みをたどってきたことが明らかとなっています。それらは、地上に存在する建物や橋や道路、鉄道などの諸施設や住宅だけではなく、地下に埋蔵されている数多くの文化財からも知ることができます。

「埋蔵文化財」と呼ばれているこれら遺跡・遺構・遺物は、さまざまな土木工事により顔を出しますが、芦屋市はこれまでもこうした文化財を個人住宅の事業でも地権者のご協力を得、事前調査を実施して記録保存を図り守ってまいりました。

今年度は、そのうち平成21年度に実施した事業3件分の報告内容を収載しています。本書が歴史の根幹資料として、今後の文化財行政や今日ある市民生活の原点としてさまざまな形で活用されることを願ってやみません。

芦屋市教育委員会職務代行者

管理部長 波多野 正和

例 言

1. 本書は、芦屋市教育委員会が平成21年度国庫補助事業として実施した市内遺跡発掘調査の概要報告書である。発掘調査費・遺物整理費・報告書印刷製本費等は、総額9,744,000円で、国1/2、県1/4、市1/4の補助率である。
2. 調査対象遺跡は、当該年度に確認調査・本発掘調査を実施した4遺跡5地点である。これらの調査地点の中で、会下山遺跡の分布範囲確認調査については『兵庫県芦屋市 会下山遺跡確認調査報告書—遺跡分布範囲の確認を目的とした第8～10次発掘調査の成果—』（芦屋市文化財調査報告第85集）として平成22年（2010）8月に刊行しているため割愛した。
3. 平成21年度に実施した発掘調査および遺物・資料整理作業は、芦屋市教育委員会社会教育部生涯学習課文化財担当主査（学芸員）森岡秀人、同課学芸員竹村忠洋、同課嘱託（学芸員）坂田典彦、同課嘱託（学芸員）白谷朋世が担当し、同課嘱託（学芸員）平山裕之が補佐した。国庫補助事業に関わる事務については、同課課長補佐細井良幸、同課課員春木和子が担当し、同課臨時的任用職員である田中智美・力武満喜江がこれを補佐した。

平成22年度に実施した報告書（本書）の編集・作成作業は、森岡・竹村・坂田・白谷が担当した。事務については、生涯学習課課長細井、同課主査竹内典子、同課再任用職員春木が担当し、同課臨時的任用職員の力武がこれを補佐した。

本事業の実施に際しては、文化庁文化財部記念物課および兵庫県教育委員会文化財室から指導・助言を受けた。

4. 発掘調査および遺物・資料整理作業（平成21年度）、報告書（本書）編集・作成作業（平成22年度）には、上記した職員・嘱託のほか、下記の臨時的任用職員、文化財ボランティアが従事した。
相澤敦子、天羽育子、梅本素子、久保ふく子、桑原育世、小島静子、近藤奈保子、須田佑子、住本孝太、中井みどり、仲谷由利子、西岡崇代、山本麻理、横森美和子
5. 本書の執筆と編集は、森岡・坂田・白谷が担当し、竹村が補佐した。執筆分担については、目次および本文節末に氏名を掲げた。
6. 校正作業は、森岡・竹村・坂田・白谷の他、天羽・西岡・山本が担当した。
7. 方位について、磁北を用いたものには挿図中の方位マークに「M. N.」と表示した。なお、磁北は真北より6°40'西に振っている。また、標高については、東京湾平均海水準（T. P.）で表示している。
8. 標準土色帖で判定した褐色の「褐」字は、本書では「褐」を代字として使用した。
9. 本書第2章第3節で記載した土器の器形・編年観は〔森岡・竹村2006〕を参照した。
10. 本書を作成する上で引用および参照した文献は亀甲括弧で表記する。なお、発行機関が教育委員会の場合は「教委」と省略して記す。また、引用・参照文献などは、巻末に集約している。
11. 発掘調査および整理作業の過程で、下記の方々からご助言・ご教示を賜った。記して感謝いたします（五十音順・敬称略）。

青木勘時、勇 正廣、市村慎太郎、奥田 尚、北垣聰一郎、高野陽子、多賀左門、濱野俊一、藤川祐作、古川久雄、松田和義、村川義典、山村 薫、山本徹男

目 次

序 例 言 目 次

第1章 平成21年度国庫補助事業市内遺跡発掘調査の実施経過

第1節 国庫補助事業を含めた遺跡の取扱い状況	（森岡秀人）	1
第2節 近年の埋蔵文化財の発掘調査体制について	（森岡）	1
第3節 地理的地質的環境よりみたる芦屋地域	（森岡）	1
第4節 近代芦屋市の成立小史と地名の変貌	（森岡）	2
第5節 市域をめぐる近世・近代の動き	（森岡）	3

第2章 発掘調査の概要

第1節 岩ヶ平刻印群（第176地点）	（坂田典彦・森岡）	5
1. 調査に至る経緯		5
2. 調査地をとりまく環境		5
3. 発掘調査の概要		5
4. 小 結		8
第2節 芦屋廃寺遺跡（第113地点）	（白谷朋世・天羽育子）	11
1. 調査に至る経緯		11
2. 調査地をとりまく環境		11
3. 発掘調査の概要		16
4. 小 結		21
第3節 打出岸造り遺跡（第56地点）	（白谷・森岡）	25
1. 調査に至る経緯		25
2. 調査地をとりまく環境		26
3. 発掘調査の概要		27
4. 小 結		57

第3章 総 括

第1節 平成21年度の発掘調査3件を概括して	（森岡）	63
第2節 岩ヶ平丘陵最南限付近で行われた刻印石周辺の調査 （因伯鳥取藩池田家石場関連）とその意義について	（森岡）	63
第3節 芦屋廃寺遺跡の広がり様相	（森岡）	66
第4節 待望の居住域が見つかった打出岸造り遺跡とその性格をめぐって	（森岡）	67
第5節 結びにかえて	（森岡）	70

引用・参考文献目録	72
-----------	----

報告書抄録

第1章 平成21年度国庫補助事業市内遺跡発掘調査の実施経過

第1節 国庫補助事業を含めた遺跡の取扱い状況

兵庫県芦屋市は、県城南東部の阪神間に位置する小さい自治体である。今年度は市制施行70周年を迎えたが、戦後は折々事業を果たしつつ国際文化住宅都市として目覚ましく発展してきた。したがって、土木工事によって遭遇する埋蔵文化財の保護は、都市整備事業や街路整備事業とも不可分な関係にあり、人口の増加を支える住宅地の形成とその進展とも深い関わりを持っている。埋蔵文化財を保護する行政的な仕組みは、昭和40年代中頃より次第に整えられてきたが、学術的な調査は昭和30年代より他市町に先駆けて取り組まれ、市内ではその象徴として、県史跡第1号の会下山遺跡が存在する。この遺跡も今年度、国史跡指定の具申に対して昨秋答申が出され、先頃官報告示を受けた。ところで、昨今は芦屋市独自の景観の保全が条例の整備とともに推進されるようになり、埋蔵文化財包蔵地が次々と共同住宅建設のため、発掘の調査対象になるようなことは急速に減少している。それでも兵庫県下では、住宅建設事業に対応した調査の件数が多い所として知られている。その足取りに相応しく常々十分な調整と合意の形成に努力し、加えて文化財保護法第92条第1項の運用自体に關しても細心の注意が払われてきた。時には生ずる乱開発に対し、大きな歯止めが文化行政面でも行われてきたと言え、先年、創始的な景観法により建築計画不認定と発表された全国初の5階建共同住宅の例は、一昨年7月に市全域を同法で定める景観地区に指定した本市ならではの制限であり、景観と調和した建築スケールなるものが美観を備えた都市社会の必然として観望求められている。さて、市内では緊急度の最も高い専用住宅の建設に伴う遺跡範囲確認調査や記録保存調査は都市の整備には重要な位置を占めており、適正な国庫補助事業の実施と共に、その存在を度外視することなく円滑な遺跡保護の取扱いが進められている。

平成21年度には、事業主が調査費を負担した所調査原因者負担による記録保存調査を2件3地点実施している。1件は継続している街路事業（山手幹線）の最終調査で、月若遺跡の第98地点と第100地点を対象とした。その報告書は第86集として今年度に刊行した。もう1件は民間事業で、共同住宅建設に伴い、芦屋庵寺遺跡第115地点を対象に記録保存調査を行い、報告書は今年度、整理を終えて第87集として刊行した。専用住宅対応が主となる国庫補助事業は、概して少なかった。報告すべきものは、本書に収載した3件にすぎない。他に報告書作成費を実施したものに国史跡指定

を目指した会下山遺跡の遺跡範囲確認調査成果があり、これは第85集として具申資料としての報告書を刊行した。現在、官報告示を受け、無事国史跡となった。

芦屋市教育委員会が平成21年度に国庫補助金を得て実施した市内遺跡の発掘調査は、平成22年2月1日付教文第3453号により補助金の交付決定を受けた「平成21年度国宝重要文化財等保存整備費補助金」に基づくものであり、「補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律第14条」の規定に基づき、緊急度の高さに応じつつ、届出順に基づき円滑に実施した。

当該補助事業の実施期間は、平成21年4月1日（着手）～平成22年3月31日（完了）であり、芦屋市教育委員会が事業主体となって遂行した。補助事業の交付決定額は4,872,000円である。（森岡秀人）

第2節 近年の埋蔵文化財の発掘調査体制について

芦屋市内における埋蔵文化財の保護手続き（文化財保護法により平成17年4月1日改訂）は、平成21年度、文化財保護法第93条の1（土木工事のための発掘に関する届出および指示）並びに第94条の1（国の機関等が行う発掘に関する特例）の規定に基づき、文化庁長官宛提出された周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の施工に伴う届出や通知の件数が70件を数え、それらへの対応として実施された文化財保護法第99条（地方公共団体による発掘の施行）第1項の規定に基づく発掘調査は合計25件となった。市内全体における調査種別は、本発掘調査6件、確認調査19件の実施数であり、この年度の工事立会の件数は26件、分布調査0件を数える統計値となっている。

なお、平成21年度における文化財所管課への窓口・ファックス・メールによる埋蔵文化財包蔵地に関する問い合わせは1060件、開発指導等事前協議は106件の数値を示している。この年度、芦屋市の埋蔵文化財専門職員数は、正規2名（学芸員）、非常勤嘱託3名の合計5名で、1チーム2名の2班体制を整えて複数の緊急発掘調査に対応する一方、文化庁・兵庫県教育委員会の指導・助言を得つつ国史跡を目指す会下山遺跡の第3次範囲確認調査（通算第10次調査）を実施した。（森岡）

第3節 地理的地質的環境よりみたる芦屋地域

先ず兵庫県東南部に位置する芦屋市の自然環境をながめてみよう。市域は大阪湾に臨み高麗932m弱を

測る衆峰連なる六甲山地の南麓に東西2km、南北8.5kmの短冊形に近い形で存在する。東は西宮市に、西は神戸市に境を接し、大阪湾に面している。六甲山地は衝上断層の成因により床の間に屏風を立てたように赤崩急激に迫り、急流河川が複合扇状地を形成して海岸平野は頗る狭隘である。農用地の発達はかなり段階を踏んだことが窺われ、近世までの集落は街村や塊村の形態を採って大規模な広がりを持つものではなかった。しかし、東西交通の回廊としての機能は官道が通過した旧摂津国段階に既に磐石なものとなっており、古代山陽道をはじめ、江戸時代の西国街道の活発な往来など、幹線交通を背景とした当地域の発達が跡付けられる。

市域は東端が東経135度19分39秒（堀切川河口）、西端が東経135度16分5秒（六甲越えにのこし峠付近）、南端が北緯34度42分56秒（芦屋川河口）、北端は北緯34度46分52秒（仁川水無谷炭谷炭）に位置し、西側500m付近に芦屋川峡谷の弁天岩が存在する地点が市域の重心である。

地質基盤は古生層と花崗岩から成り、その上を大阪層群や段丘礫層が被覆し、最後に沖積層が形成される。硬質砂岩や頁岩の互層から構成される古生層は地盤の隆起に伴い浸食を受け、残存部が花崗岩体上に乗っかっている状態で見られる。踏青により地下山や金鳥山などの六甲山地前山では上部古生層、下部花崗岩の浸潤関係が確認できる場合があり、両者接触の部位には花崗岩の侵入に起因して強度の熱変成作用が認められ、ホルンフェルス（変成岩）に変化している。花崗岩成立の順序は布引花崗岩→六甲花崗岩の関係にあり、前者は鷹尾山の南麓付近近郊で初現してより以西に頻出する。花崗岩体は芦屋川水車谷近辺に地下230mを超える変位した深部にあって、明らかに芦屋断層の影響を受け降下しており、海岸線付近で1000m弱の低位置になるほどの急崖面が伏在している。海岸から近至にあって聳やかす六甲山地には、山体の崩壊過程のバッドランドをなす部分が目立ち、岩屑の供給とともに巨円礫と化した転石が豊富である。中生代白亜紀後期に誕生したこの花崗岩は遺跡の面から見れば、横穴式石室や寺院の礎石、徳川大阪城の石切場などに盛用されており、建材としては近代建築や現代建築に、さらに民家の階段や石垣、記念碑・墓石などにも多用されている。なお、六甲山に最初に着目した外国人はイギリス人A. H. グループであり、明治28年（1895）に三國池畔に別荘を建て、避暑地としての利用の端緒となった。（森岡）

第4節 近代芦屋市の成立小史と地名の変貌

市制をとった芦屋市の誕生前後に照準を中てた偏り

を承知しつつ、亮筆を呵す内容となったが、先蹤を忘却しない意図から、本市の歩んだ道程の片鱗を概観しておきたい。

兵庫県芦屋市は、交通機関の至便性により阪神間有数の住宅都市として弛まず発達し、柱礎の生活環境にウエイトを置いた街づくりが奔馳して行われてきた。その下地として大正時代に進められた上下水道の整備工事や各種ライフライン設備の早期の布置があり、昭和9年（1934）や昭和13年（1938）に発生した精道村時代の大風水害を乗り越えつつ、昭和15年（1940）11月10日には割失、町を超越した市制施行を果たした。戦後は国際文化住宅都市として発展してきた。市誕生当時の人口は41,925人を数えるが、現在は昌慶し、面積18,57km²の狭隘な市域に93,496人の市民が近郊、畿内市都市宣言を発した美しい街並と通き通る浜線、養生する六甲連山や海岸沿いの数多き緑地を眺めつつ日々の生活を爽然と営んでいる。平成7年（1995）1月17日に発生した阪神・淡路大震災は、本市にとって多大な騒動となったが、窮厄に抗しつつ早くも16年の歳月が経過した。

地名としての芦屋は、既に『万葉集』の巻九にみえ、奈良時代にまで遡る。近世にはこの芦屋以外に打出・三条・津知の三村があって、明治22年（1889）以降、合して精道村と呼ばれてきたが、大正末年～昭和初年頃には、駅名や公共機関名としてよく認知されている芦屋村への改称を唱える動きもみられる。「芦屋」は古代にはより広域のエリアを指しての地勢や景観と深く関わる地名であったと思われ、高橋虫麻呂の歌に登場する「菟名負乙女の奥津城」は、西園・東明・住吉に所在する東西の求女塚、処女塚の古墳時代前期の3古墳を指すことはあくまで通説の範疇であって、葦の屋を冠することからすれば、それらをカバーしてなお余りある地域を包括すると見て大過ない。地理学者の島之夫が能因法師の詠んだ「葦の屋の児昆陽の渡りに日は暮れぬ、いつち行らん胸にまかせて」の歌や「葦のやのいさこの山のそのかみにのほりて見れば布引の瀬」（読人不知）の歌などに拠るとして、少数例ながらもまさしく古代鬼原郡の広がりが現伊丹市域に相当する川辺郡福野村を東の世界として、西方へは現神戸市の東半城あたりまでのエリアがカバーされるとみる言説を開陳しているが、類ける考証ではなからうか。中世以降に頻用の「葦屋」は、イネ科の多年草である葦群落より見劣りする植物上の含意を彷彿とさせるが、地域呼称としての範囲は当然柔軟な動きを伴ったと見るべきであろう。狭域な古代における葦屋郷の存在は、まさしく視覚的な郷土と不可分であり、海原・大原・鬼原を包括する葦の屋の広大なイメージは既に瓦解している。

しかし、島による戦前の指摘が慧眼と受け取れるのは、打出より青木までを「芦屋浦」、西宮より住吉ま

での「中瀬」、住吉より生田へと至る「大瀬」を括る総称として「芦屋瀬」と呼ぶ地名概念が広く地誌類に普及していること〔寛政8年刊「摂津名所図会」〕をもって、瀬の語源も芦屋瀬に起源ありとする点であり、芦屋という地域呼称の流動的変遷を科学的に精微に考究する作業はなお私たち文化財担当者に重く課せられた未解決の問題として取り組むを要するだろう。

芦屋地域は、踪跡・伝承・物語・和歌・謡曲・軍記など国文学史の上でも特筆に値する作品を育んできた情愔的な土地柄である。古来芦屋は人々の移住や立ち寄り、遊興などの流動性に加え、中央との接触に富んだところでもあり、叙事詩的に見ても象徴的かつ美麗な言葉が文学史の上に数多く残されている。蓋し第二次世界大戦の最中である昭和19年（1944）に町名改正を積極的に行ったことも特異な行政行為であり、戦時体制下、在原業平やその父阿保親王への所縁を求めた急ぎの施策であったことが耐量されよう。旧小字名の田中・徳塚・平足・走り田が伊勢物語に基づき業平町に、樋ノ口新田・中新田が雲林院（謡曲）に、環り公光町に、久保・親王塚・地造り・堀ノ内・川端・御ノ本が阿保山親王寺縁起を礎として親王塚町に改変していったことや東京隅田川に架行する業平橋を多分に意識して名付けられた芦屋川の業平橋もその一環と言えるが、忽々たるフォリブル（可撓的）な社会にあって、近代史としての地名の由来も急速にに霧散しつつある。

翻るに遺跡の調査は自ら多くを語ろうとはしないが、土地に鉤を入れ、過去の未知なる情報を土中から得、現出する生々しい物質資料を歴史の生き証人として市民の地域遺産の枠組みに位置づけ、その記録を保存し、現代・未来の人々へ継承していく第一歩と言える。そして、土地に根をしっかりとおりした歴史の数々を通して、郷土芦屋の歩みに誇りと喪失しつつある心に豊かさを取り戻す糧の一翼を担うものでもあるだろう。日来、遺跡の保護には、法律の世界を超えた市民の崇高なる理念、創造と共有資産として保持への傾注に向けて地宝に対する某かの誇りと識見が牽引力となっていることは言うまでもない。（森岡）

第5節 市域をめぐる近世・近代の動き

本節では、構思不手際で省約ながら、長舌を要さず市域の成り立ちを俯瞰する。現在の芦屋市の前身は、精進村であり、明治21年（1888）に市制・町村制が公布され、大日本帝国憲法の公布をみた翌22年に芦屋・打出・三条・津知の4村が強大し、合併することにより誕生した。江戸時代後半期、この4村は芦屋村と打出村が元領、三条村と津知村が尾崎藩領に仕分けられていたが、明治4年（1871）に幕藩制下を離れ、兵庫県管下に属して経過した。したがって、芦屋市の基盤エリアはこの4村のそれぞれの本領に基礎を置くとみ

てよいが、周辺との領界争議は、歴史的には戦国期頃より存在した。

天文24年（1555）に勃発した芦屋庄二ヶ村持山東西18町をめぐる芦屋の庄民による逃散事件は特筆に値する出来事であり、江戸時代に入って寛保2年（1742）に至って再燃し、寛延3年（1750）に裁定が下されている（山崎載許状）。困窮する社会生活や経済の不穏な時期に発生したものと見え、木々の切り倒しや柴作りによる日々の賄ひ、支えとなる深刻な様子が垣間見える。耕稼に耐える農業適地の安定は出水の多い芦屋川堤防の完備される猿丸安時時代の天保12年（1841）を待たねばならなかった。しかし、この問題は軒余曲折を経つつ近現代に持ち越されており、明治11年（1878）の図面（官民有地区別之儀に付何添付）に基づき、屈從しない西宮から熊世時・石宝殿白山権現道、とがが尾をもって境となすべしとの強い主張が昭和22年（1947）に至って「西宮市社家郷と芦屋市打出・芦屋共有山との境界」問題申入れの形で浮上した。国土地理院発行の地形図でも空白部分となって表示される両市の境界問題の龍鱗は積年のものとは言え、双方の見解の隔きも大きく、その後も数回に亘る実地の調査や視察を繰り返しているが、先年も日刊紙で根拠となっている旧い史料や絵図が話題となった。昭和33年（1958）に芦有開発をめぐって浮上し、明治11年（1878）に県令に提出した武庫郡の「官民有地区別之儀ニ付何イ」（明治時代初期）をめぐる論議が再燃している。こうした西宮市と芦屋市の境界を証証げける絵図が当時、芦屋市役所の収入役室境界内に厳重に保管されていることを知っている人は数少ない。なお、西宮市との境界の変動は別にみられ、昭和36年（1961）6月の市境上の日本住宅公団における甲南土地造成に際しての深谷町・高塚町・岩園町の一部の提供や交換行為がみられた点は記憶に留めたい。

芦屋の人口動態が激変するのは、大正10年から同14年にかけての時期と思われる。参謀本部地形図の大正12年（1923）地図は住宅の面的増加が際立っており、交通機関の飛躍的整備が要因をなし、鉄道は大正9年の阪急電鉄芦屋川停留所の設置により、主要なものは整備の完了を迎えている。昭和2年（1927）の阪神国道の完成、国道電車の敷設、続く阪神国道バスの開通もその後の変化を増幅させている。大正9年（1920）から大正14年（1925）の統計人口の大幅な変化（11,151人→19,101人）は壮盛倍加する勢いが読み取れ、女性人口の比率の高さも家事労働者の含有傾向を直接反映したものである。その後の人口変動の最も大きな画期は、阪神淡路大震災による災害の猛威を受けての結果、発生の年のうちに11,000人の人々が激減した時と考えられる。居住の難弊を克服した現在は、超克の末、人口10万都市に成らんとする勢いで増加の傾向にある。（森岡）



1 岩ヶ平刻印群 (第176地点) 2 川口寺遺跡 (第113地点) 3 打出岸遺跡 (第56地点)

第1図 本書収載の発掘調査地点分布図 1/40000

第2章 発掘調査の概要

第1節 岩ヶ平刻印群（第176地点）

1. 調査に至る経緯

兵庫県芦屋市岩岡町26-3、26-12、27、28-1（敷地面積134.27m²）において、個人住宅の宅地造成計画が進捗したが、当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群の分布範囲内であるため、地権者（個人）より文化財保護法第93条第1項に基づく発掘届出書が平成21年5月28日付で、本市教育委員会に提出された（第1・2図）。

本市教育委員会は、受理した届出書に添付された造成計画の概要と設計図をもとに内容を審査し、岩ヶ平刻印群で実施されてきた既往調査の結果と、4月23日の事前踏査から、当該地には既に刻印石1石が遺存しており、包蔵される埋蔵文化財が損壊される可能性が高いと判断した。そこで、当該敷地について埋蔵文化財の遺存状態や遺物包含層・遺構面への工事による影響などを確認し、本開発計画に対する今後の取扱いを決定する基礎資料を得るために、工事着手前に確認調査を実施する必要があることを事業者に回答した。

確認調査は、森岡秀人・坂田典彦を調査担当者とし、平成22年6月29日から7月14日までの実働7日で実施した。その間、測量および調査補助として天羽育子・住本孝太の同補助員が参加した。

発掘作業は株式会社長谷川工務店に委託した。

2. 調査地をとりまく環境

芦屋市街地北東部の山麓丘陵に、徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群および八十塚古墳群の分布範囲〔芦屋市教委2009b〕があり、かなりの部分で両遺跡は重複している。徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印



第1図 調査地近景（北東から）



第2図 調査地位位置図 1/5000

群は、六甲前山南東麓、現在の神戸市灘区・東灘区から芦屋市・西宮市西部にかけて東西6km以上の範囲におよぶ大坂城再建期（元和6〔1620〕年～寛永6〔1629〕年）の石垣用材の採石場である。その範囲の中で、割石や刻印石の分布密度、地形環境から現在6群に大別しており、当該調査地は岩ヶ平刻印群にあたる。岩ヶ平刻印群は、芦屋市朝日ヶ丘町・岩岡町・六築荘町・鰐谷、西宮市老松町・苦楽園四番町・同五番町に所在し、市街地となっている関係から、6群の中では最も土木工事に伴う発掘調査件数が多い。

既往の調査・研究の蓄積において、今回の調査地が立地するどんだん川沿いは、主要な山出しルートの一つに推定されており、河岸部や川底から割石・刻印石が数多く確認されている〔芦屋市教委2005・2006bなど〕。しかし、石曳きの労働主体については、丁場割とは異なっており、よく判っていない。

一方、重なりをもつ八十塚古墳群については、60基近い数の古墳を確認している。この古墳群は、東西700m以上、南北900m以上の範囲に分布し、阪神間の市街地では最大クラスとして周知されている。6世紀後半～7世紀後半に築造され、往時は100基にのぼる古墳があったと推定されている。墳丘形態は円形ないし楕円形で、石室構造は横穴式石室を主体とする。副葬品には、土師器・須恵器・玉類・耳環・鉄製品などが認められる。

このような歴史的環境の下、この調査では、古墳と近世採石場の有無を調べる目的で確認調査を実施した。

3. 発掘調査の概要

(1) 発掘調査の方法

今回の調査は、敷地内要所に計5基のトレンチを設

定し、埋蔵文化財の有無を確認した。当該地の確認調査を遂行するにあたって、調査地が自然地形をよく留めていることから、地形変化点を中心に意識的にトレンチを設けた（第3図）。その他、刻印石（以下、「1号石材」と表記）が、原位置を保っていることを確認する目的で、石材のまわりを掘り下げた。

それぞれのトレンチの規模と掘削面積は、1トレンチが $1.0\text{m} \times 3.0\text{m}$ で 3.0m^2 、2トレンチが $3.0\text{m} \times 7.0\text{m}$ で 21.0m^2 、3トレンチが $1.2\text{m} \times 4.5\text{m}$ で 5.4m^2 、4トレンチが $1.2\text{m} \times 3.0\text{m}$ で 3.6m^2 、5トレンチが $1.4\text{m} \times 2.5\text{m}$ で 3.5m^2 である。5基のトレンチを合わせた調査面積は 36.5m^2 で、これに1号石材周辺を掘り下げた 1m^2 弱が加わる。

発掘調査は、表土から人力で行った。発掘による排出土は、すべて仮置きし、調査終了後には埋め戻した。

測量の基準杭1（ $X=0$ 、 $Y=0$ ）は任意に打設し、測量調査におけるすべての基準点はこれを使用するとともに、平面図に記入した。基準高は、本市下水道台帳図に記載がないため、施工業者が作成した敷地平面

図に記載された標高を使用した（基準杭1≒標高30mと仮定した）。写真撮影は、35mmカラーフィルム、デジタルカメラを使用し、記録した。

すべての調査図面および出土資料、調査記録は、芦屋市教育委員会生涯学習課三条文化財整理事務所で整理し、一括保管している。

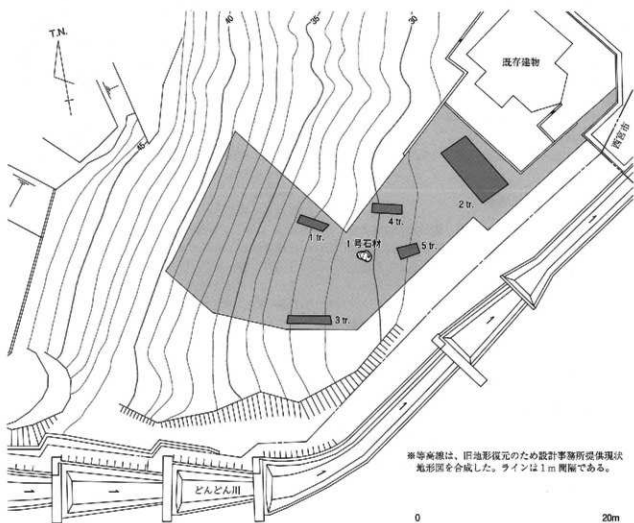
(2) 発掘調査の経過

調査期間中は梅雨時期と重なり、雨天による調査中止日が5日あった。雨天予備日である3日分を超えた7月8日には、地権者代理と連絡を取り、翌週14日（火）までの調査延長を申し入れ、許可を得た。以下に経過の詳細を日誌抄として記載する。

【調査日誌抄】

6月29日（月）曇りのち雨

本日より調査を開始した。10時より地権者代理（フジワラ設計事務所）、細井課長補佐・森岡主査・坂田嘱託で、調査開始立会を行った。ネットフェンス・防塵シート・ガードマンボックス・トイレなどの備品を



第3図 トレンチ配置図および敷地形復元図 1/400

搬入した。明日は降雨予報が出ているため、トレンチの掘削は行わず、ネットフェンスの設置とトレンチ設定箇所の除草に従事した。

6月30日(火)・7月1日(水) 雨

雨天のため、作業を中止した。

7月2日(木) 曇り

本日より掘削作業を開始した。1号石材の北側に1トレンチを設定し、表土掘削に着手した。また、敷地東端の低所部に2トレンチを設定した。調査杭1・2を打設した。

7月3日(金) 晴れ

1号石材の平面・立面・断面図の作成と、刻印の採拓(第7図)。1トレンチは竹の根が繁茂しており、思うようには掘削が進まない。表土の下には砂礫層が確認できる。2トレンチも表土掘削がほぼ終了し、下層の掘削に取り掛かる。

7月6日(月) 雨

雨天のため、作業を中止した。

7月7日(火) 曇り

1トレンチが完掘し、撮影・土層断面実測を完了した。2トレンチも完掘し、撮影を済ませ、土層断面実測は明日以降とした。

3・4トレンチを設定し、周辺の除草を行った。

7月8日(水) 雨

雨天のため、作業を中止した。

7月9日(木) 晴れ

2トレンチが完掘し、撮影・土層断面実測を完了した。3トレンチは、南高所部の表土直下で大阪層群を確認した。4トレンチの掘削を開始した。

午後、細井課長補佐・森岡主査・坂田囃託で刻印石の取扱いに関する打ち合せを行った。

7月10日(金) 雨

雨天のため、作業を中止した。

7月13日(月) 晴れ

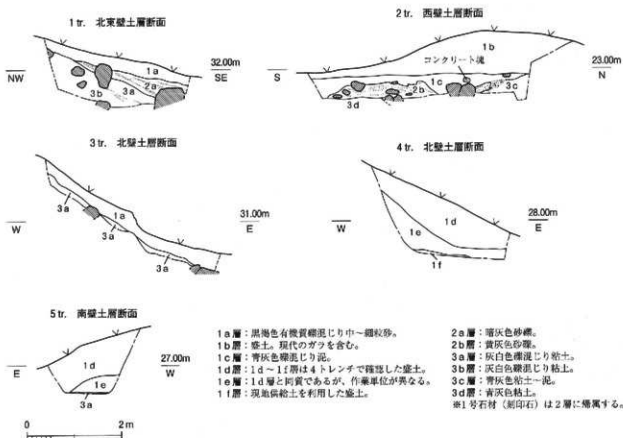
3・5トレンチが完掘し、撮影・土層断面実測を完了した。現場検証が終わったトレンチから埋め戻しに着手した。1号石材の採拓を行った。

7月14日(火) 晴れ

調査終了日。トレンチ配置図のチェックと1号石材の全形および刻印面の撮影を行った。すべてのトレンチを埋め戻し、調査道具・備品の撤収を完了した。

(3) 基本土層

設定した5基のトレンチすべてにおいて、共通する土層名を付した。土層番号は、現地表面を含む表土層を第1層とし、上から順に通し番号でアラビア数字を付した。また、同一層と認められるものでも漸次変移しており、土色・土質に違いがあるもの、異なる複数の層をセット関係で捉えたものは、アルファベットの小文字を付してまとめた。色調は視認色で表記した。



第4図 1～5トレンチ土層断面図 1/80

調査地は、ほとんど川の左岸に接しており、東に下る急傾斜地である。山林として今日まで残っていた一画で、現代の開発を免れている地域である。本地点の基本層序は、大阪層群およびその二次堆積層（3層）を無遺物層（いわゆる地山）とし、その上に段丘礫層である斜面堆積層が乗る（2層）。

近世採石場に関わる1号石材は、この段丘礫層中に含まれる1mを超える巨礫（母岩）を対象として刻印を彫ったものである。

以下に、土層観察記録を記述する。

1層…現地表面を含む近現代の表土・盛土。

1a層：腐植土。黒褐色有機質混じり中～細粒砂。竹の根など植物の根が著しい。

1b層：盛土。現代のガワを含む。

1c層：青灰色練混じり泥。大阪層群を母材とする現代の再堆積土。擁壁基礎掘削時の排出土。コンクリート塊を含む。

1d層：4トレンチで確認した盛土。1e層とは作業単位が明瞭に異なるのみで土質に変化はない。

1e層：4トレンチで確認した盛土。

1f層：4トレンチで確認した盛土。現地供給土を利用した盛土。

2層…谷や斜面地の堆積層。段丘礫層およびその二次堆積層を母材とする。1号石材は当層に帰属する。

2a層：斜面堆積層。暗灰色砂礫。2～5mm大の礫と粗粒砂から成る。10～80cm大の花崗岩が散見される。

2b層：谷筋流路充填堆積物。黄灰色砂礫。5mm以下の礫と粗粒砂から成る。10～80cm大の花崗岩亜角礫を多く含む。

3層…当層以下は無遺物層で、いわゆる地山と認識した。大阪層群およびその二次堆積層。

3a層：灰白色練混じり粘土。2mm大の礫と粘土～シルトから成る。上位にツミナが観察できる。

3b層：灰白色練混じり粘土。粘性著しい。

3c層：青灰色粘土～泥。層中に植物遺体面が複数枚観察できる。

3d層：青灰色粘土。植物遺体を若干含む。

(4) 1号石材の概要

①石材の現状と刻印の観察記録

当石材は、調査地中央付近で確認した。石材の周辺を掘り下げ、層位的に原位置を保っていることを確認した。石材自体は、2層の段丘礫層中に含まれる巨礫を母材とし、現状では3層の大阪層群上面に乗っている状況であった。調査前の現状では、刻印面のみが露呈していた。石材の全容が判るまで掘り下げると、平

面は洋ナシ形を呈し、高さも0.7m以上を測り、3t以上の重量があるものと思われる（巻頭図版1、第5・10図）。

石材の法量は、長さ1.56m、最大幅1.1mで、刻印以外の加工痕が見られない自然石である。石材種は、六甲花崗岩で、カリ長石と粗い黒色鉱物粒が顕著である。

刻印は、ほとんど川に面する自然平坦面に1個穿たれる。24cmの正円に「鉤一」が彫られ、施刻方法は、刻印面が露呈していたため、岩肌の風化は著しく、確定はできないものの、詳細観察から点彫りを集積した線彫り刻印であろう。

②石材の機能的位置付け

ほとんど川が岩ヶ平刻印群の中で石材搬出ルートの一つに挙げられることは既往調査で検討されており〔藤川1969・1972・1991、芦屋市教委2002・2005・2006a・2006bなど〕、1号石材の機能的位置付けとしては、勝示石と考えられる。まず一つ目として刻印以外の加工痕がないこと、二つ目として本敷地内で欠穴痕をもつ割石やコッパが検出されず採石行為が行われていないエリアであること、三つ目として搬出ルートである河道に面して刻印が穿たれていることなど、幾つかの理由が挙げられる。

③正円に「鉤一」刻印について

1号石材の刻印「㊦」は、岩ヶ平刻印群では鳥取藩池田家の採石領域内で数多く確認されている。池田家の推定採石領域は、岩ヶ平刻印群の中で中央から北西域を占め、小浜藩松家や松江藩堀家と隣り合う位置関係にある。

刻印の大きさは、類例をあたと、外円径が20～38cmと幅が見られるものの、ほぼ通常のサイズに該当する。外円内の「一」は末尾に鉤状のカエリがつく書体と、オサエで終わる書体があり、本例は前者である。

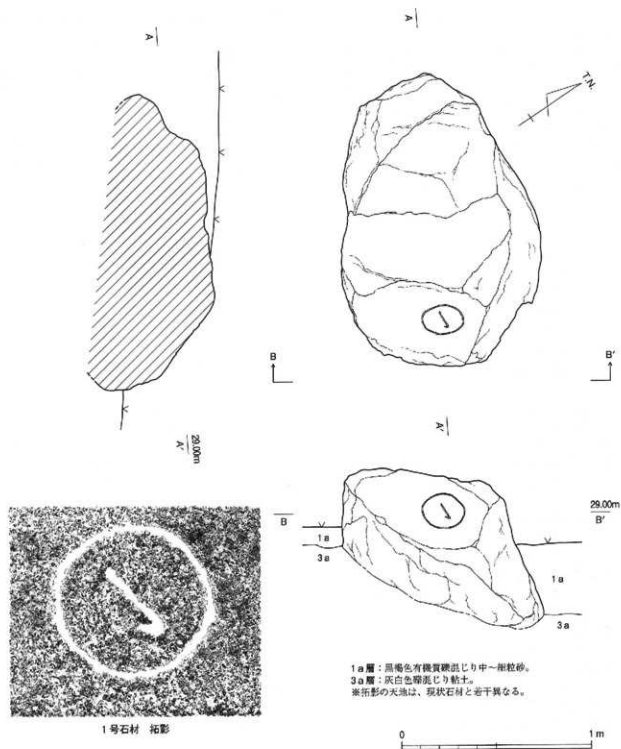
(5) トレンチの概要

今回の調査では、損壊部分を中心に5基のトレンチを設定し、古墳と近世採石場の遺構・遺物の確認を行った。その結果、1号石材以外の遺構・遺物は検出されなかった。

4. 小 結

調査の所見を推測も踏まえつつ、要点を列挙することで小結にかえたい。

まず、本地点の地形的位置付けとして、石曳き道に推定されているほとんど川沿いに立地し、さらに、大規模な石切工場跡が確認された岩ヶ平刻印群第84地点C地区〔芦屋市教委2005〕と同一斜面の裾部に位置する。急傾斜地であっても採石を行っている例は数多く確認されているが、本地点の立地から推測すると、あ



第5図 1号石材平面・立面・断面図 1/20、刻印拓影 約1/6

くまでも石材搬出ルート上の通過点であり、いずれのトレンチでも採石行為の証左は得られていない。

次に、1号石材が勝示石であろうことは先述したが、勝示の意味・対象としては、落ごとの採石領域を分かち刻印ではなく、あくまでも石材搬出作業上での目印であろう。すなわち本ルートを使って石材を搬出する各藩から選出された人夫の持ち場などを示していた可能性も十分に考えられる。

本地点は西宮市との市境であり、どんどん川は西宮市域を流下する夙川に取り付く。いわゆる夙川ルートと称される石曳き道の一つで〔芦屋市教委2005〕、東六甲採石場の中でも石材搬出率が高いルートである。各藩が乗り入れる本ルートでは、石曳き作業も協働することが推測され、今後、ルート沿いで本地点のような採石丁場を伴わない単独刻印石の点的な立地に注目していく必要がある。（坂田典彦・森岡）



第6図 調査地から西宮市街を望む



第7図 探拓風景



第8図 1tr. 完掘状況 (北西から)



第9図 2tr. 完掘状況 (南東から)



第10図 1号石材 (どんどん川に面した自然平坦面に穿たれた刻印)

第2節 芦屋廃寺遺跡（第113地点）

1. 調査に至る経緯

芦屋市三条町81番地4に所在する当該地（敷地面積138.16 m^2 ）において、木造2階建個人住宅新築工事の計画が発生したが、当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である芦屋廃寺遺跡（平成16年3月刊行、兵庫県遺跡地図番号070033）の分布範囲内であることから、文化財保護法に基づく届出が、平成21年（2009）5月19日に地権者より本市教育委員会に提出された。本市教育委員会は、受理した届出書をもとに建築計画の内容を審査し、工事によって遺物包含層や遺構が損壊を被る可能性を勘案して、これらの埋没状況を確認すべく、本市教育委員会社会教育部生涯学習課文化財担当主査森岡秀人（学芸員）と担当竹村忠洋（学芸員）・同担当副託坂田典彦（学芸員）を調査担当として5月25日に確認調査を実施した。調査は住宅建設部分を対象とし、2ヶ所にトレンチを設け、建物基礎の掘削深度に合わせて設計G.L. -112cmまで掘削した。なお、当該地は北西から南東方向に下る緩傾斜地に立地しているが、前面道路際には石垣を組んで一段高くしており、現状地盤はほぼ水平である（第1図）。

確認調査の結果、車庫建設部分に接するように設定した第1トレンチでは、G.L. -35cmから下に、土師器や須臾器を包蔵する遺物包含層を検出した。このため、車庫の建設に伴って埋蔵文化財が損壊を被ることが明らかになったので、遺物包含層の年代や遺構面の内容を確定し、有効な記録保存を行う必要が生じた。

そこで、車庫建築部分（29.1 m^2 ）を対象として、7月6日～23日（実働日数9日間）にかけて、森岡と本市教育委員会社会教育部生涯学習課文化財担当副託白谷朋世（学芸員）を調査担当として、発掘調査を実施した。調査補助員として須田佑子が従事し、発掘作業は有限会社和田発掘調査所に委託した。



第1図 調査地全景（南西から）



第2図 調査地位置図 1/5000

2. 調査地をとりまく環境

芦屋廃寺遺跡は、阪急芦屋川駅の西方約500m付近を中心として、東西200m、南北250mに及ぶ範囲に広がり、現在の三条町、三条南町、西山町、西芦屋町にまたがっている。平成23年（2011）2月15日現在、119次の調査地点を数え（本発掘調査、確認調査、工事立会、慎重工事を含む）、縄文時代早期から近世にわたる複合遺跡であることが明らかになっている。芦屋廃寺遺跡の立地は、六甲前山麓前面の洪積台地直下に形成された芦屋川扇状地上にあり、当遺跡に近接して、西山町遺跡、月若遺跡、寺田遺跡などが分布している。

今回の調査地点は、六甲前山麓部の標高45m付近に位置しており、芦屋廃寺遺跡の北西端に位置する（第2図）。ただし、この地点は、平成13年度に作成された『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図』では、芦屋廃寺遺跡より道路を挟んで北側で、かつ冠遺跡より道路を挟んで西側の遺跡範囲外とされた場所であった〔芦屋市教委2001〕。ところが、平成20年に、当該地の南東隣接地（芦屋廃寺遺跡第111地点）において、埋土に土師器を含む土坑や住居跡が確認されたことから遺跡の範囲内であると認識され、芦屋廃寺遺跡の範囲内に組み込まれたものである（第2図）。

なお、当該地の南西隣接地は、平成21年8月に芦屋廃寺遺跡第116地点として発掘調査を実施した地点で、太平洋戦争時の防空壕や店内式併行期の堅穴住居、弥生時代～中世の土坑や溝等が検出されている。この調査地点は、調査費の支出形態の違いから、本書の報告対象調査地点ではないが、第113地点との関わりが深いので、ここにその概略を述べておく。

第116地点は、調査に伴う排土の仮置き場の都合から、西寄りの南北方向に細長いトレンチ（1トレンチ）と北東部の方形トレンチ（2トレンチ）とに分け、反転掘削を行う形で調査を進めた。

第116地点の基本層序は、第113地点とは直接対応しておらず、現表土（攪乱含む）が0層、1・3層が耕作土、2・4層が耕作土床土、5層がSD01埋土、6層が黒色を呈する砂質土、7層が黒色を呈する粘性砂質土、8層が7層と9層の漸移層、9層が灰褐色の粘性砂質土、10層が褐色の砂、11層が灰褐色の粘性砂質土である（第9図）。6層以下は傾斜面に形成された自然堆積層と考えられる。8層は、傾斜地における流出堆積層で多様であるが、1トレンチの北部では、9層上面に形成された遺構の埋土（SH01）と見なした部分がある。

1トレンチでは、7層上面と7層下面（8・9・10層をベースとする）のあわせて2枚の遺構面を検出した。また、南西端では現表土下で直径90cmほどのコンクリート管を転用した防空壕が検出された（第4図）。この防空壕に伴って陶器や磁器、ガラス瓶、青銅製品、鉄製品、セルロイド製品、硝子などの近代資料が出土している。

2トレンチでは、6層上面・6層中面・6層下面（概ね8層上面）・9層上面の合計4枚の遺構面を検出した。2トレンチの第1・2遺構面が1トレンチの第1遺構面と、2トレンチの第3・4遺構面が1トレンチの第2遺構面と概ね対応するので、2トレンチの遺構面を基準とし、1トレンチの遺構面と併せて記述す

る（第7・8図）。なお、個々の遺構の量や埋土の様相、遺物の内容は表1に一括している。ちなみに、第116地点の第3・4遺構面は、第113地点の第4遺構面に相当すると考えられる。

第1遺構面では、ビット5基（SP02・03・05・21・22）を確認した。これらの埋土は耕作土や盛土に似たものが多く、上位の耕作や攪乱に伴うものが大半であると判断した。

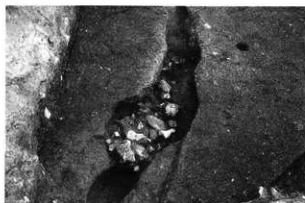
第2遺構面では、1トレンチから2トレンチに続く溝1条（SD01）と土坑1基（SK11）、ビット7基（SP01・04・06～09・23）を確認した。このうち、SD01は、褐色（10YR6/1）～灰黄褐色（10YR6/2）～黄灰色（2.5Y6/1）～灰黄色（2.5Y6/2）礫・砂混じり土を埋土とし、傘大～人頭大の礫を伴っていた。また、断面形はU字形であるが、随所でオーバーハングしており、一過性の流水堆積によって埋没したと見られる（第5図）。完形の須恵器杯身や杯蓋、高杯など、五世紀代の土師器・須恵器がまとまって出土しているが、さらに九世紀以降の土師器皿や中世の瓦器碗、サヌカイト製の石鏝もみられる（第10図1～6・13）。よって、五世紀代や九世紀代の遺構埋土や包含層を巻き込んで流下した中世洪水層と判断した。また、SK11からは平安時代の土師器や須恵器が出土している（第10図7・8）ので、当該期の遺構の可能



第3図 第116地点1トレンチ南部（北から）



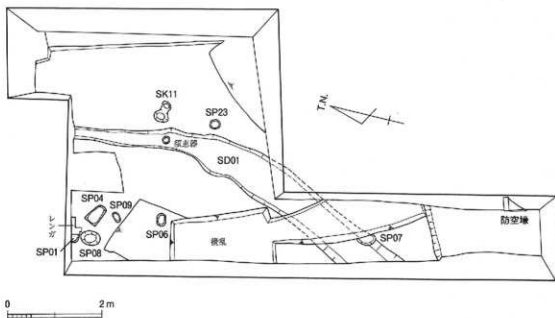
第4図 第116地点SH02と防空壕（南から）



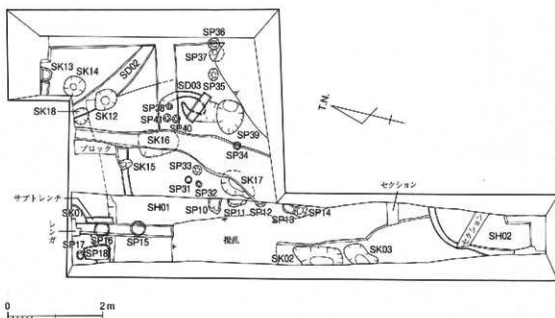
第5図 第116地点2トレンチSD01（南から）



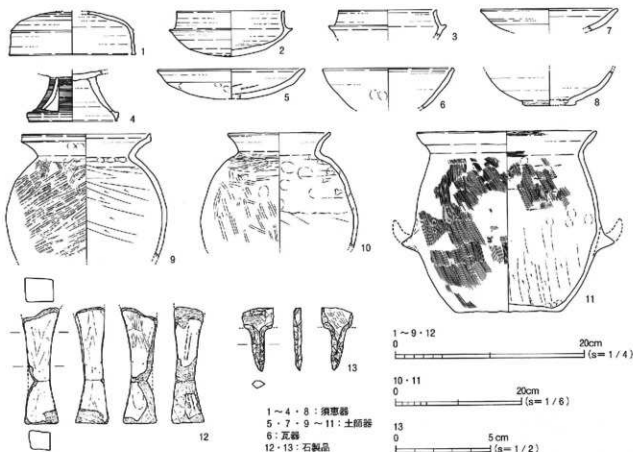
第6図 第116地点SD03（西から）



第7図 第116地点第2遺構面平面図 1/80



第8図 第116地点第3・4遺構面平面図 1/80



第10図 第116地点出土遺物実測図

性がある。ビットからは、弥生土器や土師器、須恵器の小片が出土している。

第3遺構面は、8層上面で検出した溝1条(SD02)・土坑5基(SK02・03・12~14)・堅穴建物跡1棟(SH02)に、8層の分布域よりも北側で検出した土坑1基(SK01)を加えた遺構面である。ただし、調査区北部の8層は、9層上面に形成されたSH01の埋土と認識しているので、第3遺構面で検出した遺構にはSH01と対応関係を持つものが含まれている可能性がある。その一方で、1トレンチ南部で確認した8層は、土質は似ているものの、調査区北部の8層と同一層ではなく、むしろ先行して堆積したものと見るべきである。SK01は、1トレンチ北西端で検出した遺構で、残存率の高い奈良時代の土師器を伴っている(第10図11)。一方、SD01直下で検出したSK02・03は、弥生時代~古墳時代の土器を多く含んでいた(第3図)。SK02からは壺・甕(第10図10)が、SK03からは壺・甕・高杯などが出土している(第10図9)。また、SH02は、床面北西隅の南北210cm、東西100cmの範囲が検出されたのみであるが、幅10~15cm、深さ30cmの壁溝を伴っており、この壁溝が弧を描いていることから、隅丸方形の堅穴建物跡と推定している(第4図)。1トレンチ西壁沿いでは、壁溝埋土の上に焼土

や炭化物を含む土(第9図②・③層)が分布していたことから、この場所を即座に竈の設置場所と見るには情報が不足しているものの、造り付けの竈を有する堅穴住居と想定できる。ここからは、弥生土器片とともに庄内式併行古段階の土器が出土していることから、この時期の遺構と判断した。

第4遺構面では溝1条(SD03)・土坑4基(SK15~18)・堅穴建物跡1棟(SH01)・ビット20基(SPI0~18・31~41)を確認した。SH01は、その北辺が1トレンチから2トレンチにかけて長さ3.5mにわたって直線的にのび、2トレンチ北部で直角に曲がる遺構で、遺構底がほぼ水平であることから、方形の平面プランをもつ堅穴住居と判断した。しかし、その南辺は不明である。また、検出した他の遺構は、SH01の範囲内や近接した位置に多く見られるので、SH01に直接関わりをもつ可能性がある。SD03は、中心部に据えた礎を取り巻くようにのびる浅い溝状の遺構で(第6図)、礎以北を中心として鉄の微細片が分布していた。中央部の礎そのものに明確な被熱痕跡は確認できなかったが、簡易な鍛冶炉跡かもしれない。さらに、SH01に近接して、砥石(第10図12)が出土していることから、SH01の性格を鍛冶工房と推定している。なお、SH01の時期については、方形プランと想定さ

れることや出土遺物の様相から考えて、SH02よりは新しく、庄内式併行中段階墳と推定している。

以上のことから、第1遺構面は近世以降の遺構面、第2遺構面は古代～中世の遺構面といえる。また、第3遺構面・第4遺構面は、傾斜面に堆積した8層が多様であるため、概ね第3遺構面が第4遺構面より新しいとはいえないが、概ね弥生時代後期～奈良時代の遺構面と捉えることができる。

3. 発掘調査の概要

(1) 発掘調査の方法

今回の調査は、半地下式の車庫の建設によって損壊を受ける部分に限り、東西7.9m、南北3.0mの長方形区画（「南区」と呼称）とその北東側の東西1.4～1.6m、南北3.6mの台形区画部分（「北区」と呼称）を調査対象として、総面積29.1m²の調査区を設定した（第11図）。現表土から4層までは重機を用いて掘削し、それ以下は人力によって掘削した（第12図）。排土は重機を用いて調査区の西側に仮置きし、調査後に埋め戻しを行って現状に復した（第29図）。

記録写真は35mmカラーフィルムとデジタルカメラを併用した。実測図は調査区位置図、土層断面図、調査区平面図を作成した。設計G.L.は、調査地の東側道路に設置された下水道のマンホール上面（T.P. 44.97m）+130cmであるので、水準測量によって得た、下水道のマンホール上面+240cm（T.P. 47.37m）を調査時の基準高として用いた。なお、設計G.L.は標高46.27mに相当する。

(2) 調査の経過

平成21年7月6日～23日に実施した本発掘調査の実働日数は9日であった。ちなみに、調査期間中の7月22日は、日本国内では46年ぶりに既既日食が観察できる日であり、近畿地方においても日食率約80%の部分日食であったため、日中でありながら11時頃をピークとしてかなり薄暗くなった。

6日には、掘削範囲と掘削レベルを確認する開始立会を経て調査を開始した。重機を用いて表土や近現代



第12図 作業風景

耕作土を除去し、調査区南東部の攪乱掘削後に人力掘削に移行した。なお、南区の西壁・南壁沿いや北区の西壁・北壁沿いに適宜サブトレレンチを設けて遺構や土層の状態を確認した。

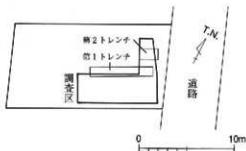
遺構面は4面あったので、上から順に「第1遺構面」「第2遺構面」…「第4遺構面」と呼称した。各遺構面は人力掘削によって検出し、図面の作成や写真撮影、遺構掘削を行った。ちなみに、第1遺構面は13日に検出し、第2遺構面は14日に検出した。第3遺構面は14日～15日に調査を行い、16日～23日にかけて第4遺構面を調査した後、重機により埋め戻しを行った。旧状に復してから現場を撤収し、調査を完了した。

なお、南区の工事掘削深度はG.L. -130cmであったが、北区北寄りの工事掘削深度は南区よりも浅いG.L. -100cmであったため、この範囲で検出できた遺構面は、第2遺構面までである（第13～15図）。南区の南壁と北区の西・北壁について記録を取った。

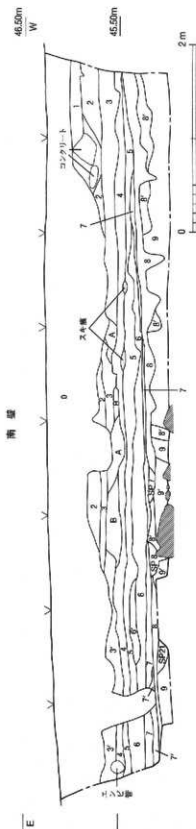
(3) 調査区の層序

本発掘調査では、確認調査時の土層番号を踏襲し、さらに下位については、新たな土層番号を追加した。基本的な層序は、現表土を0層として、上から順に土層番号を付している。1層が宅地化時の整地層、2・4・6層が耕作土、3・5層が床土、7・8層が自然堆積層、9層が基盤層である（第13～15図）。7・8・9層の上面は北西から南東に緩傾斜する斜面堆積であるのに対して、6層以上は水平に堆積している。このため、6層は8層上面のレベルの低い部分を埋めるように分布していて、調査区の西部までは広がっていない。なお、同一の性格を有するものの、土質や土色に若干の違いがある部分を区別するため、土層番号に「」を付して表記している。また、南壁に見られたブロックはアルファベットで、遺構埋土は遺構名で記し、遺構埋土の土色等については、表2に表示している。これらの土層の色調は、『新版 標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修）に準じながら、適宜、視認色を用いている。

0層は、コンクリートがらを含む攪乱土で構成され



第11図 調査区配置図 1/400



- 0層 コンクリートがらを含む褐色土で構成された埋戻土。
 1層 黄褐色(2.5Y 8/6)～明黄褐色(2.5Y 6/6)粘土質砂土。丸山段の粘土質砂土を含む埋戻土。
 2層 灰白色(2.5Y 8/1)～灰白色(7.5Y 6/1)粘土質中粒砂。埋戻色は黄灰色。近現代耕作土。
 2'層 灰白色(5Y 8/1)粘土質中粒砂。土質は2層と一致する。
 3層 灰黄色(2.5Y 7/2)～灰黄色(2.5Y 7/4)粘質土。埋戻色は黄灰色。近現代の粘土。
 3'層 灰白色(2.5Y 7/1)～浅褐色(2.5Y 7/4)粘質土。土質は3層と一致する。
 4層 灰白色(2.5Y 7/1)～褐色(2.5Y 7/3)粘土質粗粒砂。埋戻色は黄灰色。近現代の耕作土。
 5層 灰黄色(2.5Y 7/3)～灰黄色(2.5Y 7/3)粘土質粗粒砂。埋戻色は黄灰色。近現代の耕作土。
 6層 黄褐色(10YR 6/1)シルト混じり粗粒砂。埋戻色は灰色。中粒～近粒の粘質土。

- 6'層 黄褐色(10YR 6/1)～黄褐色(2.5Y 6/1)シルト混じり粗粒砂。土質は6層と一致する。
 7層 灰白色(10YR 7/2)～10YR 7/4)シルト混じり粘土。埋戻色は黄褐色。
 7'層 灰白色(10YR 7/1)シルト混じり粘質土。土質から、粘質土の可能性も考えられる。
 8層 黄褐色(10YR 6/1)～10YR 4/1) 黄混じり粘質砂土。埋戻色は黒色。
 8'層 8層と9層の間の層。
 9層 灰黄色(10YR 6/2)～灰黄色(10YR 6/4)黄混じり中粒砂。埋戻色は黄褐色。丸山段の埋戻砂。
 9'層 灰黄色(10YR 6/2)～灰黄色(10YR 6/4)黄混じり中粒砂。埋戻色は黄褐色。9層よりも砂質の混入が多く、不安定。
 A層 4層+灰化層。
 B層 3層+灰化層+灰化層。

第13図 土層断面図 1/40



第14図 断面図



第15図 断面図

た現表土である。1層は、黄色(2.5Y 8/6)～明黄褐色(2.5Y 6/6)粘性砂質土で、地山起源の粘土ブロックを含む土である。2層は灰白色(2.5Y 8/1～2.5Y 7/1)～灰色(7.5Y 6/1)粘土質中粒砂。視認色は青灰色で、近現代耕作土である。3層は、灰黄色(2.5Y 7/2)～浅黄色(2.5Y 7/4)粘質土で、視認色は黄灰色を呈する。近現代の灰白色である。4層は、灰白色(2.5Y 7/1)礫混じり細粒砂で、視認色は青灰色である。弥生土器ないし土師器・須恵器の細片を含むとともに、上面で施釉陶器片を出しており、近世以前の耕作土と考えられる。5層は、浅黄色(2.5Y 7/3)～にぶい黄褐色(10YR 7/3)粘土質粗粒砂。視認色は黄灰色で、4層に伴う近世以前の床土である。弥生土器ないし土師器・須恵器に加えて、瓦器や中国白磁片を含む。6層は、褐灰色(10YR 6/1)シルト混じり細粒砂で、視認色は灰色である。弥生土器ないし土師器・須恵器や中国青磁片を含む中世～近世の耕作土である。7層は、にぶい黄褐色(10YR 7/2～10YR 7/4)シルト混じり粘土で、東ほど砂質土化している。視認色は黄色で、弥生土器ないし土師器・須恵器の細片を含む。8層は、褐灰色(10YR 6/1～10YR 4/1)礫混じり粘性砂質土で、上端はマンガンが沈着している。視認色は黒色を呈する特徴的な土層で、灰色砂や有機質を含む。弥生土器ないし土師器・須恵器の細片を包含する。9層は、灰黄褐色(10YR 6/2)～にぶい黄褐色(10YR 6/4)礫混じり中粒砂で、視認色は灰褐色である。有機質を含み、褐灰色(10YR 6/1)を呈する部分がある。灰色砂も含む。不安定な土質で、地山起源の再堆積層といえる。なお、SP05・15・17を貫くように断割トレンチを設けて9層の状態を観察したところ、大小さまざまな亜角礫や亜円礫を含んでいることが明らかになった。

(4) 遺構

今回検出した遺構面は、5層上面(第1遺構面)、6層上面(第2遺構面)、7層上面(第3遺構面)、8・9層上面(第4遺構面)の合計4面である。以下に遺構面ごとの様相を記す。なお、個々の遺構の法量や埋土の様相、遺物等は表2に記している。

第1遺構面では、南北方向の犁痕群とビット1基(SP01)を検出した。4層と5層の混じった土を埋土とする犁痕群は、土師器や須恵器の極小片を含んでいた。SP01は、北区の西壁沿いで確認した遺構で、犁痕群と同様に4層と5層の混じった土を埋土としており、須恵器杯小片を出しているが、単独のため、性格は不明である。ベースの5層に瓦器や中国製白磁片を含んでいることや、殊更年代の下る遺物を包含していないことから、近世以前の耕作地と判断した。

第2遺構面では、第1遺構面と同様に南北方向の犁痕群を検出した(第16図)。5層を埋土としており、

犁痕の方向や規模は第1遺構面と大差ない。南区の西部に6層は分布していないので、水平に掘削した結果として7・8層が検出された部分がある。犁痕からは、土師器や須恵器の極小片とともに、瓦器や中国製白磁片も出土しており、5層の遺物相も考慮して、中世～近世の耕作地と判断した。

第3遺構面では、第1・2遺構面と同様に南北方向を指向する犁痕群と、犁痕と切り合い関係を有するビット群(SP02～05)を検出した(第17・18・20・21図)。犁痕は6層を埋土としており、遺物としては、土師器・須恵器の極小片を包含するのみであるが、その方向性や形態から中世のものと判断した。一方、ビットは、灰黄色粘質土の埋土をもつSP02・03と、黒褐色の埋土をもつSP04・05の二群に分かれる。出土遺物はいずれも土師器片・須恵器片で、SP03から出土したものの中には、土師器蓋片や須恵器杯片が見られる。ただし、SP02・03は浅く、遺構底は8層に達するものの、埋土は6層と7層を交えたもので、中世に下る可能性がある。これに対して、SP04・05は8層を掘り込んでおり、上位埋土は7層を多く含むにぶい黄褐色～にぶい黄褐色～黄褐色礫混じり砂質土、下位埋土は8層と7層の混じった灰黄褐色～褐灰色シルト質土であるので、古墳時代以前に遡るものと推測される。

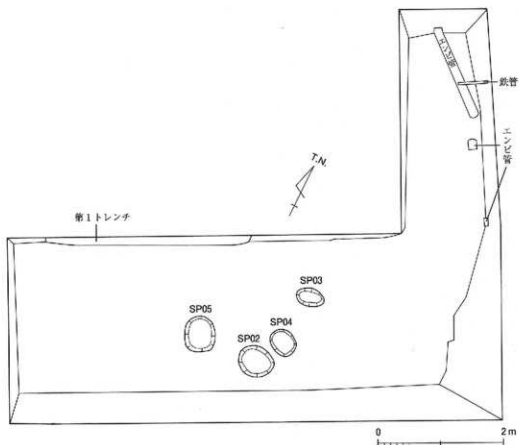
第4遺構面では、西部に炭化層が広がり、一部に上



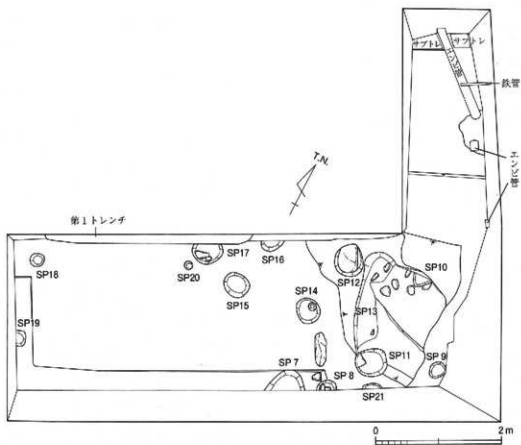
第16図 第2遺構面発掘状況(東から)



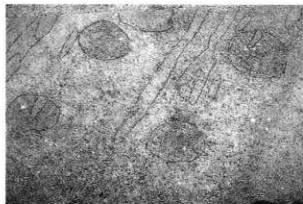
第17図 第3遺構面検出状況(西から)



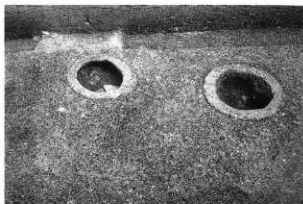
第18図 第3遺構面平面図 1/60



第19図 第4遺構面平面図 1/60



第20図 第3道橋面検出状況（北から）



第21図 SP04・05発掘状況（北から）



第22図 第4道橋面発掘状況（西から）



第23図 第4道橋面中央部発掘状況（南から）



第24図 SP08掘削状況（北から）



第25図 SP11掘削状況（北から）



第26図 SP12掘削状況（南から）



第27図 SP17掘削状況（南から）

位遺構面に関わる痕跡が見られるが、東部を中心にピットを多数検出した(SP07~21)(第19・22~27図)。SP08・14・17には柱痕が認められる。SP08・11・12・16は遺構底に自然礫が見られる。人為的に入れた根石にも、9層中にもともと含有されている礫を根石に活用したようにも見える。出土遺物は弥生土器ないし土師器の小片が多いが、SP18からは小片ながらも磨滅の少ない須恵器杯蓋片(第28図4)が出土している。このような遺物の様相や、近接地における調査知見から、弥生時代後期~古墳時代の掘立柱建物群の存在が推定できる。

(5) 遺物

今回の調査で出土した遺物は、27㉔コンテナ1箱である。その内訳は、弥生土器ないし土師器・須恵器・瓦器・陶器・磁器等である。

瓦器・陶器・磁器(中国白磁・中国青磁)といった中世以降の遺物は、6層から上の土層や塚頂土層に含まれる。須恵器は、9層を除く各層から出土しており、概ね古墳時代のもものが多く、4・5層から出土したものは磨滅が著しく、6層以下は磨滅度が低い傾向が看取される。弥生土器ないし土師器も9層を除く各層から出土しているが、磨滅や劣化の甚だしい小片ばかりで、器形や時期が特定できるものはなかった。

第28図の1~3は土師器、4~7が須恵器である。

1・2は、南区8層から出土した遺物で、甕の一部である。外面にタタキ調整、内面にはヘラ削りのオナデが施されている。全体的に胎土が粗く、焼成もやや不良である。調整方法などから考えると、庄内式併行期(3世紀頃)のものであろう。3は、南壁沿いサブトレの5~7層から出土した土質土器の皿である。色調は、白色系で濃褐色を呈している。口縁端部が丸く収まり厚みも均等で、器高が1.5cm程度になると考えられる。同層から青磁や白磁なども出土しており、それらの年代も合わせて考えると12世紀頃のものと思われる(小森2005)。

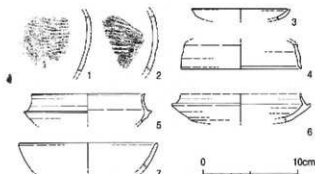
4は、SP18から出土した杯蓋である。口縁端部に段差があり、肩部が一部欠損しているので明確ではな

いが突出傾向がみられる。5世紀後半のものであろう。5・6は杯身である。5は南区西寄り4層からの出土で、口縁端部が薄く外反傾向にあり、立ち上がりは長く、受け部は短くはほぼ水平に収まる。5世紀前半の杯身の傾向を多くもつと言える。6は、南区東寄りから北区の2~3層からの出土である。胎土・焼成はかなり良好で、5と比べると立ち上がりは短く、受け部は少し傾斜をもっていて丸く収まる。6世紀前半のものであろう。7は、1層ないし掘乱からの出土である。口縁端部は厚く丸味をもって収められ、少し外反している。東播系の碗で、中世の遺物である。

4. 小 結

今回の調査によって、弥生時代~近世の遺構面を確認した。古墳時代以前については、柱穴が集中することから、掘立柱建物の存在が想定できる。ただし、隣接する第116地点では、隅丸方形や方形プランの堅穴建物跡が検出されているので、今回確認した柱穴が、同様の建物に伴う可能性も考えられる。なお、当該地で確認した第4遺構面の検出レベルはT. P. +45.1m程度で、この遺構面に対応する第116地点第3・第4遺構面の検出レベルはT. P. +45.0~45.2mであるので、南に下る傾斜の緩やかな地点に集落が営まれていたことが分かる。また、第116地点で、耕作痕以外の古代や中世の遺構が検出されていることから、当該地にもかつては同様の遺構が展開していたことは想像に難くない。第116地点の第2遺構面の検出レベルはT. P. +45.3~45.5mであるが、当該地ではこのレベルで耕作土の6層が検出されている。当該地は、東側の谷筋に面しているので、これに沿っていち早く耕作地として拓かれたことで、これらの遺構面は削平されてしまったのだろう。また、中世における耕作地化後、近現代に宅地化されるまでの長年にわたって、谷地の耕作地として機能したことも明らかになった。

今回の確認調査によって、その記録保存は完了したといえるので、計画通り、建築工事に着手して差し支えないと判断した。(白谷朋世・天羽育子)



第28図 出土遺物実測図 1/4



第29図 現状復旧状況(東から)

表1 芦屋廃寺遺跡第116地点遺構観察表

SP (ビット)

番号	平面形	法量 (cm)	土	出土遺物	備考	トレンチ・遺構面
01	(扇形)	半径約15×深さ9.9	褐灰色 (7.5YR 4/1～10YR 4/1)～灰黄褐色 (10YR 4/2) シルト質土。暗灰色を呈し、少し褐色土混じる。	土師器	北壁にかかり、約1/4検出。円形と推定。	1-1
02	(半円形)	直径45×深さ13.3	灰黄色を呈する硬泥じり砂。攪乱直下のために汚れている。	—	近世以降。東壁にかかり、約1/2検出。円形と推定。	1-1
03	円形	直径30×深さ13.1	灰黄色～にぶい黄色を呈する粘土。芦屋廃寺遺跡第113地点の盛土に似る。	土師器	近世以降。	1-1
04	(略長方形)	長辺45×短辺30×深さ3.6	褐灰色 (7.5YR 4/1～10YR 4/1)～灰黄褐色 (10YR 4/2) シルト質土。暗灰色を呈し、少し褐色土混じる。	土師器・須恵器碎片	SP03に一部切られる。	1-1
05	楕円形	長径45×短径30×深さ5.4×	黄灰色を呈する砂質土。近代耕作土+盛土。	土師器・鉄片・土管	近世以降。SD01を一部切る。	1-1
06	楕円形	長径30×幅18×深さ8.8	褐灰色 (7.5YR 4/1～10YR 4/1)～灰黄褐色 (10YR 4/2) シルト質土。暗灰色を呈し、少し褐色土混じる。	土師器	攪乱範囲内で検出。	1-1
07	(半円形)	直径40×深さ21.9	① 褐灰色 (10YR 6/1～10YR 5/1)～灰黄褐色 (10YR 6/2～10YR 5/2) 粗砂泥じり砂質土。やや不均質。② 褐灰色 (10YR 6/1)～灰黄褐色 (10YR 6/2) 細砂質土。	弥生土器・土師器・須恵器	東部を攪乱に切られ、SD01を一部切る。	1-1
08	楕円形	長径43×短径30×深さ6.9	褐灰色 (10YR 6/1～10YR 5/1～10YR 4/1～7.5YR 4/1) 細砂質土。	弥生土器	—	1-1
09	楕円形	長径25×短径15×深さ3.3	褐灰色 (10YR 6/1～10YR 5/1)～灰黄褐色 (10YR 5/2) 細砂質土。かなり均質で粒子は細かい。	—	—	1-1
10	(不定形)	長径30×短径25×深さ7.0	褐灰色 (10YR 4/1)～黒褐色 (10YR 3/1～10YR 3/2) 細砂質土。	—	SP14・17の埋土に似る。東壁にかかる。	1-2
11	(楕円形)	長径40×短径15×深さ8.9	褐灰色 (10YR 4/1)～灰黄褐色 (10YR 4/2)～にぶい黄褐色 (10YR 4/3) シルト質土。	—	SP13と埋土共通。東壁にかかる。	1-2
12	(方形)	長辺10×短辺6.0×深さ7.0	褐灰色 (10YR 4/1)～灰黄褐色 (10YR 4/2) シルト質土。	—	東壁にかかる。	1-2
13	(楕円形)	長径30×短径20×深さ11.2	褐灰色 (10YR 4/1)～灰黄褐色 (10YR 4/2)～にぶい黄褐色 (10YR 4/3) シルト質土。	—	SP11と埋土共通。東壁にかかる。	1-2
14	(略菱形)	長径30×短径20×深さ24.2	褐灰色 (10YR 4/1)～黒褐色 (10YR 3/1～10YR 3/2) 細砂質土。	弥生土器	SP10・17の埋土に似る。SP13に切られ、東壁にかかる。	1-2
15	円形	直径30×深さ1.2	褐灰色 (10YR 5/1～10YR 4/1)～にぶい黄褐色 (10YR 5/3) 砂質土。	—	—	1-2
16	円形	直径33×深さ0.2	黒褐色 (10YR 3/1) 粘性砂質土。	—	サブトレンチに東部を切られる。	1-2
17	円形	直径17×深さ12.2	黒褐色 (10YR 3/1～10YR 3/2)～黒色 (10YR 2/1) 粘性細砂質土。花崗岩風化殻を含む。7層に類似する。	—	SP14・17の埋土に似る。SK01の範囲内で検出。	1-2
18	(円形)	直径45	灰黄褐色 (10YR 6/2～10YR 5/2) 粘質土。9b層+7層。	—	SK01にかかる。	1-2
21	円形	直径40×深さ13	灰黄褐色 (10YR 6/2) 硬泥じり砂質土。マングラン沈着。耕作土の混入あり。	土師器・須恵器	—	2-1
22	円形	直径35×深さ9	灰黄色 (2.5Y 6/2) 粘性砂質土。礫の含有は少ない。耕作土の混入あり。	土師器・須恵器	—	2-1
23	円形	直径20×深さ10	褐灰色 (10YR 4/1)～灰黄褐色 (10YR 4/2) 細砂質土。	土師器	—	2-2
31	円形	直径15×深さ4.8	6層に似た砂質土～シルト質土が主体。	—	—	2-4
32	楕円形	長径15×短径10×深さ8	6層に似た砂質土～シルト質土が主体。	土師器	—	2-4
33	円形	直径20×深さ8.6	7層類似層。	土師器	—	2-4
34	円形	直径20×深さ0.4	灰褐色 (7.5YR 5/2～7.5YR 4/2)～褐色 (7.5YR 4/3) 粘性砂質土。炭化材・炭土を含む。8層類似層。	土師器	—	2-4
35	円形	直径25×深さ16.8	7層類似層。	—	—	2-4
36	円形	直径27×深さ2.5	7層類似層。	土師器	—	2-4
37	(隅丸方形)	長辺30×短辺20×深さ10.2	7層類似層。	—	SP36に一部切られる。	2-4
38	円形	直径13×深さ5.7	褐灰色 (7.5YR 5/1)～灰褐色 (7.5YR 5/2)～にぶい褐色 (7.5YR 5/3～7.5YR 5/4) シルト質土。炭化物を含む。	土師器・須恵器	上層遺構と考えられる。	2-4

番号	平面形	法 量 (cm)	埋 土	出土遺物	備 考	トレンチ・遺構面
39	楕円形	長径70×短径55×深さ8.3	掘り方：7層に8層混入。柱穴：7層類似層	土師器		2-4
40	円形	直径17×深さ36.9	褐灰色 (10YR 4/1) ～灰黄褐色 (10YR 4/2) ～黒褐色 (10YR 3/2) シルト質土。	—		2-4
41	円形	直径17×深さ45.5	黒褐色 (10YR 3/1) 粘性シルト質土。	土師器		2-4

SD (溝)

番号	平面形	法 量 (cm)	埋 土	出土遺物	備 考	遺構面
01	弧を描く	幅40～90×長さ450×深さ8.9～37.8	褐灰色 (10YR 6/1) ～灰黄褐色 (10YR 6/2) ～灰褐色 (2.5Y 6/1) ～灰黄色 (2.5Y 6/2) 礫・砂混じり土。	弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・サヌカイト		1-1・2-2
02	弧を描く	幅40×長さ230×深さ3.6～6.5	褐灰色 (10YR 4/1) ～7.5YR 4/1 礫混じり粘性シルト質土。	土師器・サヌカイト	SK12に埋土似る。	2-3
03	U字に近い	幅15～45×長さ145×深さ4.9～8.7	東部：黒褐色 (10YR 3/1) ～10YR 3/2 シルト質土。 西部：にぶい黄褐色 (10YR 5/3) ～10YR 4/3) ～褐灰色 (10YR 4/1) シルト質～砂質土。	—		2-4

SK (土坑)

番号	平面形	法 量 (cm)	埋 土	出土遺物	備 考	遺構面
01	(楕円形)	長径115×短径50×深さ3	灰黄褐色 (10YR 6/2) ～にぶい黄褐色 (10YR 6/3) 礫混じり粘質土。	土師器	北壁・西壁にかかる。	1-2
02	(隅丸方形)	長径90×短径40×深さ42	黒褐色 (10YR 3/1) ～10YR 3/2) ～黒色 (10YR 2/1) 粘性細砂質土。花崗岩風化粒を含む。7層に類似する。	弥生土器	掘削に切られ、西壁にかかる。SD01床面で検出。	1-2
03	(瓢箪形)	長径50×幅30×深さ37.8	褐灰色 (10YR 4/1) ～黒褐色 (10YR 3/1) 細砂質土。	弥生土器・鉄片	西壁にかかる。SD01床面で検出。	1-2
11	瓢箪形	長径45×幅18×深さ15	灰黄褐色 (10YR 6/2) 礫混じり砂質土。マンガン沈着。耕作土の混入あり。	土師器・須恵器・黒色土器	平安時代後期の遺構。	2-2
12	帯形	長径50×短径40×深さ23.3	褐灰色 (10YR 4/1) ～7.5YR 4/1 礫混じり粘性シルト質土。	弥生土器	SD02上面で検出。SD02に埋土似る。	2-3
13	(半円形)	長径30×短径18×深さ18.2	褐灰色 (10YR 4/1) ～灰黄褐色 (10YR 4/2) シルト質土。礫の含有は少ない。	—	SK14に埋土似る。略円形と推定。	2-3
14	円形	直径40×深さ23.9	褐灰色 (10YR 4/1) ～灰黄褐色 (10YR 4/2) シルト質土。礫の含有は少ない。	土師器・須恵器	SK13に埋土似る。	2-3
15	(半楕円形)	長径25×短径20×深さ36.1	7層類似層。	土師器	北壁にかかる。長楕円形と推定。	2-4
16	(隅丸方形)	長径80×短径50×深さ35.2	7層類似層。細礫を多く含む。	弥生土器	SD01に切られる。	2-4
17	(楕円形)	直径80×14.3	掘り方：7層類似層。細礫を多く含む。柱穴：灰褐色 (7.5YR 4/2) ～褐色 (7.5YR 4/3) 粘性シルト質土。礫は少ない。	弥生土器	SD01に切られる。	2-4
18	(略円形)	直径35×深さ7.4	7層と9層の混和層。細礫を多く含む。	—	北壁にかかる。	2-4

SH (堅穴住居)

番号	平面形	法 量 (cm)	埋 土	出土遺物	備 考	遺構面
01	方形か	1辺350以上×1辺170以上	褐灰色 (10YR 5/1) ～灰黄褐色 (10YR 5/2) 粘質土。8a層。	土師器・磁石	北辺を検出。	1-2・2-4
02	隅丸方形か	1辺210以上×1辺100以上	①：褐灰色 (10YR 6/1) ～10YR 4/1) シルト質土。②：灰黄褐色 (10YR 5/2) ～にぶい黄褐色 (10YR 5/3) ～褐灰色 (10YR 4/1) シルト質土。焼土を含む。③：褐灰色 (10YR 6/1) ～黒褐色 (10YR 3/1) シルト質土。焼土細片と少量の偽礫を含む。④：褐灰色 (10YR 5/1) ～10YR 4/1) ～灰黄褐色 (10YR 4/2) シルト質土。⑤：にぶい黄褐色 (10YR 5/3) ～にぶい褐色 (7.5YR 5/3) シルト質土。⑥：褐灰色 (10YR 4/1) ～灰黄褐色 (10YR 5/2) ～10YR 4/2) 礫混じり粘性シルト質土。9a層に似るが、7層の小ブロック含む。偽礫を多く含む。	土師器	北西隅を検出。縦溝上に焼土散乱。	1-2

※「トレンチ・遺構面」の欄には「○トレンチー○遺構面」を「○-○」と表記している。

表2 芦屋廃寺遺跡第113地点遺構観察表

(ビット)

番号	平面形	法 量 (cm) 長さ×短径×深さ	堀 土	出土遺物	備 考	通構面
01	楕円形	42×18×12	4層+5層	須恵器杯片	西壁にかかる。	1
02	略円形	58×50×5	褐灰色 (10YR 6/1) ~ ぶい黄褐色 (10YR 6/3 ~ 10YR 6/4) 粘質土	土師器・須恵器		3
03	楕円形	46×30×5	褐灰色 (10YR 6/1) ~ ぶい黄褐色 (10YR 6/3 ~ 10YR 6/4) 粘質土	土師器・須恵器		3
04	楕円形	48×40×12	上位堀土: ぶい黄褐色 (10YR 7/3) ~ ぶい黄褐色 (10YR 5/3) ~ 黄褐色 (10YR 5/6) 礫混じり砂質土 + 灰白色 (10YR 7/1) ~ 褐灰色 (10YR 6/1) ~ ぶい黄褐色 (10YR 6/4) シルト質土 下位堀土: 灰黄褐色 (10YR 5/2) ~ 褐灰色 (10YR 4/1) シルト質土	土師器・須恵器		3
05	隅円方形	56×52×19	上位堀土: ぶい黄褐色 (10YR 7/3) ~ ぶい黄褐色 (10YR 5/3) ~ 黄褐色 (10YR 5/6) 礫混じり砂質土 下位堀土: 灰黄褐色 (10YR 5/2) ~ 褐灰色 (10YR 4/1) シルト質土	土師器・須恵器		3
07 (半円形)	72×(32)×8	灰色 (N 4/0) 砂質土	土師器	南壁にかかる。		4
08 (半円形)	28×(16)×22	柱痕部: 灰色 (N 5/0) ~ 褐灰色 (7.5YR 5/1) 砂質土 掘り方: 灰色 (N 6/0) ~ 褐灰色 (7.5YR 6/1) 砂質土	—	南壁にかかる。 底面に礫あり。		4
09	円形	直径25×8	褐灰色 (7.5YR 6/1 ~ 7.5YR 4/1) ~ 黒褐色 (7.5YR 3/1) 粘性シルト質土	土師器	堀土はSP17柱痕部堀土に似る。	4
10	半円形	20×13×30	褐灰色 (10YR 5/1 ~ 10YR 4/1) シルト質土	土師器	機軸底で検出。	4
11	楕円形	55×45×8	褐灰色 (7.5YR 4/1) ~ 灰褐色 (7.5YR 4/2) ~ 黒褐色 (7.5YR 3/1) シルト質土	土師器	堀土はSP12上位堀土に似る。 底面に礫あり。	4
12	円形	直径36×15	上位堀土: 褐灰色 (7.5YR 4/1) ~ 灰褐色 (7.5YR 4/2) ~ 黒褐色 (7.5YR 3/1) シルト質土 下位堀土: 褐灰色 (7.5YR 5/1) ~ ぶい褐色 (7.5YR 5/3) 粘質土	土師器	底面に 8 層中に含まれた礫検出。	4
13	不定形	130×55×18	褐灰色 (7.5YR 6/1 ~ 7.5YR 4/1) ~ 黒褐色 (7.5YR 3/1) 粘性シルト質土	土師器	堀土はSP17柱痕部堀土に似る。 2つの遺構が合併。	4
14	楕円形	44×38×5	柱痕部: 褐灰色 (10YR 5/1 ~ 10YR 4/1) ~ ぶい黄褐色 (10YR 4/3) 砂混じり粘性シルト質土 掘り方: ぶい褐色 (7.5YR 6/4) ~ 灰黄褐色 (10YR 6/2) 粘性砂質土	—	柱痕部の堀土はSP15堀土に似る。 掘り方の堀土はSP17掘り方堀土に似る。	4
15	略円形	38×35×4	灰色 (N 4/0) 砂質土	土師器		4
16 (半円形)	27×(15)×6	灰色 (N 4/0) ~ 灰黄褐色 (10YR 4/2) 砂質土	—	北壁にかかる。 底面に 8 層中に含まれた礫検出。		4
17 (半円形)	42×(24)×17	柱痕部: 褐灰色 (7.5YR 6/1 ~ 7.5YR 4/1) ~ 黒褐色 (7.5YR 3/1) 粘性シルト質土 掘り方: ぶい褐色 (7.5YR 6/4) ~ 灰黄褐色 (10YR 6/2) 粘性砂質土	土師器	1 トレンチにかかる。		4
18	円形	直径24×16	褐灰色 (7.5YR 4/1) ~ 黒褐色 (7.5YR 3/1) シルト質土	土師器・須恵器・炭化物	炭化物多く、黒色 (N 2/0 ~ N1.5/0) を呈する部分あり。	4
19 (半円形)	22×(19)×23	褐灰色 (10YR 4/1) 砂質土	—	西壁にかかる。		4
20	円形	直径12	褐灰色 (7.5YR 6/1 ~ 7.5YR 4/1) ~ 黒褐色 (7.5YR 3/1) 粘性シルト質土	土師器	堀土はSP17柱痕部堀土に似るが、より不均質。	4
21 (半円形)	28×(9)×12	褐灰色 (7.5YR 4/1) ~ 灰褐色 (7.5YR 4/2) ~ 黒褐色 (7.5YR 3/1) シルト質土	土師器	南壁にかかる。 堀土はSP12上位堀土に似る。		4

※「土師器」と表記しているものには、弥生時代後期の可能性もある要片を含んでいる。

※ SP06 は欠番。

第3節 打出岸造り遺跡（第56地点）

1. 調査に至る経緯

兵庫県芦屋市大原町83番地1に所在する当該地（敷地面積1,225.09m²）において、個人住宅新築工事の計画が発生した（第1図）。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である打出岸造り遺跡（平成16年3月刊行、兵庫県遺跡地図番号070040）の分布範囲内であることから（第2図）、文化財保護法に基づく届出書が平成20年（2008）12月8日に地権者代理より本市教育委員会に提出された。本市教育委員会は、受理した届出書をもとに建築計画の内容を審査し、周辺地域における発掘調査において、当該地の計画深度と同等の深度では中世以降の耕作痕しか検出されていないことから、当該地の工事によって中世以前に遡る遺構や遺物包含層が損壊を受ける可能性は低いと判断して慎重工事の取り扱いとした。

その後、届出者が、個人住宅建設に付随する倉庫部分の地盤改良工事範囲の縛りを設定し、掘削を開始した連絡を受けて、平成21年（2009）1月27日に本市教育委員会社会教育部生涯学習課文化財担当主査森岡秀人（学芸員）と担当嘱託坂田典彦（学芸員）が掘削部分について立会して土層を観察したところ、工事部分西部において、明確な遺物包含層と遺構の存在を確認した。これによって、当該地において、当初の想定以上に浅い位置に濃密な遺物包含層と遺構が遺存していることが明らかになった。

そこで、同課は、工事によって埋蔵文化財が損壊を受ける可能性があるとして、急遽、届出者に遺跡保護の協力を求め、翌28日に溝状のトレンチ調査を行ったところ、現地表下32cmにおいて遺物包含層を確認するとともに、現地表下45cmにおいて土器を包蔵する遺構を検出した。

この結果を受けて、ただちに同課と設計者（地権者代理）が協議を行い、翌週の2月2日～6日にかけて、実働日数5日で、工事部分西部における遺物包含層の



第1図 調査地現況



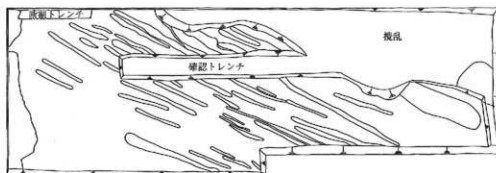
第2図 調査地位置図 1/5000

形成年代や遺構の分布状態ならびにその年代・性格等の記録を目的とする確認調査を実施することになった。この調査面積は54.1m²である。

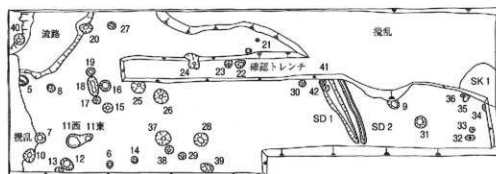
確認調査では、第4層上面と第5層上面における2枚の遺構面を確認した（第3図）。

第4層上面で検出した遺構面（第1遺構面）では、ほぼ東一西を指向する犁痕群とピットを検出し、中世後半期の耕作面であると判断した。

第5層上面で検出した遺構は、ほぼ東一西を指向する犁痕群と溝・ピット群・土坑・流路である。これらは犁痕によって溝・ピット群が切られていて新旧関係が明らかであることや、埋土の差異、さらに出土遺物の様相の違いから、同一面において、中世後半段階の耕作痕跡（第2遺構面）と、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の溝・ピット群から成る集落遺構（第3遺構面）を確認したものと考えた。とくに、第3遺構面で検出したピット群は深さ30cmを超えるものも多く、遺物の包含率が極めて高かった。中には、底に鉢を正立で据え置いたものもあり（SP11東）、人為的に遺物を納めた可能性が指摘できた。掘立柱建物跡を復元するには至らなかったが、これらは櫛列や掘立柱建物の存在を十分想定できる数と法量を持つピット群である。また、調査区北西部において確認した流路は、長さ約2m、幅約1.4mの範囲のみの検出である。多少蛇行しつつ北一南を指向する状態が確認され、埋土は締まりのあまい褐色中砂～粗砂で、水成堆積層と判断した。ちなみに、周辺調査で確認している弥生時代後期末～



第2遺構面（犁痕検出状況）



第3遺構面（流路・土坑・ピット検出状況）※数字のみで表記している遺構はピット。

第3図 平成21年度調査区遺構平面図 1/100

古墳時代前期初頭の溝は深さ1m以上であることから、この流路も相当の深さを持つことが想定された。しかし、工事掘削深度までしか掘り下げなかったため、埋土のほとんどは未掘のため、遺物の出土は確認できなかった。

なお、この確認調査では、27ℓコンテナ5箱分の遺物が出土しており、調査面積や包含層の厚さに対してかなり多かった。その内訳は、弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・陶器・磁器で、弥生時代後期末～中世のものである。其中で、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の土器が圧倒的に多かった。

これらの遺構や遺物の様相から、調査区が弥生時代後期末～古墳時代前期初頭における打出岸造り遺跡の集落中核部分に位置する可能性が高まった。

このため、倉庫部分建築工事に続いて行われる住宅の新築工事に伴って、当該期を中心とする遺構や遺物包含層が損壊を受けることが予測されたため、この部分を対象とする有効な記録保存を行うべく、同年4月27日から5月27日（実働日数18日）に、文化財担当主査森岡と同担当嘱託（学芸員）坂田・白谷朋世・平山裕之を調査員として、本発掘調査を実施することになった。調査補助員として、桑原育世・須田佑子・住本孝太・西岡崇代・山本麻理・横森美和子が従事し、発掘作業は、（株）東和商事に委託した。

2. 調査地をとりまく環境

打出岸造り遺跡は、芦屋市大原町北東部に所在しており、六甲山南麓部を流下する宮川の西側に広がる段丘上から扇状地面に立地する。標高は15～18m付近に位置しており、現況地形を概観すると、北西から南東に下る緩傾斜地で、遺跡の東端には東側の宮川により下刻された谷状地形（宮川低地帯）が認められる。また、打出岸造り遺跡の南西側の扇状地面には、大原遺跡の存在が知られている。

打出岸造り遺跡は、古くは昭和9～10年の紅野芳雄氏の調査において、弥生時代の遺物包含層の存在が報告されている〔紅野1940〕。1970年代には市史編纂に伴い、遺跡の実体に関して様々な観点からの検討が加えられた〔村川1971、村川・森岡1976〕。その後、阪神・淡路大震災以降は発掘調査が急増し、数十地点を数える調査によって、弥生時代、古墳時代前期初頭、中世、近世の複合遺跡であることが明らかになってきている〔芦屋市教委1996・2001・2007・2009a〕。

今回の調査地点は、打出岸造り遺跡では中央部東寄りに位置し、南側隣接地が第1地点、北側隣接地が第39地点である。第1地点は、かつての紅野氏の調査地点に比定されている。紅野氏の『考古小録』によると、地表下35～100cmのところに弥生土器の濃厚な遺物包

合層が遺存しており、地表下1mを越えると粘土層が検出され、その上面から多くの弥生土器片が出土したことが記録されている。この弥生土器については、その後の検討で、古墳時代前期初頭の庄内式併行期のものであると考えられるようになっている〔芦屋市教委1996〕。また、紅野氏の記録に見られる粘土層については、後述する当調査区検出の第5層に対応する可能性がある。この第1地点は、平成7年度に改めて発掘調査が行われ、古墳時代前期初頭の大溝が検出されている〔芦屋市教委1996〕。さらに、北側の第39地点は、平成14年度の発掘調査によって、中世～近世の耕作面と弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の包含層が検出されている〔芦屋市教委2009a〕。

このように、当遺跡の発見の契機となった弥生時代に関しては、集落の位置やその構成、具体的な時期等、まだ不明点が多い。しかし、打出岸造り遺跡とその南西に位置する大原遺跡において、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の灌漑用と考えられる大溝の検出が相次ぎ、当遺跡の主たる時期が、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭であることが推測できるようになっている〔芦屋市教委2007〕。とくに、今回の調査地点から南西100mの位置にある第32地点や第9地点において、当該期の木製品や土器がまとめて出土しており、周辺に居住域の存在が推定されるようになっている。また、この大溝の存在によって、宮川から南西方向に展開する水田面が想定されるようになっている。

中世には耕作面が多く確認されており、安定した耕作が継続的に行われていた様子がうかがえる。加えて、

近世には耕作地が広がるとともに、第4地点の発掘によって、農村部でありながら、城下町に類例の知られる竹樋を用いた上水道施設も検出されている。

3. 発掘調査の概要

(1) 発掘調査の方法

今回の調査は、住宅の建設によって損壊を受ける部分を対象とした。ただし、現状では東西にほぼ平坦な地形であるが、本来は東に下る地形を相当量の盛土によって平坦化していることから、調査地東部では工事掘削深度が包含層に達していないことが予測された。このため、まず、掘削深度と遺物包含層・遺構面との関連を把握するため、調査地北部に東西方向のトレンチ（1トレンチ）を設けて現状を確認した（第4図）。



第4図 1トレンチ掘削風景



第5図 調査区配置図 1/400

その後、必要に応じてトレンチを追加して、工事掘削深度までの様相を確認した。なお、設計G.L.は調査地北西部現地表面レベルを0としており、土壌改良を伴う工事掘削深度は設計G.L. -90cmである。

1 トレンチは幅1m、長さ30mで、土層の堆積状況・層序は確認調査とは一致するが、削平・攪乱が著しく、既ぬ一枚の遺構面しか遺存していないことが明らかになった。トレンチ中央部において、締まりの悪い褐色粗砂を埋土とする流路ないし溝状遺構(SD01)が、トレンチ東部においてラミナを伴う砂や砂質土を埋土とする流路状遺構(SD02)が確認されたが、これらは遺物を伴っておらず、その時期や性格が不明であった。そこで、SD02の走行方向や遺物の包含状態を確認する目的で、調査区東部に東西2.5m、南北7mのトレンチ(2トレンチ)を設けて掘削した。SD02は2トレンチ内で直角に曲がって西流したため、2トレンチの一部を幅2.5m、長さ1.5mに亘って西側に拡張した(2トレンチ拡張部)。SD02はトレンチより西側に延びる様子が確認できたが、既存建物に伴う大きなコンクリート基礎が残っていたので、2トレンチ拡張部をそれ以上延長することはできなかった。地形から判断してSD02が屈曲して南流する可能性があったので、工事によって損壊を被る範囲の南端に、1トレンチに平行する東西9.5m、南北0.8mのトレンチ(3トレンチ)を掘削した。このトレンチでは近世以降の耕作地段差が確認されたが、SD02の延長部分は検出されなかった。そこで、3トレンチと1トレンチの間に、幅1m、長さ6mの南北方向トレンチ(4トレンチ)を設けて掘削したところ、SD02がさらに西に延びている様子が観察できた。このため、SD02の性格や走行方向を明確にするため、2トレンチ北部と3トレンチ北部を繋ぎ、西に拡張する調査区を設けた(「東区」と呼称する)。この東区は、東西10m、南北3mで、5層上面まで掘削し、遺構の底面が工事掘削深度を超える部分については、工事掘削深度までを調査対象とした(第5・6図)。

取り扱いとして、1トレンチ中央部や3トレンチで遺物包含層や中世以前に遡る遺構が認められなかった



第6図 3トレンチ掘削状況

ことから、面的に調査をする範囲は3トレンチ以西の調査地西部に限ることとした。排土の量とその放置き場を考慮して、調査区は、東寄りの南北6.5m、東西9mの部分(「I区」と呼称する)と西寄りの南北16m、東西6~12mの部分(「II区」と呼称する)に分け、I区から掘削を進めた。I・II区では、工事掘削深度より上位に位置する5層(基盤層)の上面までを調査対象とし、5層以下は、深掘トレンチによって工事掘削深度までの状態を確認した。

I区は、5層直上まで重機掘削を行ってから、人力で遺構を検出したが、調査区の大半が攪乱を被っており、わずかな遺構しか残存していなかった。一方、II区は、I区に近接する部分は攪乱が認められ、南端に旧家屋の庭園に伴う池が残っていたが、その他の部分は遺構面の残りが良く、とくに確認調査時の調査区に近い南側部分は包含層も良好に残っていた。このため、重機掘削は3層を目処に設計G.L.-30cm程度までに留め、それ以下は人力掘削を行った。確認調査時に第1遺構面を検出した4層上面では明確な遺構面を検出できなかったが、基盤層である5層上面で、溝・土坑・ピット等の多様な遺構を有する遺構面を検出した。

記録写真は35mmカラーネガフィルムとデジタルカメラを併用した。図面の作成にあたっては、II区北壁と1トレンチ北壁を結ぶラインに沿って任意の基準杭を設定し、光波測距器を用いて調査区平面図、遺構平面図、遺物出土状況平面図等を作成し、当該敷地前面道路に設置されたマンホール上面高(標高T.P.17.47m)から水準測量によって得たT.P.19.00mを基準として、土層断面図、遺構断面図等を作成した。ちなみに設計G.L.はT.P.17.925mである。

このように、トレンチと調査区を設定した結果、最終的に、トレンチ並びに調査区の調査総面積は296m²になった(第5図)。

(2) 調査の経過

本調査は、平成21年(2009)4月27日~5月27日に実施し、実働は18日間であった。経過の詳細については、以下に、発掘日誌抄を記す。

【発掘日誌抄】

4月27日(月) 晴れ 実働1日目

調査初日。重機とガードマンボックス、器材の搬入を行う。施工業者から、設計G.L.と工事掘削深度の説明を受け、掘削を開始する。調査区北端にトレンチ(1トレンチ)を設定し、土層や遺構の有無を確認する。1トレンチ西端では、弥生土器を大量に含む砂層が検出されたので、遺物量の多い部分はあまり掘り下げず、トレンチを東に延ばしていった。この結果、1トレンチ西部から中央部の基盤層はあまり安定しない砂質土であり、昨年度の調査で第5層としていた大阪層群類似層は1トレンチの東部にのみ存在しているこ



第7図 重機掘削風景

とが確認された。また、1トレンチ中央部において、流路ないし溝状遺構（SD01）を、東部において、東に下る耕作地段差と2層直下で5層に切り込む流路状遺構（SD02）を検出した。森岡、竹村、坂田3氏を交えて協議を行い、新たに南北方向のトレンチ（2トレンチ）を設けることによって、SD02の時期や方向を追求することにした。また、耕作地段差やSD01・02の方向を確認するため、調査区南端に、1トレンチに平行する3トレンチを掘削することになった。2トレンチにおいて、SD02が西に屈曲することが明らかになり、かなり古い時期の遺構である可能性が出てきた。

図面作成のため、前面道路のマンホールから基準レベルを移動した。分層を開始した1トレンチについては、雨水の染み出しによって壁面が崩れるおそれのある部分から土層断面図の作成を開始した。

4月28日（火）晴れ 実働2日目

1トレンチの分層を完了し、撮影。土層断面図の作成を継続する。

2トレンチはSD02に併せて西に拡張する（2トレンチ拡張部）が、既存建物の基礎や大規模な攪乱があるので、トレンチの拡張をひとまず止めてSD02の検出状況を撮影する。

重機の作業取り方を考慮して、3トレンチは西から掘削するが、攪乱が著しい。そこで、1トレンチ以南のI区において表土剥ぎを先行したが、攪乱が広範囲に及んでおり、南部の7割程は既に損壊を被っていた。ただし、辛うじてSD01が検出でき、直線的に延びる様子が確認できた。攪乱の面積と土量を計算して、I区の調査を早々に済ませて埋め戻す計画を立てた。

4月30日（木）晴れ 実働3日目

調査区の北西端を基点（0，0）として、平面図作成用の基準杭を3本設定。I区の清掃後、写真撮影を行い、調査区平面図並びに遺構配置図の作成を開始する。SD01は工事掘削深度まで掘り下げた。

SD02の方向追求のため、2トレンチに並行する南北方向のトレンチ（4トレンチ）を設定し、掘削。4トレンチでもSD02は検出でき、さらに西に延びる様

子が確認できた。しかし、未だに遺物が見あらず、時期が定められない。

3トレンチを東に延長したところ、4トレンチとの接点付近で耕作地段差が現れた。

調査区西側（II区）は、漸く南西側から重機による表土剥ぎを開始した。

5月1日（金）晴れ 実働4日目

I区のレベリングや調査区平面図の作成を進める。

重機を用いてII区の表土剥ぎ及び攪乱の掘削を行い、同時にI区南部を埋め戻す。II区南部は包含層がよく残っている。夕方にはこの作業を終えて、重機を回送。

SD02の走行方向が確定できず、方形周溝墓状に巡る可能性も想定できたことから、森岡・竹村を交えて緊急協議を行い、埋め戻し時の重機稼働日を一日増やして、SD02の方向性を追求することになった。

5月7日（木）雨

降雨のため作業を中止。

5月8日（金）晴れ 実働5日目

雨水を汲み出し、現場復旧作業を行う。その後、1トレンチの土層断面図作成を進める。併行して、I区北部の遺構面精査やII区の入力掘削を行う。II区東部は攪乱がひどく、北部にも重機の爪痕が残っている。

5月11日（月）晴れ 実働6日目

1トレンチの土層断面図作成が終了する。引き続き、3トレンチの土層断面図の作成に移る。I区北部の調査は終了。II区の攪乱掘削を継続する。

5月12日（火）晴れ 実働7日目

II区の攪乱掘削が終了し、遺構面精査に取り掛かったところ、南部は3・4層が堆積していることがわかったので、遺構の有無を検証しつつ、掘削を進める。

1・3トレンチの土層注記を行い、4トレンチの土層断面図を作成する。

5月13日（水）晴れ 実働8日目

II区南部の包含層掘削を継続する。3層除去後、4層も除去し、5層上面の遺構を検出する。土器を伴う遺構多し。II区の遺構平面図作成に着手する。

5月14日（木）晴れ 実働9日目



第8図 調査風景（II区掘削）

Ⅱ区南部の遺構面精査を行い、土坑や流路、土器溜り等を検出する。遺物の量は多いが、平面形が定まらない遺構が多い。南部の遺構検出状況撮影後、北部の遺構面検出に掛かる。ここでは、1トレンチ西端から延びる大溝(SD04)や土坑が検出された。遺構検出状況撮影後に、流路(SD01の続きと判断した)、SD04、土器溜りの断面を行い、堀土の様相や切合い関係を確認する。

昨日に続いてⅡ区の遺構平面図を作成する。また、4トレンチの土層断面図の註記終了。

5月15日(金) 晴れ 実働10日目

Ⅱ区南部の遺構掘削に着手し、併行して遺構平面図の作成を進める。SD01やSD04は土層観察用土手を残して掘削したところ、SD01からの遺物出土は乏しいが、SD04では土器の大量出土を見た。

5月18日(月) 晴れ 実働11日目

先週末の雨を汲み出して現場を復旧。山本徹男氏によるビデオ撮影を行う。

SD04は北壁沿いにサブトレンチを設けて深さや土層を観察し、土層断面図を作成する。SD04を土層と小ブロックに分けて掘削し、遺物を取り上げる。Ⅱ区南部の遺構の断面や掘削を進める。土器溜り1も掘り下げ、平面図と土層断面図を作成する。

森岡・竹村を交えて現場検証を行い、調査の方法や調査日程を検討する。

5月19日(火) 曇りのち晴れ 実働12日目

Ⅱ区西部の遺構一段下げや清掃を継続する。土器溜り1の掘削も継続する。南部の掘削状況を撮影し、土器溜り1とその周囲を囲む溝状の土器溜り2の掘削を進める。土器溜り1の東半部分の平面図を作成し、西半はレベリング後に遺物を取り上げる。これらは、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の土器に限られているようである。

SD04は土層観察用土手より南側を掘削し、1m毎に且つ東西に分けて遺物を取り上げる。大きめの遺物は残した状態で出土状況を撮影し、その後、これらの遺物も取り上げた。



第9図 調査風景(土器溜り1掘削)



第10図 調査風景(SD04掘削および図面作成)

南壁の土層断面図を作成する。日程がきつい。

5月20日(水) 晴れ 実働13日目

Ⅱ区南部の遺構の掘削を継続する。土器溜り1は2・3にも着手。土器溜り1の東部の遺物を取り上げた。また、適宜、遺構平面図や遺構の土層断面図を作成。

5月21日(木) 晴れ 実働14日目

Ⅱ区南部の遺構は土器溜り1の土器を残してほぼ完掘出来たので、写真撮影を行う。遺構平面図の補足やレベリングを行う。また、土器溜り1の土器出土状況図を作成して、遺物を取り上げる。さらに、南壁・西壁の土層断面図も作成する。

5月22日(金) 雨のち曇り 実働15日目

予報よりも天気が悪く、SD04の掘削は思うように進まない。雨がやんでいる時を見計らって平面図の補足やSD04の遺物の取り上げを行う。雨が降っている間は遺物台帳の整理や土器洗浄を行う。

5月25日(月) 晴れ 実働16日目

重機を再搬入し、Ⅱ区南部に東西方向の深掘トレンチを設け、下位の土層を検証する。

土器溜り2の底面で杭痕跡を確認し、平面図に追記したり断ち割って土層観察を行う。SD04は掘削を進めて、遺物の出土状況を撮影し、実測図を作成する。

5月26日(火) 晴れ 実働17日目

調査も大詰め。SD04出土遺物のレベリングを行い、順次遺物を取り上げる。SD04に近接する土坑の掘削を行い、平面図に追記を行う。

Ⅱ区南部は埋め戻しを始める。

5月27日(水) 晴れのち曇り 実働18日目

調査最終日。東区を重機で掘削し、SD02がほぼ直線的に南西方向に延びることを確認した。SD02のデータを記録した後、東区を埋め戻す。

SD04は、昨日に引き続いて遺物を取り上げ、完掘する。周辺の土坑も完掘し、写真撮影、図面の補足を行う。Ⅱ区北壁沿いを工事掘削深度まで断削して基盤層の状態を観察し、土層断面図の追記も行う。

調査区をすべて埋め戻して旧状に復し、器材、遺物、重機等を撤収して、調査を完了した。

(3) 調査区の層序

本発掘調査の基本層序は、調査区北壁を基準とし、2月の確認調査時の土層番号を踏襲するとともに、下位の土層を追加した。攪乱土を主体とする現表土は0層と呼称し、0層直下の旧表土層を第1層として、以下、上から順に土層番号を付した。基本的な層序は、第1層が耕作土と考えられる旧表土、第2層が耕作土、第3層が礫土、第4層が中世包含層、第5・6層が基盤層である。ただし、第3層の分布は調査区西部に、第4層の分布は調査区南部に限られる。また、調査区東部では、第1・2層と第4層が未分化であったので、この層を第4層の範疇で捉えて4b層と呼称した。土色は「新版 標準土色帖」(農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修)に準じるとともに、適宜、視認色を用いているが、第4層を4a層・4b層と分けたように、同一の性格を有するものの上質と土色に若干の違いがある部分を区別するため、土層番号にアルファベットの小文字を付して表記している。また、調査区各壁に見られる遺構埋土等の土層名はアルファベットや○囲い数字、片仮名等を用いて基本層序と区別している(第11・13・21図)。

以下に、基本層序について概略を述べる。

第1層は、灰色の旧表土で、耕作土と考えられる。層厚は10~20cmを測る。

第2層は、灰白色の細砂質土である。調査区西部は鉄分の沈着によりやや褐色がかかる。水成堆積層を起源とする耕作土と考えられる。層厚は15~22cmを測る。

第3層は、黄褐色の粘性砂質土と灰色の砂質土の混和層である。調査区西部にのみ検出された。弥生時代後期末~古墳時代前期初頭の土器を大量に含み、わずかに須恵器片が混じる。当初、当該期の包含層の可能性を考えたが、下位の第4層が中世の包含層であることから、調査地一帯に分布していた打出岸造り遺跡本体の包含層を起源として、耕作土形成の際に盛られた礫土と判断した。第3層からは近世以後の遺物が出土していないので、礫土の時期は中世後期~近世初期と考えている。層厚は10~30cmで、西ほど厚い。

第4層は、灰褐色の砂質土で、耕作による攪拌や礫状の薄い水成堆積層が見られる。土器・須恵器・瓦器・瓦質土器・陶器・磁器(中国青磁)を含む中世包含層で、層厚は12~24cmを測る。

第5層は、黄白色の粗砂混じり粘性砂質土である。締まりが良く固く、遺物の出土が見られないので基盤層と判断した。ただし、第5層はかなり不安定な堆積状態を示す層であり、大畹層群の再堆積層ないし沖積地の自然堆積層と考えられる。また、調査区東部は、5a層下部に上層からのウン管によるマンガン沈着が著しく、灰黄褐色(10YR 5/2)~にぶい黄褐色(10YR 5/3)を呈する。

第6層は、砂質分の強い堅い層で、かなり均質な層

である。調査区北西部で確認されるが、南東部では下位に潜り込むようで、検出できなかった。ちなみに、Ⅱ区の深掘トレンチの西端には、西から東に下降する安定した白灰色のシルト~粘土層があり、これが低位丘陵の基盤層であると言え、まさに、調査地点は、丘陵と沖積地の交差点とすることになる。

なお、1トレンチ東寄りでも確認したイ〜エ層は、極めて古い時期の流路埋土と考えられる土質であるが、第6層の範疇で捉えている。

(4) 検出遺構

今回の調査で検出した遺構面は、どの区も、基盤層とした第5層上面における一面のみである。ただし、この遺構面は、中世における耕作地化の段階で、本来の地表面は削平されて既に失われている。調査区内で検出した遺構は、区ごとに様相が異なることから、Ⅰ区・Ⅱ区・東区に分けて記述する。

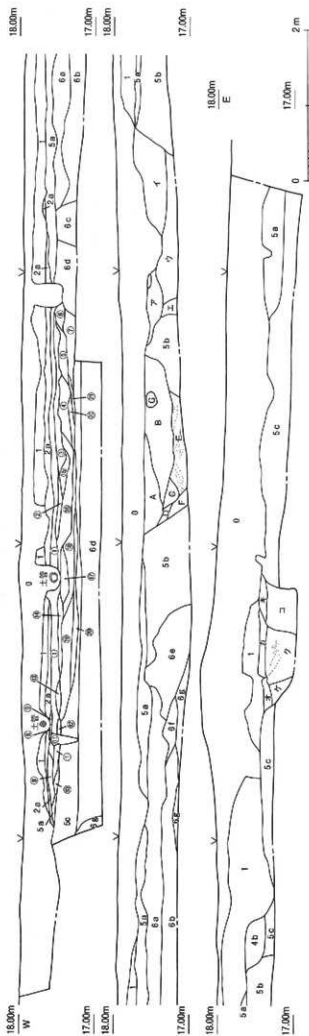
①Ⅰ区(第12図、巻頭図版2、図版1)

この調査区は、攪乱が著しく、面的に第5層上面が遺存していたのは、1トレンチの南2~3mの範囲に限られていた。この部分で検出できた遺構は、幅100~114cm、長さ140cm、深さ10cmの浅い溝(SD03)だけである。SD03の埋土は第2層と共通の灰色土で、耕作に伴う溝と言える。

攪乱を抜いている部分では、1トレンチ中央付近で確認したSD01の延長部分を検出した。SD01はⅠ区東壁のほぼ中央部から直線的に延びて、東壁から3m付近で幾分南向きに方向を変えて南壁西側に達しており、Ⅰ区における検出長は8mを測る。東壁に掛かる部分では北肩が遺存しており、1トレンチにおける検出状態とも照らし合わせると、幅200~250cm、深さ50~60cm以上の遺構と言える。SD01の延長部分はさらにⅡ区や確認調査時の調査区でも確認されており、調査地における検出長は30m以上に達する。埋土は粗砂を主体とするラミナの明確な水成層や細砂質土である。走行方向が概ね北東~南南西であり、東方に近接する宮川へは下降しない様子から、人工的な大溝ないし流路と判断した。

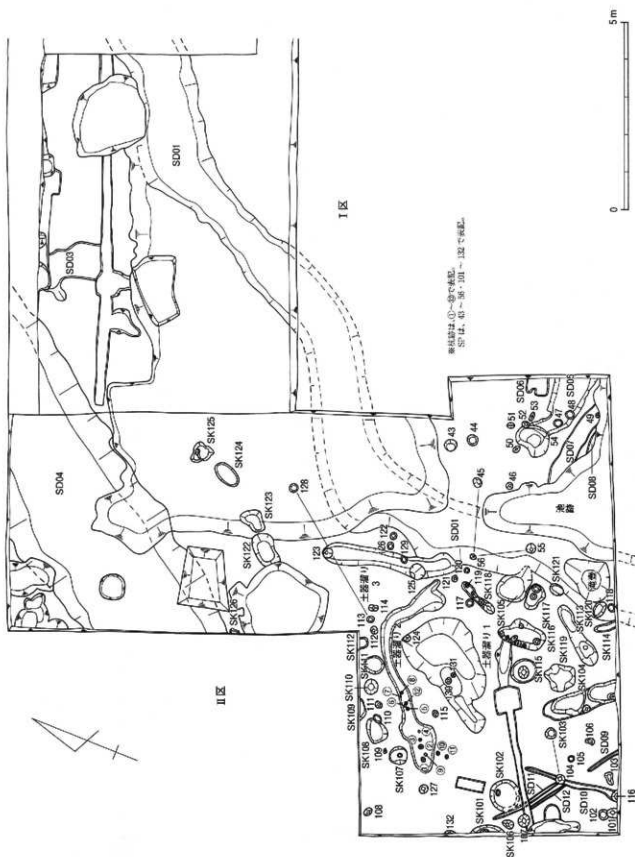
②Ⅱ区(第12~19図、巻頭図版2~10、図版2~12)

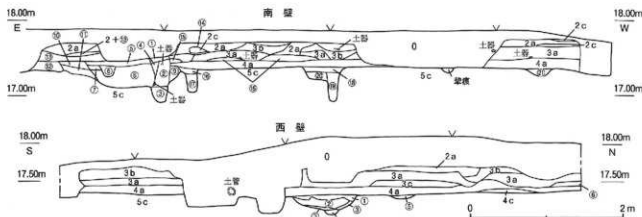
この調査区では、Ⅰ区に接する部分の攪乱が著しかったが、北部と南部では多くの遺構が検出できた。また、南部では遺物包含層である第3・4層も残存していた。Ⅱ区で検出できた遺構は、溝や流路・痕跡10条(SD01・04~12)、土坑26基(SK101~126)、ビット46基(SP43~56・101~132)、残存率の高い土器を集中的に出土したことから「土器溜り」と呼称した不定形遺構3基(土器溜り1~3)と杭跡12基(杭10~12)である。ただし、SK(土坑)とSP(ビット)の区別は、法量を参考として遺構検出時に注意を行ったもので、必ずしも遺構の性格を意味するものではない。



性

- [illegible]





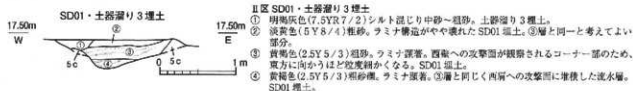
II区南壁

- ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

II区西壁

- ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

第13図 II区南部土層断面図 1/50



第14図 II区SD01・土器溜り3土層断面図 1/50

以下に、遺構の概要を述べる。なお、各遺構の法量や出土遺物等の詳細なデータは、表2に掲げている。

SDの遺構名を冠したものは、1トレンチ中央部から続くSD01と、1トレンチ西端から延びるSD04並びに南部で集中的に確認したSD05～12である。

SD01は、撓乱のためにII区南部において、東肩部を失った状態で、幅1.5m、長さ7.5mに亘って検出されたのみである(第12～14図、巻頭図版3、図版3)。ここでは、I区よりも南流傾向にあり、走行方向はほ

ぼ北一南を呈する。埋土は、最終埋土が土壌化した細砂質土(第13図南壁⑤層)であるが、そのほかは概ね水流によって一挙に流入した砂層(第13図南壁⑥～⑨層・第14図②～④層)である。II区南端には東西100cm、南北130cm、深さ55cmを測る流窓状の溜みがあることから、堰のような施設が設けられていたのかもしれない。なお、SD01からは壺や鉢の底部片(第22図7・8)をはじめとする土器細片が少量出土していることや、SD01上面において土器溜り3やSP55・

56が検出されていることから、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭頃までに埋没したことがわかる。

SD04は、Ⅱ区北西部で検出された遺構で、幅320～370cm、深さ40cmを測り、検出長は11mである（第11・12・15図、巻頭図版3・4、図版4・5）。走行方向は、北東～南西を呈している。埋土は、上層が鉄分の沈着した褐色の水流堆積（第11・15図①～③、⑤・⑥・⑧層）で、下層が上層よりも粒子の細かい灰色土で、下位ほどシルトが主体となる（第11・15図④・⑤・⑥・⑧・⑨・⑩～⑪～⑫層）。

褐色土では、細片化して鉄分・マンガン分が付着した土器が出土するのに対して、灰色土からは残存率の高い壺・甕・鉢・高杯や手埴り形土器などがまとまって出土している。褐色土、灰色土ともに、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭のものに限られることから、この時期にSD04は開放状態であり、周辺に集中して土器を消費する集落が展開していたことが推測される。とくに破片数の多い鉢・甕はタタキ成形されており、底部の突出がやや弱くなった段階のものである。また、甕の外面に施されたタタキには螺旋状タタキも見られるが、内面にヘラケズリが施されたものはほとんどなく、西摂地域の特性が表れている。少量ながら、淡路型の甕（第23図32、第25図71～73・81）や丹波系の甕（第25図74）・有段口縁高杯（第26図102）なども出土している。

SD04の本来の規模は、周辺調査で検出している大溝の長さから、幅6m以上、深さ1.5m以上の規模になる可能性が考えられる。

SD05～08は、SD01より東に位置する東西方向を指向する幅50～80cmの浅い溝で、褐灰色～灰黄褐色砂質土を埋土とする（第12図、図版5）。出土遺物は土師器の小片ばかりであるが、確認調査時に第2遺構面で検出した鞆痕の走行方向・埋土と共通性が認められることから、中世後半段階の鞆痕と判断した。一方、SD09～12は、SD01より西側のⅡ区南西端で検出したもので、幅10～20cm、深さ10cmほどの鞆痕である。北～南方向や北北西～南南東方向のものが見られ、第4層類似層を埋土とする。出土した遺物は中世のものを含む土師器小片である。確認調査において、法量や走行方向が合致する鞆痕が第3遺構面でも検出されていることから、SD09～12は中世後半段階よりも先行するものと考えられる。

SK（土坑）とSP（ピット）は、まとめて記述する。ピットの番号は、SD01以東では確認調査時の遺構番号に続けて43～56とし、SD01以西は101～132としている。これらの遺構の形態や深さは多様であるが、埋土は、概ね、視認色茶色の中砂、灰色土、褐灰色土の3種類に分類でき、埋土ごとにある程度遺構の年代を推定することができる（第16・17図）。

茶色の砂（土色根では黄褐色（10YR 5/3～10YR

5/4）に相当。）を埋土とする遺構は、SD01の西側で検出されている。埋土の締まりが極めて悪く、概ね浅いことから、一過性の水流によって流入したものと考えられる。中には、SK105・107・108・110・125のように、流入した砂の上に、褐灰色土が堆積しているものもある（第16図、図版6）。これらの遺構からは須恵器や陶器・磁器などの年代の下る遺物は出土していないので、SK107から出土したタタキ甕体部片や底部、SK125から出土した高杯脚部などの様相から、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の遺構と推測する。ところで、第4層直上にも同様の水成堆積層が観察できるので（第13図南壁③～⑤層）、当該地が何度か洪水に見舞われたことがわかる。

灰色土を埋土とする遺構は、SK103やSP104のように明確な柱痕跡を持つもの（第16図、図版6）や、SP119～121のように小規模ながらも深いものが見られる。前者のSK103からは須恵器片が出土しているもので、SK103とSP104は、古墳時代中期以降の独立柱建物の柱穴と考えられる。一方、後者は、埋土が第1層に似ていることから、耕作地に伴う杭跡の可能性が高い。このように、灰色土を埋土とする遺構は、他の遺構より年代が下る傾向が看取できる。

褐灰色土を埋土とする遺構には、確認調査時に第3遺構面でも検出したピットの多くも含まれる。さらに、SK101・102・104・115・117など、法量の大きなものや土器溜り1～3も該当する。しかし、一口に褐灰色土といっても、土質は砂質土やシルトなど実に多様で、形態や床面の状態も大きく異なる（第13・16図、図版6）。SK116～118は床面に直径15cm程度の窪みがあり、床面の凹凸が激しい。また、SK104・114の下位にはピットが認められ、複数の遺構が切り合っている可能性もある。相互に関連する遺構の抽出は難しいが、SD01付近において確認された、埋土に炭化物を含むSP45と、SP55・56は、法量や埋土が似ている。約2.0mの間隔で一列に並びSP113・123・128もそれぞれ法量や埋土が似ている。これらは、掘立柱建物や構物を構成するピットであった可能性が考えられる。このほか、建物等には復元できなかったが、SK101・115、SP118・126にも柱痕が観察されている。

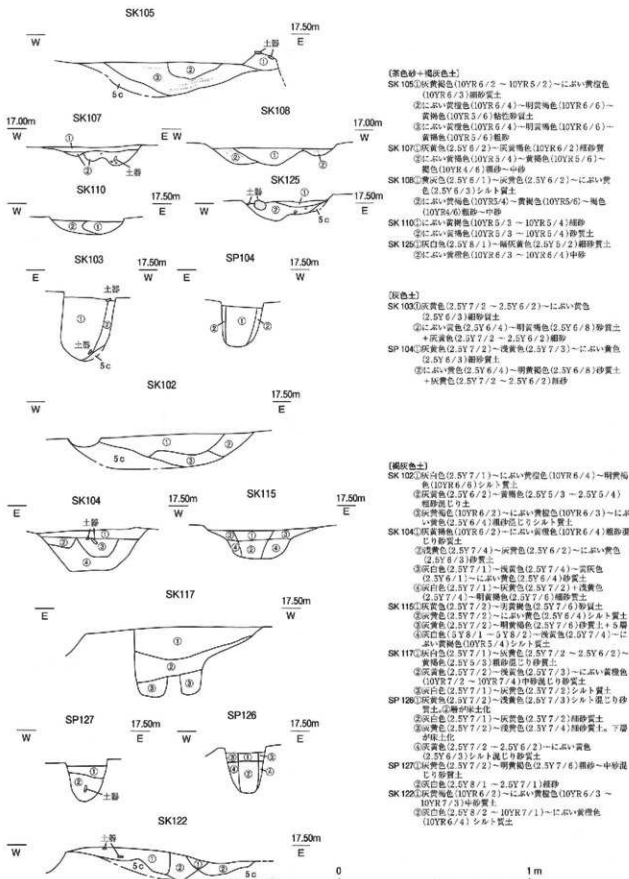
これらのSK・SPから出土した遺物の多くは、微細な土器片であるが、SK101・104・113・116・122・125などから出土したものには、大形壺やタタキ甕の体部片、高杯脚部（第22図6）など、器形や時期が調査程度把握できるものが見られる。これらは、確認調査時に第3遺構面でも検出したピットの遺物と様相が共通であることから、多くの遺構の年代を弥生時代後期末～古墳時代前期初頭と捉えている。なお、SK101からは、当該期の土器とともに縄文時代の石鏃（第22図9）も出土している。ただし、SP54・118からは中世に下る遺物が出土しているので、中世の遺構も含まれ



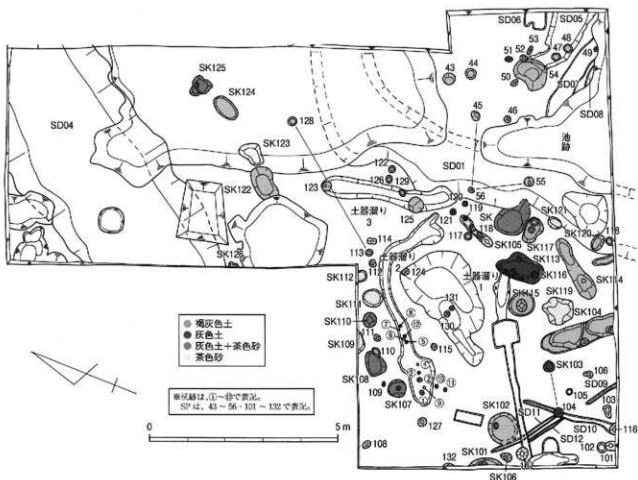
SD04遺土

- ① 明黄褐色(10YR 7/6 ~ 10YR 6/6)粗砂質土。視認色茶色。水流堆積層。
- ② 灰黄褐色(10YR 6/2 ~ 10YR 5/2)細砂~中砂質土。視認色黒茶色。マンガンの沈着ない土壌化で、他とは色調異なる。水流堆積層。
- ③ 灰黄褐色(10YR 6/2 ~ 10YR 5/2)~にぶい黄褐色(10YR 6/3) 細砂~中砂質土。視認色黒茶色。マンガンの沈着ない土壌化で、他とは色調異なる。水流堆積層。
- ④ 灰白色(2.5Y 7/1)~灰黄色(2.5Y 7/2)粗砂~細砂~シルト。水流堆積層。
- ⑤ 灰白色(2.5Y 7/1)~灰黄色(2.5Y 7/2)中砂~細砂。水流堆積層。
- ⑥ 灰黄色(2.5Y 8/4)~ 明黄褐色(2.5Y 7/6)シルト質土。5層の風化部分ない再堆積土。
- ⑦ 灰黄色(2.5Y 8/4)~ 浅黄色(2.5Y 7/4)~にぶい黄褐色(10YR 6/4)粗砂混じり土。5層の風化部分ない再堆積土。
- ⑧ 灰白色(2.5Y 7/1)~灰黄色(2.5Y 7/2)砂質土。4層類似。
- ⑨ ①層+⑥層。
- ⑩ 灰白色(10YR 7/1 ~ 2.5Y 7/1)~灰黄色(2.5Y 7/2)~にぶい黄褐色(10YR 7/4)シルト混じり砂質土。①層+5a層。溝内初期堆積土。
- ⑪ 灰白色(10YR 7/1)~暗灰色(10YR 6/1)~にぶい黄褐色(10YR 5/3 ~ 10YR 4/3)シルト質土。鉄・マンガン粒含む。ピット遺土。
- ⑫ 灰白色(10YR 7/1 ~ 2.5Y 7/1)シルト質土。溝内初期堆積土。
- ⑬ にぶい黄褐色(10YR 6/3 ~ 10YR 6/4)~にぶい黄褐色(10YR 5/3)砂質土。鉄・マンガン粒多く含む。⑩層に似る。
- ⑭ 灰白色(2.5Y 7/1)~灰黄色(2.5Y 7/2)~浅黄色(2.5Y 7/3)細砂質土。土質は⑩層に似る。
- ⑮ 灰黄褐色(10YR 6/2)粗砂質土。均質な層。
- ⑯ 灰黄褐色(10YR 6/2)~にぶい黄褐色(10YR 6/3)~灰黄色(2.5Y 7/2 ~ 2.5Y 6/2)~浅黄色(2.5Y 7/3)シルト混じり砂質土。均質な層。
- ⑰ 灰白色(2.5Y 7/1)~灰黄色(2.5Y 7/2)~浅黄色(2.5Y 7/3)砂混じりシルト質土。
- ⑱ 灰白色(2.5Y 7/1)~灰黄色(2.5Y 7/2)~浅黄色(2.5Y 7/3)シルト混じり砂質土。
- ⑲ 灰白色(2.5Y 8/1 ~ 2.5Y 7/1)シルト質土。④層に似る。
- ⑳ 灰白色(N8/0 ~ N7/0)~灰色(N6/0)シルト質土。有機物を含む。溝内初期堆積土。
- ㉑ 灰白色(2.5Y 8/2)シルト質土。②層に似る。溝内初期堆積土。
- ㉒ 灰白色(2.5Y 7/1)細砂質土。溝内初期堆積土。
- ㉓ 灰白色(2.5Y 7/1)~灰黄色(2.5Y 7/2)中砂混じり粗砂質土。溝内初期堆積土。
- ㉔ 灰白色(10YR 7/1)~灰白色(2.5Y 7/1)シルト質土。溝内初期堆積土。
- ㉕ 浅黄色(2.5Y 7/3 ~ 2.5Y 7/4)シルト混じり砂質土。溝内初期堆積土。
- ㉖ にぶい黄褐色(10YR 7/2)~灰白色(2.5Y 7/1)~灰黄色(2.5Y 7/2)砂質土。溝内初期堆積土。

第15図 SD04平面図・土層断面図 1/50



第16図 SK・SP土層断面図 1/20



第17図 SK・SP土色分類 1/100

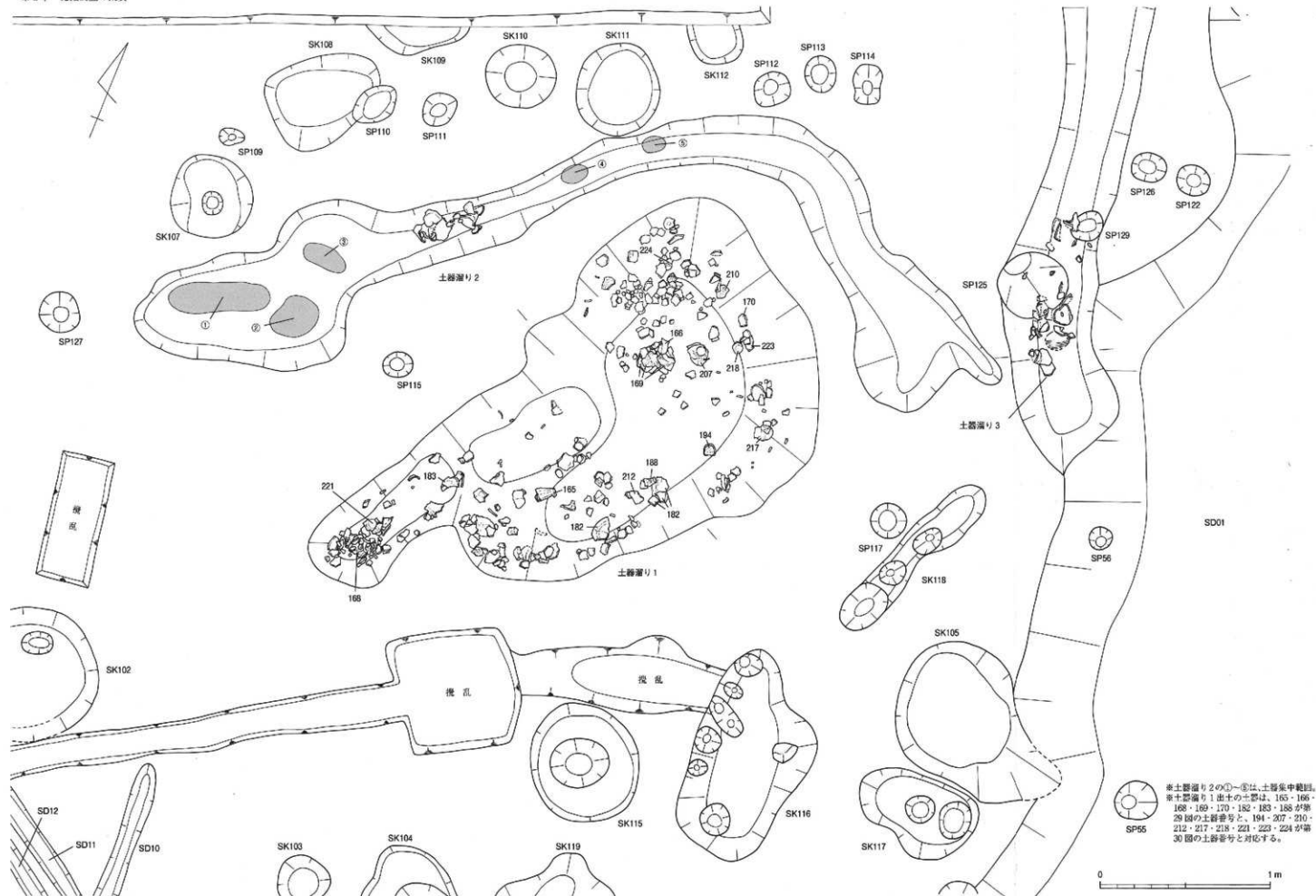
ていることがわかる。

土器溜り1～3は、Ⅱ区南部のSD01以西において、互いに近接する位置で検出した遺構である。不定形な平面形を有する土坑状の土器溜り1と溝状の土器溜り2・3が認められた(第12・18・19図、巻頭図版5～10、図版7～12)。また、土器溜り2の西部床面や近接する位置に集中的に抗跡が検出されているので、土器溜り2と併せて記述する。

土器溜り1は、チェロを思わせるような不定形の平面形で、長軸320cm、短軸170cmを測る。南西側に突き出した部分は幾分浅く、最深で25cmであるが、北東側は楕円状の断面形を呈していて最深55cmであった(第12・18・19図、巻頭図版5～10、図版7～9・12)。埋土は上層・中層・下層に分かれ、上層は黄色がかった砂質土(第19図①層)、中層は締まりのあまい灰色砂質土(第19図②・③層)、下層は炭化物や土器を多く含む灰色の細砂質土～シルト質土(第19図④～⑧層)である。おそらく、上層は第4層の床土として機能したことにより、鉄分の沈着や土壌層の浸透があり、固くなったものであろう。また、法面に堆積している⑦・⑧層は、基盤層(第6層)起源の土壌層であり、土器溜り1は構築されてから一定期間、開放状

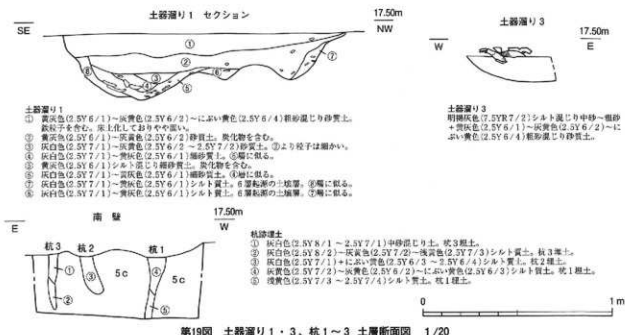
態であったことが推測できる。

土器溜り1から出土した遺物は、弥生時代後期末～古墳時代前期初頃の土器で、残存率の高いものが相当量含まれている。土器の出土は中層から下層に多く、この層には炭化物も含まれていた。土器の分布は遺構全体に及んでいたが、幾分南側に多い。土器は、床面に貼り付くように出土したものや、遺構の肩部から斜めにずり落ちて法面に沿って傾いているものが多いので、この様子から、遺構の周辺に置かれていたものが落ち込んだようにも人為的に投入されたようにも見える。土器の内訳は、多様な形態の鉢が圧倒的に多く、4割ほどを占める。ほかには、壺、甕、高杯が見られる。総じて、飲食用の器種に偏る傾向がある。さらに、口縁部に横線や櫛描波状文や円形浮文を施した壺(第28図128)、丁車なヘラミガキ調整を施した細頸壺(第29図165)、径の小さい杯部に大きく広がる杯部を持つ高杯(第28図138)やミニチュアの鉢(第28図164)、小形の爵台(第29図184)など、通常の飲食には使用されにくい特徴的な器種も含まれている。このことから、この遺構の周辺で飲食を伴う儀礼が行われたことが推測できる。土器溜り1から出土した土器について、層位による明確な時期差を見出すことはできなかった



第18図 土器溜り1～3平面図 1/20

本土器溜り2の①～⑤は、土器集中範囲。
 本土器溜り1出土の土器は、165・166・
 168・169・170・182・183・188が第
 29図の土器番号と、194・207・210・
 212・217・218・221・223・224が第
 30図の土器番号と対応する。



第19図 土器溜り1・3、枕1～3 土層断面図 1/20

が、底部の突出状態や壺体部の球胴化、細頸壺の口頸部の内傾傾向、138のような高杯や184のような器台の存在などの器種構成から、SD04から出土したものよりも一段層新しい様相を呈していると言える。

なお、土器溜り1の法面や床面で検出したSP124・130・131は、遺物の出土がないために年代の比定ができないが、土器溜り1より後出する可能性もある。

土器溜り2は土器溜り1の東辺から北辺を囲むように検出された幅25～75cm、深さ10cm程度の浅い溝状遺構で、L字形を呈し、長さは570cmを測る(第12・18図、巻頭図版5・9・10、図版7・10・12)。埋土は、東部が灰黄色(2.5Y 7/2)～浅黄色(2.5Y 7/3)～灰白色(10YR 8/2)～浅黄褐色(10YR 8/4)～にぶい黄褐色(10YR 5/4)砂質土で、第5層を起源として土壌化した粗砂混じり土である。土器は専ら屈曲部より西部に集中しており、この集中部分の埋土は、土壌層が主体となっており、東部より浅黄色がかった灰白色(2.5Y 8/1)～2.5Y 7/1)～浅黄色(2.5Y 7/4)を呈する砂質土である。土器は遺構検出時にすでにその一部が見えるほど床面から幾分浮いた状態で、6箇所集中して確認されたが、出土状態を図化できたのはその内の一箇所だけで、ほかは分布範囲を記録するに留めた。土器はいずれもかなり劣化が進んでおり、取り上げ時に器種が判別できたものは少なかったが、整理過程において、比較的高残存率の高い壺・甕・鉢・高杯・器台などが認められた(第32図241～246)。ただし、これらは、遺構内に埋納されたものではなく、土器溜り1と同じように、流入ないし投棄によって遺構内に埋没したものと考えられる。

ところで、土器溜り2の土器集中部を完掘したところ、床面において灰黄色のシルト質土や砂質土を埋土

とする直径10cm以下の杭跡を検出した(枕1～9・12)。土器溜り2の南西側近接地においても、同様の杭跡2基(枕10・11)が確認された(第12・19図、図版12)。枕1～3を断ち割って断面を観察したところ、これらはほぼ直立しており、先細りになる断面形から杭跡と判断したもので、枕1は深さ32cmとかなり深くまで打ち込まれていた。これらは、土器溜り2の屈曲部分以西にほぼ一列に連なっており、土器溜り2の西端で屈曲して、土器溜り1の方向に2本が続いている。また、土器溜り1の南東側に位置するSK116・118は床面に直径10cm程度の円形や楕円形の窪みが認められる。SK116・118は包含する土器が少なく小片であるために、土器溜り2との同時性を証明することはできないが、これらの床面の窪みは、土器溜り1を挟んで、枕1～12と対峙する杭跡かもしれない。

土器溜り3は、SD01の西屑部から北方向に延びる幅40～60cm、深さ23cm、長さ350cmの断面直形の溝状遺構である(第12・14・18・19図、巻頭図版5・9・10、図版7・11)。埋土は明褐色(7.5YR 7/2)シルト混じり中砂～粗砂で、SD01の埋土と土壌が混じった状態であった。土器は、遺構南端部の東西約30cm、南北約100cmの範囲において集中的に出土しており、土器溜り2と同様に床面から浮いた状態であった。ここからは、壺底部(第32図251)や残存率の高い甕(第32図247・248)が出土しており、器種や年代も土器溜り2と似ている。土器溜り3は、土器集中部を除くと遺物の出土が極めて少ないことや、土器集中部の下にSP125・129が検出されていることから、土坑状の土器集中部と、その北側に位置している溝状遺構に分けることができるのかもしれない。なお、土器溜り3の北端床面で検出したSP123は、土器溜り3

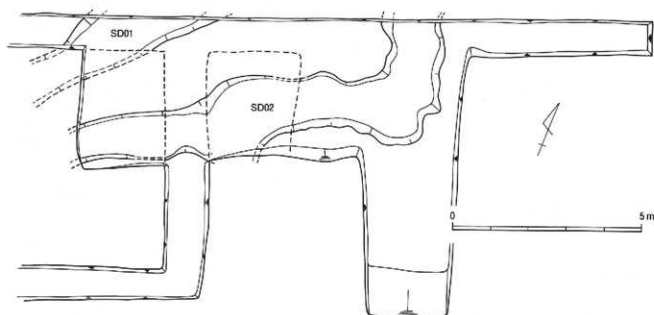
に先行する遺構である。

土器溜り1～3は、出土した堦の形態や調整に共通点が見られるなど、同時期の遺構と考えることができる。加えて、土器溜り1の北辺から東辺にかけて、土器溜り1を囲むように、土器溜り2・3が位置していることから、これらが相互に関連する遺構である可能性も考えられる。埋土を見た場合、土器溜り2と土器溜り3は良く似ているが、土器溜り1の様相は異なる。これは、土器溜り1がかなり深く掘り窪められ、一定期間、開放状態が保たれていたのに対して、土器溜り2・3は比較的浅く、容易に埋没が進む状態であったためであろう。杭1～12やSK116・118床面の様相から推測できる杭列も、土器溜り1の周囲を取り囲んでいるように見える。

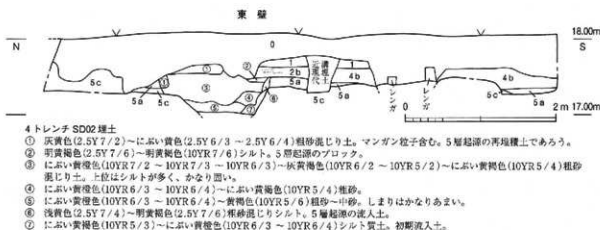
土器溜り1～3や、土器溜り1と杭列が一体の遺構であると見た場合、土器溜り2・3や杭列は、土器溜

り1を他から隔絶するための区画としての性格が想定できよう。仮に、SK116・118の位置にも区画が続いていたとすると、土器溜り1は、北・東・南方が区画され、西方が開放されていたことになる。土器溜り1の西部のみが細い溝状であることも、この遺構が西を意識する構造であった可能性を補強する。

ところで、杭列と土器溜り2は、杭列が土器溜り2に先行すると考えられるので、杭列によって土器溜り1を区画していた段階から、土器溜り2・3のような溝状の遺構によって土器溜り1を区画した段階への変遷を推定したい。ただし、土器溜り2・3が周辺の土砂によって容易に埋没しているのに対して、土器溜り1の堀土は、基盤層の風化層や基盤層を起源とする土壌層であることから、土器溜り1には上屋構造があったと容易に埋没しない構造であったと考えることもできる。この場合、区画と考えている土器溜り1・2が、



第20図 東区遺構平面図 1/100



第21図 4トレンチ土層断面図 1/50

4トレンチ SD02埋土

- ① 灰黄色(2.5Y 7/2)～にぶい黄褐色(2.5Y 6/3～2.5Y 6/4)粗砂混じり土。マンガン粒子含む。5層起源の再堆積土であろう。
- ② 明黄褐色(2.5Y 7/6)～明黄褐色(10YR 7/6)シルト。5層起源のブロック。
- ③ にぶい黄褐色(10YR 7/2～10YR 7/3～10YR 6/3)～灰黄褐色(10YR 6/2～10YR 5/2)～にぶい黄褐色(10YR 5/4)粗砂混じり土。上位はシルトが多く、かなり固い。
- ④ にぶい黄褐色(10YR 6/3～10YR 6/4)～にぶい黄褐色(10YR 5/4)粗砂。
- ⑤ にぶい黄褐色(10YR 6/3～10YR 6/4)～黄褐色(10YR 5/6)粗砂～中砂。しまりはかなりあまい。
- ⑥ 浅黄褐色(2.5Y 7/4)～明黄褐色(2.5Y 7/6)粗砂混じりシルト。5層起源の流入土。
- ⑦ にぶい黄褐色(10YR 5/3)～にぶい黄褐色(10YR 6/3～10YR 6/4)シルト質土。初期流入土。

雨落ち溝であった可能性もある。

このように、区画された遺構の性格については、土器溜り1の埋土に炭化物を含んでいること、ここから出土した甕が煮炊きに使われた様子が観察できること、高杯や鉢といった供膳具が圧倒的に多く、その残存率が高いことなどから、単なる廃棄のための場ではなく、飲食を伴う儀礼・祭祀の場と捉えておきたい。SD01やSD04の存在から、あるいは、水辺の祭祀場であったのかもしれない。

③東区（第11・20・21図、巻頭図版2、図版13）

この調査区は、2トレンチ北部・2トレンチ拡張区・4トレンチ北部を含む状態で設定した。第5層土面において、1トレンチ東部から2トレンチにかけて南流し、ほぼ直角に屈折してから西流するSD02を検出した。SD02の幅は120～180cm、深さは60cm以上で断面形は逆台形を呈し、検出長は11mを測る。埋土は1トレンチ北壁や4トレンチ東壁で記録したように（第11図オ～コ層、第21図①～⑦層）水成層を主体としており、その一部には明確なラミナが見られる。東区内では西へ延びていくように見えるSD02ではあるが、Ⅰ・Ⅱ区ではその痕跡を確認できなかったことや、SD01がⅡ区において方向を変えて南流する様子から本来の地形を想定した場合、SD02は、Ⅰ区の手前で屈曲して南下するのかもしれない。また、2トレンチ拡張区と4トレンチの間で、SD02の南肩部が検出できない部分があったことから、この部分でSD02が2つに分流している可能性もある。SD02からは遺物が全く出土していないことから、SD02はSD01よりも先行する段階の自然流路と考える。

(5) 遺物

出土遺物は、27ℓコンテナ20箱分あって、面積や遺構面数に対して、本遺跡でも最も多い出土量である。これらのほとんどがⅡ区の遺構から出土したもので、その内訳は、弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・陶器・磁器・瓦・石鏡等、多様である。遺構に伴う遺物では、SD04や土器溜り1～3を中心とする弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の土器が圧倒的に多いが、SK103には須恵器片が見られた。また、磐城やSP54・118には、中世の土師器片が少量見られた。

以下では、包含層の年代の指標とした土器を述べた後に、遺構から出土した主要な遺物について、遺構ごとに概観する。

①包含層出土遺物（第22図、図版14）

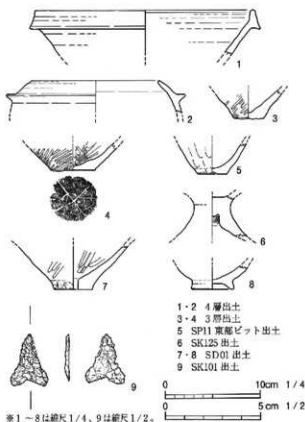
ここで包含層として取り上げたのは、第3層と第4層である。前述したように、上位層である第3層の遺物の方が、下位層である第4層の遺物よりも時間的に古いという、明らかな時間の逆転現象が認められた。第22図の1・2は第4層から出土した中世遺物で、1は東播磨須恵器の鉢、2は瓦質羽釜である。第4層に

は、土師器・瓦器・陶器・中国青磁の小片などの中世遺物も含まれていた。

第22図の3・4は第3層から出土した土器である。いずれも鉄分・マンガ分が付着しているが、磨滅は少ない。外面に斜めタタキを施す雲・鉢の底部で、ともに平底の底部が小さく、突出度が弱いことから、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭のものと考える。4は外底面に明瞭に葉の葉脈痕が見られる。これらは、後述するSD04や土器溜りの土器と胎土が共通で、時期も近いものと言える。

②SK・SP出土遺物（第22図、図版14）

SK・SPから出土した遺物は、弥生土器・土師器・須恵器・石鏡である。ここでは、土坑やビットの多くが弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の遺構であると判断する根拠となった土器のうち、最も残存状況のよい2点と石鏡を挙げておく。第22図の5は、確認調査時に検出したSP11東部ビットから出土した。径の小さな輪高台状の底部で、体部は内湾気味に緩やかに立ち上がる。外面は指オサエと指ナデ調整で丁寧に仕上げられた小形の鉢である。6はSK125から出土した高杯脚部である。鉄分が浸透して黄褐色に変色しており、調整の観察は難しい。短い脚柱は中空で、杯部は挿入充填法で成形している様子が分かる。9はSK101出土の打製石鏡である。検出時に少し欠損してしまったが、ほぼ完形で、全長2.8cm、最大幅1.9cm、厚さ0.2cm、



第22図 包含層、SK・SP、SD01 出土遺物実測図

重さ0.95gを測る。芦原で通常のサヌカイト製の凹蓋式石甕で、縄文時代のもと考えられる。

③SD01出土遺物（第22図、図版14）

SD01から出土した遺物は極めて少量の土器で、僅かに第22図の7・8のみ図化できた。第22図の7は焼成前穿孔の有孔鉢の底部、8は上げ底の鉢底部で、ともに指オサエによって底部を突出させている直口の鉢である。いずれも弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の範疇で捉えられよう。

④SD04出土遺物（第23～27・31図、図版14～17・20）

SD04から出土した遺物は、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の土器に微量の弥生時代中期の土器が混じっている。

上層の褐色土から出土した土器は、流水による磨減に加えて、北側ほど、鉄分・マンガンの沈着が著しく、器面の劣化の進んだ破片として出土しており、下層の灰色土と比べると明らかに量も少ない。これに対して、灰色土から出土した土器は量が多く、器種も豊富で、個々の遺物の残存率もかなり高い。灰色土に含まれていた土器は、便宜のために上部と下部に分けて取り上げたところ、上部から出土したものには褐色土ほどではないものの多少鉄分の沈着しているものが見られた。灰色土上部と下部とでも接合関係を有するものは少なく、総じて、下位ほど土器の残存状態は良好である。ただし、残存率の高い個体の出土状態を検証したところ、一所に破片がまとまっているものもあるが、2m四方程の範囲に同一個体の破片が点在しているものもある。このことから、これらの土器は投棄されたものと考えている。なお、褐色土出土土器と灰色土出土土器の間に接合関係は確認できなかった。

第23図の上部に図示した10～23は、褐色土から出土した土器で、その下の24～50は、灰色土の上部から出土したものである。第24図51～58、第25図59～86、第26図87～104、第27図105～127は、灰色土下部から出土したものである。また、第31図には、別途、甕や甕の断面と外面の器面調整の拓影を収めている。

褐色土から出土した器種は、甕・甕・鉢が圧倒的に多く、若干、高杯や甕が混じる。灰色土から出土した器種も甕・甕・鉢が主体をなすが、高杯や甕に加えて手焙り形土器も認められ、鉢の形態も多彩である。

褐色土から出土した10・11は甕、12・13は甕、14・15は鉢、16は高杯等の脚部、17～23は甕・甕・鉢の底部である。10はマンガンの付着によって変色しているが、割れ面で観察すると、胎土は灰白色の良質の粘土である。受口状の口縁部外面に櫛状波状文を施す四国系の甕である。11も鉄・マンガンの付着が著しく、調整は観察できないが、黄褐色の肌理細かい胎土で作られた二重口縁甕である。明確な屈曲を持った口縁部は外反気味に外上方に大きく開き、外面に櫛状波状文と円形浮文を有する。12は「く」の字に屈曲する口縁

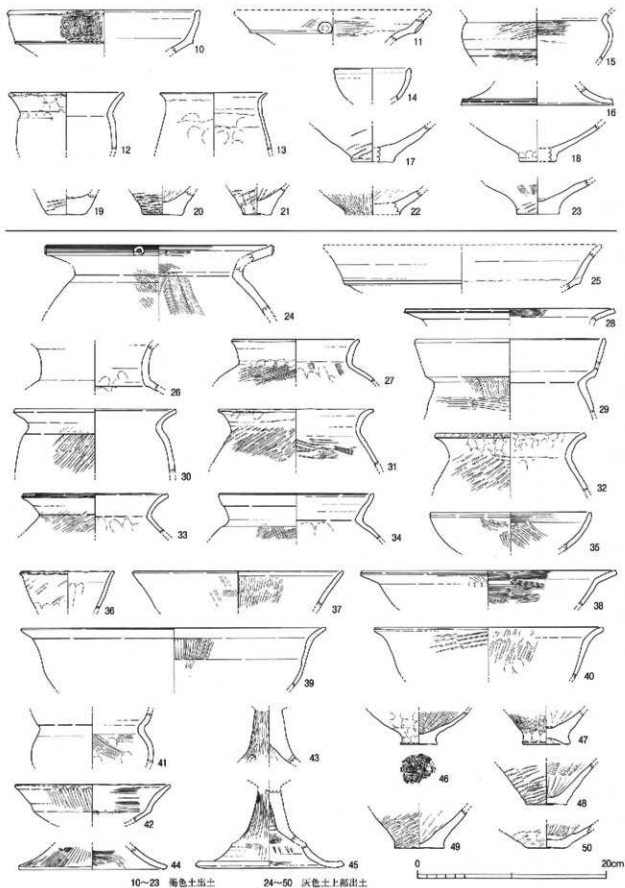
部を指オサエで作出した小形の甕である。13は粘土紐の接合痕が明瞭に残る薄手の甕で、口縁部は短く外反する。弥生時代中期前半の土器で、周辺からの流入資料と言える。14は口縁部直下にヨコナデを施す、器壁の厚い直口の碗形鉢である。15は体部上位が横張りする低平な体部に外反する口縁部を持つ。体部はタタキ成形の後、外面下半に板状工具による水平方向の調整を加えたもので、内面にも板状工具の擦過痕が残る。16は端面に擬凹線が見られる。ひとまず脚部部としたが、甕の口縁部の可能性もある。17～23はいずれも平底の底部で、径の大きめの17・18・22・23は甕、小さな19・20は甕ないし鉢、21は鉢である。21は外面に施した指オサエに指紋が見られる。これらは、概ね庄内期古段階併行と考えられる。

灰色土上部から出土したものは、24～26が甕、27～34が甕、35～41が鉢、42～45が高杯、46～50が甕・甕・鉢の底部である。図版14には、甕口縁部に櫛状波状文の見える二重口縁甕の口縁部片（A）の写真も収めている。

24は、口縁部と頸部から肩部の破片を図上復元した広口甕である。短い頸部と口縁部の作り分けが明瞭で、口縁部の径は大きい。口縁部は幅狭く直立し、擬凹線を施した上に円形浮文を有する。体部から頸部にかけては外面にヘラミガキ、内面に指ナデ調整が残る。25は無文の二重口縁甕で、口縁部は緩やかに斜上方に向けて外反する。26は二重口縁甕の頸部から肩部の破片である。頸部はやや外反気味に立ち上がる。

甕は、「く」の字状に屈曲する口縁の外接箇所が丸みを持ち、外反する口縁部は端部を尖り気味に丸く収めるものが多く、体部は外面にタタキ成形痕、内面にナデ調整が見られるものが主流である。その中において、口縁部のみ残る28は、他の甕よりも直線的に広がるシャープな作りで、いわゆる庄内式甕の口縁部の造作テクニックに似ている。また、口縁部のいびつな31・32は、口縁部を指オサエで粗成りする波路型の甕である。31の口縁部外面には強いナデ調整を行っているが、32は指オサエのみで仕上げているが、口縁部に波路・紀伊系のタタキ調整が見られる。変形「S」の字状口縁の29は、外面が暗灰色、内面が褐色を呈しており、山陰系の形態と推測できるが、胎土には石英・長石粒が含まれているので、在地産と考えられる。直径はもう少しあるだろう。34は、「く」の字状に屈曲した口縁部が内弯気味に立ち上がり、端部が玉縁状に膨れる形態である。布留式甕の影響を考慮する必要がある、新しい要素を持った甕と言える。

35は浅いボール形の鉢で、内面・外面にヘラミガキを施す。暗灰色を呈する外面の口縁部直下には微弱的な擬凹線が一条見られ、内面はヨコナデで仕上げている。無縁高杯の杯部の可能性も十分考えられる。36は外上方に直線的に広がる直口の小型鉢で、タタキ成形の後、



第23図 SD04 褐色土・灰色土上部出土土器実測図 1/4

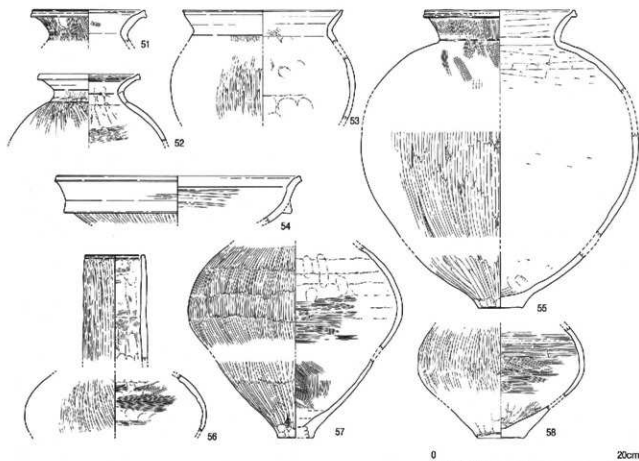
ナデによって器面を平滑に仕上げている。外面下部に明確な黒斑が見られる。37~40は共用器的な中・大形の鉢で、37は直線的に開く薄手の口縁部にヘラミガキを施す。有稜高杯の皿形杯部とも考えられる。38~40は口縁部を外反させるもので、38は口縁部の外折線が明確で、端部に面を持つ浅型の鉢と言える。39・40は外弯の弱い口縁部の端部を丸く収める深手の鉢である。39は29の甕とよく似た胎土・色調を呈する。41は小形丸底土器に近い形型の鉢で、丸味を帯びた体部に内弯気味に立ち上がる口縁部が付く。42は有稜の小形高杯の杯部で、皿形の杯部は変化点に丸みを持つ。内面には板状工具によるヨコナデが残る。縦方向のヘラミガキを基調とする43は中夾の脚柱部。44・45は黄褐色の良質な胎土で、丁寧なミガキ調整を施す脚部である。45は中空の脚部と屈曲を持つ有稜の脚部を同一個体と判断して図上復元したもので、脚部は大きく外弯して端部を持つ。

46はやや小振りの突出する平底を持つ壺ないし鉢の底部、47は上げ底状で外面にハケメの残る鉢底部、48・49はタタキ甕の底部である。50はタタキ成形の甕底部であるが、48・49と比べて底径が小さく突出がほとんどない。体部も球形に張ることが明らかで、他の

資料より新しい様相を帯びている。今回出土した甕底部の中で、50が、最も体部の球形化が進み、底部の平底部分の突出がない個体であり、注目される。

灰色土下部から出土した第24図の51~58は壺、第25図の59~86は甕、第26図の87~98は鉢、99~103は高杯、104は手埴り形土器で、第27図の105~109は壺底部、110~119は甕底部、120~127は鉢底部である。また、第31図の225・226は壺体部、227~233は甕体部である。

51・52・55は口縁部が緩やかに短く外反する広口壺である。51は端部を上下に拡張し、外傾する端面に鋸凹線を施したもので、口頭部外面に緻密なタテハケ調整が見られる。52の口縁部は幅の狭い端部を持つ。体部から頸部は、タタキ成形の後に外面にはヘラミガキを施す。内面は上部が縦方向のナデ、中位には指オサエと指ナデの痕跡が残る。53は近接して出土した口頭部片と体部片を同一個体と判断して、図上復元した広口壺である。頸部で「く」の字に屈曲した短い口縁部は、やや内弯気味に立ち上がり、端部を丸く収める。球形化の進んだ体部は内面が指ナデで、外面が縦方向のヘラミガキで仕上げられている。54は、石英・長石に加えてチャート片やシャモット片を多く含み、ざら



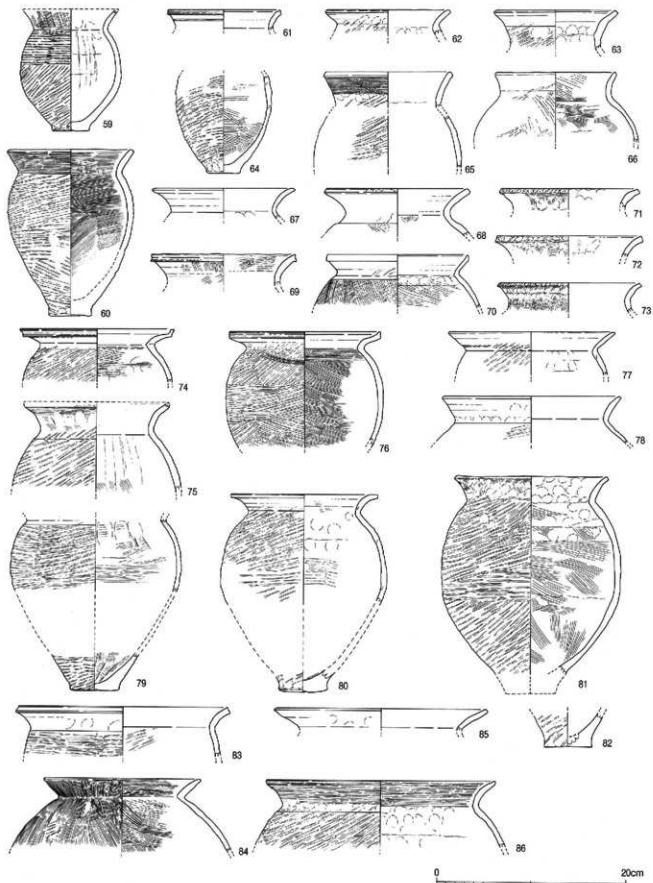
第24図 SD04 灰色土下部出土土器実測図 (1) 1/4

ついた質感の二重口縁壺で、橙褐色を呈する。残存している口縁部は、浅い碗形の体部に外反する短い口縁部を持つ鉢のような形で、口縁端部はヨコナデによって面を持つ。外面には断面三角形の糸帯を貼り付け、それ以下には丁寧なヘラミガキ調整を施しており、色調や胎土に外来的な要素が認められる。55は保存状態が悪く、全体的にもろくなっており、破片は多いもののうまく接合できなかった。底部は幾分突出の弱い平底で、体部は強く張り、最大径は中位より上に位置する。口頸部は大きく屈曲し、短めの口縁部は外反して端部に面を持つ。体部外面は一次調整であるハケ調整を行った後に縦方向のヘラミガキを行い、肩部から頸部にかけては繊細なタテハケで仕上げている。内面は板状工具による横方向のナデともケズリとも言える調整が見られるが、器壁は厚い。56はほぼ直立する口頸部を持つ細頸壺で、胎土や調整が共通する肩球化の見られる体部片と合わせて図示しているが、口頸部はもう少し長くなるかもしれない。内面は指オサエとナデを併用し、外面はタテ方向のヘラミガキを施す。57・58は平底の底部に算盤玉形の体部が続くもので、いずれも中位付近に最大径がくる。内面は指オサエや板状工具によるハケ調整、外面はヘラミガキ調整で、広口壺に復元できよう。第31図に体部の拓本を収めている225はハケ調整に加えて、ヘラミガキの見られる体部片である。226は調整が観察できないが、胎土に微量の褐色粒が含まれていて、全体に褐色がかっていることから、河内平野部からの搬入品の可能性がある。

壺は、タタキ壺が多く、小形品から大形品まで多様な法量ものが見られる。頸部の外接箇所が丸みを持つものが目に付き、59・60・62・66～69・77・78・86がこの形態である。また、75・76・80のように、口縁部が反り気味に屈曲するものも一定量見られる。59・60は完形に復元できたV様式系のタタキ壺で、丈長のプロポーションと言える形態である。59は復元口径10.0cm、底径4.0cm、器高13.0cmを測る小形壺で、体部の下3分の2は右上がりの斜めタタキ、上3分の1は水平方向のタタキを施す。叩き出した口縁部外面にタテハケを施すが、口縁部の作りは粗雑である。また、内面調整は縦方向の指ナデのみで、粘土紐の接合痕が残る。器壁は厚い。60は口径12.7cm、底径4.2cm、器高17.7cmを測り、小形品の中では少し大きい。体部外面のタタキは3分割成形を残し、下から、右下がり、水平、右上がりと続く。内面にはハケ調整が見られるが、器壁は59同様に厚い。叩き出した口縁部は横方向のナデ調整で仕上げる。59に近い法量の64は、口縁部を復元できなかった。外面のタタキはほぼ右上がりに統一されている。61は外反する短い口縁部で、外傾する口頸部に翼凹線が見られる。62・66・75・77・80・86などは口縁部を叩き出した痕跡の残る壺で、62・77・80・86は口縁部を簡易なナデ調整で仕上げて

いる。66はタタキ調整の後に頸部から体部にかけてベラナデ状の調整が見られる。75は口縁部に指オサエや板状工具によるナデを加えた壺で、胎土やタタキの似ている体部片と図上復元している。体部外面には螺旋状のタタキが見られる。口縁部の屈曲の大きい80は、端部に面を持つ。86は復元口径24.0cmを測る大形品である。

63・65は、口縁部が長く、体部と口頸部の境に明確な屈曲がない。口頸部は体部から引き続きタタキで成形し、ヨコナデでタタキ痕跡を消して、端部を丸く収める。67・68・78は口縁部が外に開き、口縁部は指オサエやナデで整形している。なお、68は口端部にかすかにタタキ状の痕跡が見られる。外反する口縁部の端部に明確な凹面がある69は、口縁部の内面・外面にヘラミガキが見られる。あるいは、広口壺と見るべき個体かもしれない。70はシャモットもしくはクサリ礫の微小片を多く含む褐色の壺である。「く」の字状に屈曲する口縁部は直線的に外上方にのび、立ち上がり気味の外端面を持つ。頸部はヨコナデ調整を、丸みを帯びた体部は丁寧なハケ調整を行ってタタキ痕跡を消している。内面は外面とは異なる原体で板ナデを施しているなど、特徴的な作りである。あるいは、北摂津の三島地域からもたらされたものかもしれない。71～73は指オサエで外反する口縁部を作り出し、端部にタタキを加えており、口縁部の造作は粗い。淡路・紀伊系の壺で、口縁部外面にナデが見られないことから、庄内式併行期よりも古い要素を持つものと言える。丁寧な作りの74は「く」の字状に屈曲した口縁部が大きく開き、さらに屈曲して上方に短く立ち上がるもので、上端に面を持つ。その形態から丹波地域の影響が考えられる。色調は白色に近く、胎土は極めて精良であるが、花崗岩起源の微細粒を含むことから、外來者によって外來系器形が在地で生産された「露地製土器」〔森岡1999〕の可能性が考えられる。76は頸部にまでタタキが及んでおり、大きく屈曲する口頸部は、内湾気味に立ち上がり、端部を揃み上げて擬凹線を施す。体部は球面化が認められ、内面には板ナデが見られる。体部外面のタタキは、下部が右下がり主体、中央部が水平から右上がり主体、上部が顕著な右上がりであり、上部には指か工具が擦れたような痕跡が見られる。灰白色を呈する79は、色調や胎土の特徴から同一個体と判断した体部と底部から成る。精良な胎土には、石英・長石粒とともに少量ながらチャートが含まれており、底部には黒斑が見られる。内面には指オサエとハケメが、外面にはタタキが見られる。81は叩き出した口縁部を指オサエで整形したもので、造作法から淡路型と言



第25図 SD04 灰色土下部出土土器実測図(2) 1/4

えるが、端面タタキや刻みは認められない。体部内面には、下位に縦方向の、中位から上位に横方向のハケが施され、外面は、下位と上位が右上がり、中位が水平のタタキで、特に上部は螺旋状のタタキである。83は、外反する短い口縁部にナデを施した端面を持つ。体部外面には水平方向のタタキが残る。

第31図に示している227～233は、壺体部のタタキの性状が観察しやすい個体である。この中では、231・232が4本/cmのやや原体の細かいタタキであるが、主流となるのは、228や233のように2～3本/cmの粗めのタタキである。230はタタキの後にハケ調整を施しているが、類品は極めて少ない。

このように、SD04出土の壺は、外面のタタキが明確に残り、器壁は厚く、庄内壺との共通点が多く、乏しいものが主流である。その中であって、84は球形の体部を持ち、外面に丁寧なハケ調整を施し、やや得手傾向であることから、他とは異なる特徴を持つ壺である。胎土には石英・長石やシャモットを含み、乳白色を呈する。

なお、特徴的な色調の70・73・74を除くと、壺は灰褐色や黄褐色、黄褐色を呈するものが圧倒的に多く、このような色調が、宮川水系の在産土器の特徴と言える。感性的には、下流域に位置する若宮遺跡出土の弥生土器などとも共通した要素が認められる。

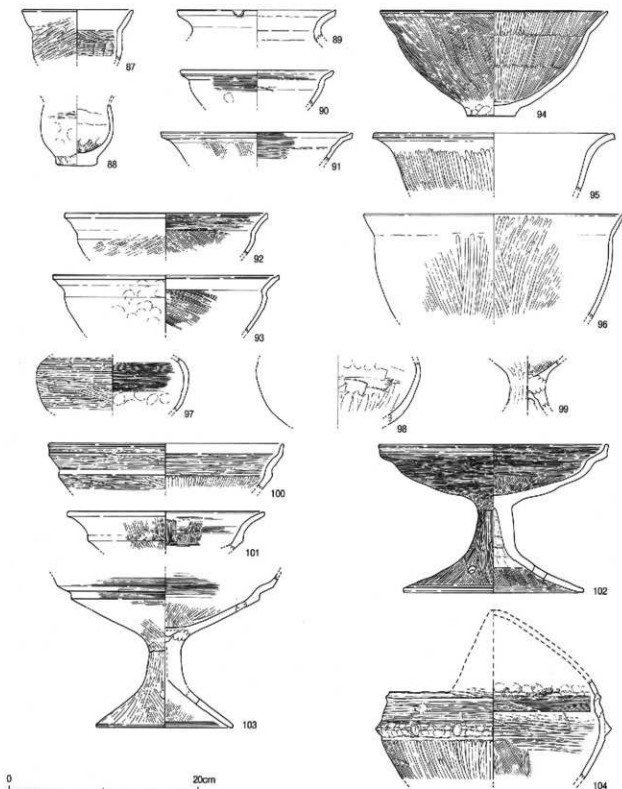
鉢も、壺と同様に多様な量目のものが見られる。また、口縁部が外反するものや直口のものなど、形態も多彩である。87は、タタキ成形で内湾気味に立ち上がる体部から、屈曲して外上方に口縁部がのび、口径は体部径より少し大きい。おそらく底部は小さくなるだろう。体部外面から口縁部にかけてタタキ成形痕が残る、内面には粘土結接痕とハケ調整が見られる。88は、指オサエの顕著な平底の底部に、膨らみ気味に口縁部へ移行する小さな体部を持つ。タタキ成形の体部に取り付け口縁部は外反するようである。内面には、粘土結接痕が残る、指ナデで整形している。89は外反する厚手の口縁部で、端部に指ない棒状工具による押圧が加えられている。90～96は外反する口縁部が付くもので、口縁端部を丸く収める90・96、端面を有する91～93・95、屈曲が弱く端部を尖り気味に終わらせる94に分けられる。90～93の調整はナデやハケを主とする。完形に復元できた94は、外面に細かいハケ調整、内面にタテ方向の丁寧なヘラミガキを施し、底部には指オサエが顕著である。口径が大きく深手の器体をなす95・96は、タテ方向のヘラミガキを施すもので、95の口縁部は丸い面を持つように仕上げられている。96の口縁部は尖り気味で丸く収める。97は低平で丸みを持つ体部で、外面には横方向のヘラミガキ調整を施す。内面は下部に指オサエ、上部にハケ調整が見られる。98は鉢でない壺の半球状の体部片で、残存部上端で頸部に向けて内側に屈曲する。外面は磨滅している

が、ヘラミガキが施されているようで、内面は板ナデや指ナデが残る。

99は内面にハケ調整の見られる杯部と中空の脚部の破片で、外面はヘラミガキを施す。100・102は浅い杯部に屈曲する短い口縁部が付くもので、口縁部外面に擬凹線を持つ有段高杯である。102の杯部や脚柱部はほぼ完存しており、脚柱部も3分の2が残存していた。口縁部には擬凹線が走り、杯部は内底部のみ縦方向のヘラミガキで、ほかは横方向のヘラミガキを施している。中空の脚柱部は下部が太く、明確な屈曲を持って裾部が広がる。外面に縦方向のヘラミガキ、内面にハケ調整を行い、3方向に円形の通し孔を穿つ。胎土は石英・長石・シャモットを含む精良な粘土で、淡褐色を呈し、口縁部に黒灰を有する。100の杯部形態は102によく似ているが、擬凹線の原形は異なる。これらは、丹後・若狭・但馬・丹波といった丹波高原以北の北近畿一円に広がる擬凹線文系土器の一群に属する有段口縁高杯の影響を受けたもので、杯部は西谷2式新段階のものに極めて似ている（高野2006）。しかし、脚部は西谷式程の高さはなく、摂津和泉に見られる高杯の脚部を合体させて成立したものであろう。西谷2式新段階は、庄内期古段階とふれあう年代観が与えられており（森岡・西村2006）、100・102もその段階のものと考えられる。101は摂津に通有の有段高杯の杯部で、稜角が明確に見られ、杯部の外反がやや強い厚手の作りである。103は、102よりも微細な長石・石英・シャモットを多く含み、灰褐色～淡褐色を呈する胎土の破片を同一個体と認定して、図上復元したものである。有段の口縁部は横方向のヘラミガキを多用し、杯部や脚部は縦方向のヘラミガキが見られる。脚柱部は、102よりも中実傾向が見られ、屈曲は弱い。これも、北近畿の影響下に成立したものと考えられる。

104は、やや腰高の体部に、短く外反して端部にナデによる面を持つ口縁部が鋭く手焙り形土器で、体部突帯は上寄りで口縁部に近い位置にある。体部外面は、突帯より上に横方向のヘラミガキ、突帯より下に縦方向のヘラミガキを施す。内面は横方向のヘラミガキを多用するが、底部にはタテハケも見られる。覆い部は口縁部に接する部分しか残っていないが、一体造りである。突帯は断面が三角になるように指で擠めようとして付けられており、所々に棒状工具による押痕が見られる。胎土は長石・石英・シャモットを多く含み、黄褐色や灰色に発色している。

105以下の底部について見ると、明確な平底のものが多く、底部の突出度は典型的な畿内第V様式と比べて小さい。壺は外面にヘラミガキ、内面に指オサエやハケを用いるものが多い。壺は、外面に右上がりのタタキを施すV様式系のタタキ壺が大多数を占めるが、底部の突出がやや弱くなっているものの体部の球胴化は顕著でないものが主体である。鉢は、形態・調整・

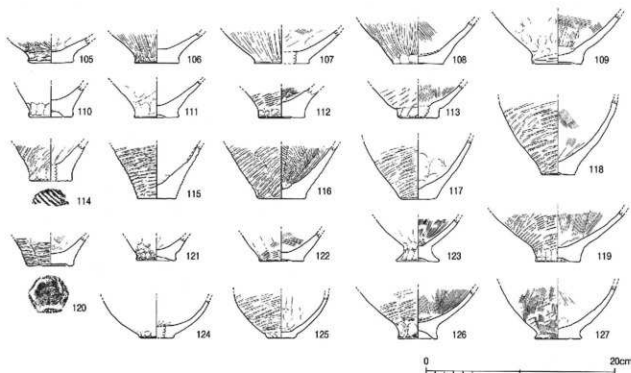


第26図 SD04 灰色土下部出土土器実測図 (3) 1/4

法量等、いずれも多彩である。

120はタタキによる多面体化が著しく、底端部が内側に折り込まれ、底部の平面形は六角形を呈する。121は指オサエに伴う指紋が残っている。122はタタキ成形の後、ナデ調整を面取り風に施している。123・

126は、指オサエにより整形した台状の小さい底部を持ち、鉢と見て大過ない。124・125は、内湾気味の体部下端に指オサエによって小振りながらも安定した平底を作り出している。127はタタキ成形に加えてタテハケ調整が見られる。



第27図 SD04 灰色土下部出土土器実測図 (4) 1/4

以上のように、SD04出土の土器は、甕・鉢類の底部は明確な平底であるが、突出度は幾分弱くなっている。ただし、甕類の体部の球形指向は顕著でないことから、弥生土器の典型的なV様式甕や鉢よりは幾分新しい年代観を与えられる。もっとも、内面にケズリを加えて器壁を薄く仕上げようという意識は乏しく、積極的に庄内甕の技法を取り入れるまでには至っていない。また、外面のタテハケ調整も極めて限定的である。このような様相から、庄内式段階でも古段階に併行する時期のものが中心であると言える。これは、100・102で推測した年代観や、104の手埴り形土器の年代観とも大きく矛盾しない。ところで、淡路型甕では、71～73・81のように口縁部にヨコナデ調整の見られないものは、弥生時代後期のな特徴を持っていると言う指摘がある〔森岡2003〕ので、弥生時代後期末のものも含まれるようである。

このような分析から、SD04灰色土出土の土器群は、流路内からの出土ではあるものの、时期的にはかなり一括性の高い遺物群と言えよう。ただし、灰色土上部には、34や50のように布留式の属性を備えるように見えるものも少量認められることから、庄内式新段階に、SD04に再び土器が投入された可能性が指摘できる。しかし、この時期の土器の多くは、褐色土の流入に際して、失われてしまったのであろう。

⑤土器群1出土遺物（第28～31図、図版18～20）

土器群1において出土した遺物も、やはり弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の年代で捉えることがで

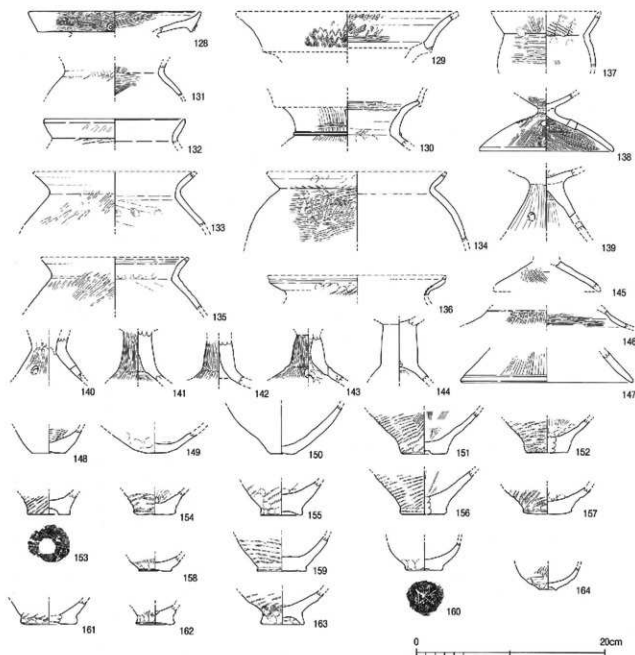
きる土器群である。ただし、SD04出土遺物との間には、はっきりした時期差が想定できる。

土器群1の埋土では、上層は上位耕作面の影響が考えられる状態であり、遺物量も少なかったことから、遺構の年代や性格の検討の対象として扱ったものは、中層と下層から出土した土器である。なお、中層から出土した土器と下層から出土した土器には、接合関係の確認できるものがあつた。

第28図128～164は中層から出土したもので、第29図165～190と第30図191～224は下層から出土したものである。また、第31図には、壺や甕の拓影を图示しており、235～238・240は中層から、234・239は下層から出土したものである。

中層出土の128～131は壺、132～137は甕、138～147は高杯・器台、148～150は壺底部、151～157は甕底部、158～163は鉢底部、164はミニチュア土器と見られる。また、235～238・240は甕の体部である。

二重口縁壺の口縁部128は、口縁部が直線的に外に開き、端部を上方に大きく拡張させて加飾面を持つ。外傾する外端面には極めて繊細な櫛描波状文を描き、下端に竹管円形浮文を施す。口縁部内面にはヘラミギキが見られる。おそらく頸部は直立する形態になる、庄内式併行期に特有のものであろう。施文によって畿内中心部からの外來色を認めることができるかもしれないが、黄褐色に発色する胎土は在地のものである。129は、頸部から大きく屈曲して外反するオーソドックスな二重口縁壺の口縁部で、内面・外面ともに波長



第28図 土器瀝り1中層出土土器実測図 1/4

の短い狭山形三角の櫛描波状文が見られる。内面には丁寧なヘラミガキが残る。特に肌理の細かい乳白色を呈する胎土を用いており、沖積地の集落からの搬入品とも考えられる。130は、胎土や色調が128に似ている二重口縁壺の頸部で、開き気味にのびる短い頸部と体部との境に突帯が巡っていたようである。磨滅が著しいが、ヘラミガキが認められる。131は丸味を帯びた体部に「く」の字状に屈曲する口縁部が付く。外面にヘラミガキ調整、内面にハケ調整が施されている。器形は壺に近いが、器面調整などから壺と判断した。

132～135は球胴化が進んで丸味を帯びた体部に、弱く屈曲する口縁部が付く壺である。口縁部は全体としてやや内弯気味に立ち上がり、肩部は丸く収める傾向

がある。これらは、口縁部を叩き出し、内面は指オサエや板ナデで仕上げている。体部外面のタタキは、目の粗い原体を用いる右上がりのものが多いが、134のようにアトランダムな方向にタタキを加えたものも見られる。136は小片であるが、特徴的な口端部を持つ破片であるため、図示した。口縁端部は欠損しているが、摘み上げが認められる。137は体部が丸く、口縁部が長くなっている小型の壺で、外面には水平タタキを施し、口縁部には目の粗い原体を用いたハケメが見られる。口径が体部径を凌駕しており、体部は長めであろう。

壺に施されたタタキについては、第31図の235のように、格子タタキに見えるほど、タタキの方向が定ま

らないものも存在する。そのほか、237・240のような螺旋状タタキが目につくが、238のように6本/cmの極めて繊細で内変的なタタキも、ほんの僅かではあるが存在する。

138は心もち内湾する小さな杯部に、短い脚柱からラッパ状に開く低平な裾部へ移行するもので、器種としては小型器台と見て良い。4方向に円形透し孔が穿たれており、内内期に併行する時期が考えられる。139は中空の長い脚部を持つもので、透し孔が3方向にある。小型器台の脚部と考えるとよい。他にも器台・高杯の脚部は数多く、脚柱部は中実傾向が見られる。ヘラミガキ調整を施す器部は、明確な屈折点を持って内湾しながら広がるもの(145)、直線的に広がるもの(147)、外反するもの(146)などが見られる。土器溜り1からは、SD04出土よりも明らかに高杯・器台が多く出土しており、かつ多彩で、時期的にもより新しい傾向が認められる。

148～150は磨滅によって調整の観察しにくい壺底部であるが、149のように丸底に近いものや150のように底径が小さいものが見られる。壺底部と判断した151～157は、いずれも外面にタタキが見られる。153はドーナツ状の底部にヘラ圧痕が残る。鉢の底部は、158～160のように丸みを帯びる体部を持つもの、161のように僅面に爪の圧痕が見られる平底のもの、163のように脚台状のものなど、実に多様である。なお、160の底部外面には、幾分くぼんだ部分にもヘラ圧痕が見られる。

164は残存径6.9cm、残存高2.4cm、底径1.7cmを測る、近世磁器の浅い丸碗のような形態のミニチュア土器である。底部には、断面三角形の小さな高台状の底部が付く。残念ながら磨滅のために調整は観察しにくい。外周下部にはナデによる砂粒の移動痕跡が残る。上部にはやかすかにヘラミガキが認められる。肌理細かい胎土には5mm大以下の長石や石英粒を含み、乳白色を呈する。また、一部に黒斑も見られる。

下層出土の土器は、第29図の165～167が壺、168～174が壺、175～181が鉢、182～190が高杯・器台で、第30図の191～211が壺底部、212が有孔鉢底部、213～224が鉢底部と考えられる。さらに、第31図に掲載している壺口縁部(234)と壺体部(239)も土器溜り1の下層からの出土である。

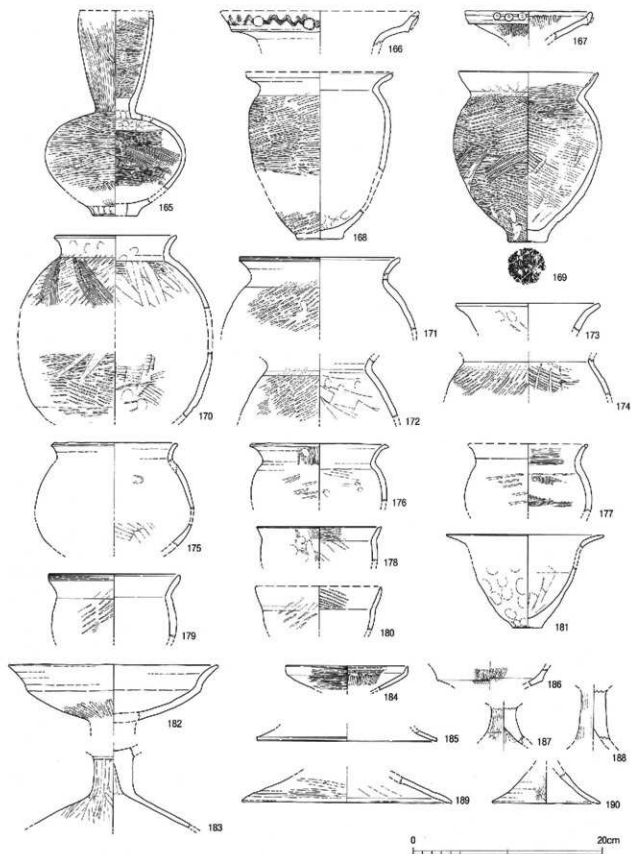
直口細頸壺の165は、口頸部が内湾気味に立ち上がり、頸部下端が細くしめる。体部はタマネギ形である。胎土の似ている底部片を同一個体と考えて図上復元したが、実際の底部はより収束し、径ももっと小さくなるだろう。胎土は砂粒の含有を極力抑えた精緻なもので、内面は炭素の吸着によって暗灰色を呈している。内面のハケメ、外面のヘラミガキともに丁寧である。56と比べて、明らかに口頸部の形態が新しい。166は頸部から大きく屈曲し、さらに立ち上がる二重口縁壺

の口頸部で、外面に櫛描波状文を施し、円形浮文を貼り付ける。口縁部の端はもう少し長く復元すべきかもしれない。赤褐色～赤褐色の特徴的な色調を呈する167は、直線的に外に開いて端部を上下に拡張する壺の口縁部で、端面に擬凹線と円形浮文が見られる。内面・外面にヘラミガキが施されており、壺の口縁部のほかに、器台の口縁部や脚部とも考えられる。胎土は水磁の可能性が想定できるほど精良な粘土で、石英・長石・金雲母等を含んでいる。第31図の234は、二重口縁壺の口縁部小片で、口端面に櫛描波状文が巡る。

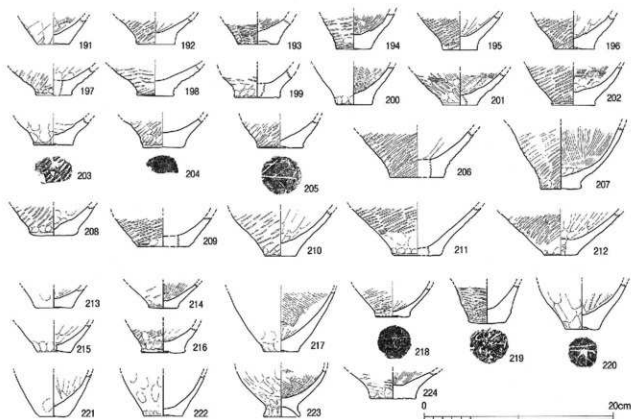
壺は、球明化が進んだV様式系のタタキ壺が多く、168・169・171～174がこれに該当する。外面のタタキは右上がりや主体であるが、体部の残存率の高い168・169を見ると、水平方向や右下がりのタタキのグループがあり、3分割したタタキ成形の様子が観察できる。169は体部径が口径を僅かに上回る。口縁部を叩き出して外折させ、明瞭な「く」の字形態を作り出し、ヨコナデや指オサエで内湾気味に整形している。内面には体部下端を除き、目の粗い板状工具を用いたハケ調整が頸部まで及んでいる。原体は1種類のようなのであるが、頸部付近では工具の使用角度によってハケメの印象が変わっている。外面体部の最大径より少し下がった位置には、いずれも左下がりの繊細な擦過痕やヘラナデ状の痕跡が見られる。171は直立する仕上げの口端部に擬凹線が見られる。体部の丸い170は、目の間隔が広いながら突部の細い原体を用いたタタキを施しているが、その方向は、水平方向や右下がり、右上がりや混在重複しており、何回かに分けて成形した様子がうかがえる。肩部には部分的に板状工具による断続的なタテハケ状の調整が残る。内面は指ナデとハケ調整を施す。短く外反する口縁部は頸部内面に段を持ち、緩やかに外反して端部を丸く収める。第31図の239は、4～5本/cmの目の揃った丁寧なタタキである。

鉢は、タタキ成形の痕跡が残るものが多く、丸く彫れた体部に緩やかに外反する短い口縁部が付く175～177や、口径と体部径が近接する178～180が主体を占める。175・176は長石や石英の砂粒を多く含む。175は多孔質の胎土で、暗灰色～暗灰褐色を呈する。176は175より幾分肌理が細かく、灰褐色を呈する。粘土紐の接合痕跡が明瞭な177は、シャモットも多く含んでおり、淡褐色～乳白色を呈する。179は口縁部外端面に擬凹線を持つ。また、膨らみの少ない体部に強く外反する口縁部を持つ181のように、端部を尖り気味に収めるものも存在する。

182と183は胎土や法量から同一個体の可能性が考えられるが、上手く接合できなかったことから、分けて図示した高杯である。182は有稜の杯部で、杯底部の低平化が顕著でなく、口縁部の変位点は丸みを帯びていて外反度は弱い。杯部外面に放射状にヘラミガキを



第29図 土器溜り1下層出土土器実測図(1) 1/4



第30図 土器窯り1下層出土土器実測図(2) 1/4

施している。183は直立する中空の脚柱から明確な屈折点を持って直線的に開く裾部が付く。しかし、裾部の残存部分が限られているため、造し孔の遺存は確認できなかった。

184は浅い皿状の杯部を持つ小型器台で、丁寧なヘラミガキを施す。僅かに内弯する杯底部から立ち上がった口縁部は外端面を持ち、細身の端部を立ち上げる。186は極めて精良な胎土に細いヘラミガキが見られる小片で、器台の杯部であろうか。

ほかに、中実傾向の見られる脚柱部 (187・188) や、直線的に大きく開く裾部 (185・189)、屈曲点から外反気味に広がる腰高の裾部 (190) など、中層同様に、高杯・器台の多様性がうかがえる。

底部について見ると、臺ない鉢と考えられるものが目に付き、臺は乏しい。臺と見たものの中には、193・194・201のように、タタキの単位が明瞭で、底側部が多角形化して変形するものや、191のように、板状と考えられる工具の圧痕が面取り状になっているものなど、底側部が円形でないものを一定量含む。また、193・196・198・199・204・205のように、底部外面に木の葉の圧痕を有するものもあり、土器製作時に敷いていた木の葉の葉脈が写っている。203は外底面にタタキを行い、底側部は指オサエで仕上げている。210は底径の矮小化が進んでいる。

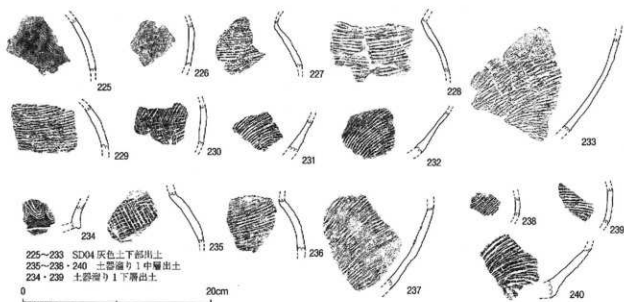
212は焼成前穿孔の有孔鉢で、SD01から出土した7

よりは底部の突出が小さい。

鉢の底部も、形態や調整が多様で、極端に底径の小さい214や、外底面にヘラ圧痕の見られる216・218、体部があまり広がらず、底側部から底部外端部にかけてタタキが見られる219、輪高台状の凹部にまでヘラ状工具の圧痕が及ぶ220、径の小さな脚台状の底部を有する223などがある。内面の調整は、214・224のような放射状に立ち上がるタテハケや218・220・221のようなヘラ状工具の圧痕、223のように蜘蛛の巣状のハケ調整が顕著なものがある。217は、体部内面下部にハケ調整が見られる。

このように、土器窯り1から出土した遺物は、壺・甕・鉢・高杯・器台の器種が見られるものの、圧制的に鉢が多い。また、高杯・器台も比較的に付く。これは、中層・下層に共通した傾向である。また、壺は、128～130・166・167のように、加飾されたものや細頸壺 (165) など、貯蔵用ではなく供膳用の色彩を帯びたものが主体を成す。つまり、土器窯り1から出土した土器は、飲食に関わる器種を中心とする傾向が看取できると言える。

なお、これらの土器の時期は、臺体部の球胴化と平底の残存、高杯脚柱部の中実化や裾部の多様化、138のような小形器台の出現、細頸壺の口縁部の内弯傾向などとともに、典型的な庄内臺を見出せないことから、庄内期中段階併行段階と捉えることができよう。よっ



第31図 SD04・土器溜り1出土土器実測図 1/4

て、遺構の年代をこの時期と考える。

⑥土器溜り2・3出土遺物(第32図、図版20)

土器溜り2は前述した通り、土器の劣化が甚だしく、図化できた遺物は第32図241~246の6点のみで、個々の残存率は低い。その要因は、遺構の上部が既に削平を被ってしまったためと考えられる。しかし、幸いながら、時期を特定し、他の遺構との差異を検証するに足る情報を得ることはできた。

241は壺の肩部、242は壺の底部、243は壺ないし鉢の底部、244は高杯の口縁部、245は鉢、246は器台の脚部である。

241は、球体を示す壺の肩部で、直立気味に変化する頭部との境は指オサエで整形している。242は、右上がりの不整連続を示す螺旋状のタタキが見られる。243は磨減が著しい。244は内弯気味に立ち上がる口縁端部外面に緩凹線が巡る。100や102に似たもので、丹後・丹波系の有段高杯である。影らみの弱い内弯傾向の体部から浅く外折する245は、外面を指オサエとヘラミガキで仕上げ、内面はハケ調整を行っている。形態や調整が、土器溜り1から出土している217と極めて似ており、近い時期のものと考えられる。246は脚部上端から大きく裾が広がる器台だが、遺し孔の有無は確認できなかった。

土器溜り3出土の遺物も、劣化が進んでいるが、弥生時代後期末~古墳時代前期初頭の土器を主体とする。第32図に図示した247~251が該当する。247・248・251は残存率が極めて高く、土器溜り3の时期的根拠と成り得る資料である。

247~249は壺、250・251は壺と考える。247は口縁部から体部下半までほぼ完存するが、接合し得る底部片を確定することはできなかった。比較的球明化の進

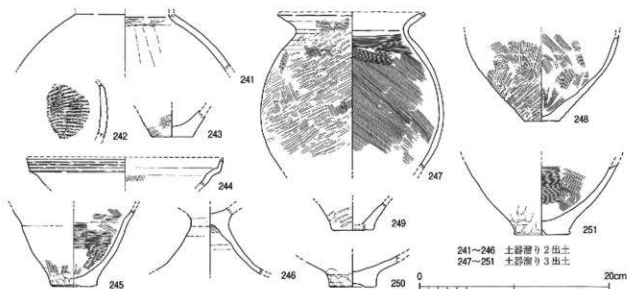
んだ体部の最大径は中位より下にあり、右上がりのタタキ成形の後、一部にタテハケが散見される。緩やかに短く外弯する口縁部の端部は磨減しているが、口縁部外面にも、タタキに加えてタテハケ調整が見られる。248は平底を持つ甕であるが、突出は小さい。外面は、下位に右上がりのタタキを、中位に水平からやや右下がりのタタキを施し、中位にはタテハケも見られる。内面には外面と同じ原体を用いて螺旋状に調整されるタテハケを施している。胎土や色調、タタキの原体について見ると、247と248は酷似する。249は磨減が顕著で、橙褐色を呈する。250・251は、ドーナツ状の上げ底となる底部である。250は突出する底部を指オサエで整形する。球形の体部が想定できよう。251は、250ほどの突出はないものの、外面を指オサエやナデで仕上げ、内面にハケ調整を施している。

このように、土器溜り2・3出土の土器は、土器溜り1出土の土器と全体的には類似点が多く、庄内期中段階併行段階に中心をおくと考えられる時期の土器群である。

⑦出土遺物のまとめ

今回の調査によって出土した土器は、SD04出土のものが庄内期中段階併行、土器溜り1~3のものが庄内期中段階併行を主体とすることから、2つの遺構群に明確な時期差があることが判明した。また、ピットや土坑から出土したものは、概ね庄内期中前後のものであると察せられ、深い関連性がうかがえる。しかし、それらが前述したどちらの遺構群と時期を同じくするのかを検証する材料には恵まれなかった。なお、SD04は、庄内期中段階併行段階に改めて土器の投入が想定できる。

ところで、今回出土した土器群は、肌理細かい粘土



第32図 土器溜り2・3出土土器実測図 1/4

に花崗岩片や長石・石英などの造岩鉱物粒を含むもので、黄褐色から灰褐色を呈するものが主体をなす。このような素地土・色調を呈するものを在地産の土器と考えている。ここでいう「在地」とは、宮川水系に関わる集落遺跡を念頭に置く程度の狭義の用い方である。

芦屋市内では、宮川水系から西に1.5km程離れた芦屋川の右岸地に芦屋川水系に伴う扇状地上の遺跡群が展開している。これらの遺跡群の土器は、砂粒の含有が多く、幾分ざらついた手触りの器表性状を示し、橙色、赤褐色、明褐色が主たる色調である。今回出土した土器の中には、このような胎土・色調の土器をあまり見出せないで、芦屋川水系遺跡群からもたらされたものは少ないと考える。また、一見すると、その形態から北近畿系の器形表現を示唆する74の壺や102・103の高杯も、奥田尚氏の観察（古墳出現期土器研究会会場で持参、教示）によると、胎土に花崗岩片やその造岩鉱物を含んでいて、宮川流域の他の遺跡から出土した土器との共通点が指摘できるという所見であったので、土器そのものが動いた搬入品ではなく、在地産と判断している。同様に、いわゆる淡路型の甕(31・32・71～73・81)や、直立する二重口縁部に櫛捺波状文を施す四国系の土器(10)も在地産と考えている。僅かに、70の甕や226の甕が、三島地域や河内平野から搬入された可能性が考えられるものである。

このように、打出岸造り遺跡にもたらされた搬入品は少ないと言える。しかし、北近畿や淡路、北四国との情報伝達や人の往来を否定することはできない。

4. 小 結

以上のように、発見から半世紀の間、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭における集落域が特定できてい

なかった打出岸造り遺跡であるが、このたびの発掘調査によって、その居住域の一端を垣間見ることが出来た。本地点には、柱穴の多さから、当該期の掘立柱建物の存在が十分に想定でき、調査地点が集落内に当たっていることが明らかになった。

また、土器溜り1では火を焚いた可能性があり、土器溜り2・3の部分には、土器溜り1を囲むように溝や杭列を設けた様子がうかがえる。意識的な投入なのか放置によるものかはわからないが、土器溜り1～3には多くの土器が伴っており、器種構成から見ても、この部分で何らかの飲食や土器祭祀が行われた可能性が考えられる。さらに、SD04を人為的な大溝と捉えれば、この溝によって規定される集落構造の一部を想定することも許されよう。

ところで、SD01・02・04の走行方向は、宮川低地帯から扇状地上にかけて立地する打出岸造り遺跡や大原遺跡・山口遺跡などの多くの調査地点で検出されている流路や大溝の走行方向と一致している。このことは、宮川低地帯における旧地形が、この方向性を自然に規定するものであり、その人為的利用が進んだものと解釈している。

また、重層する遺構面が限られていることから、中世において耕作地としての開墾される段階で、かなりの生活面が削平を被ったことが推察できる。ひとたび耕地化されてからは、近代に宅地化されるまで、安定した耕作地として継続して土地利用され、近代になってから住環境の良い場所として宅地化されて、今日の市街地に至った様子も把握できた。

建設工事によって損壊を被る部分については、今回の本調査によってその記録保存は完了したといえるので、計画通り、建築工事に着手して差し支えないと判断した。(白谷・森岡)

表1 打出岸造り遺跡第56地点確認調査遺構観察表

(土坑)

番号	平面形	法量 (cm) 長径×短径×深さ	埋土	備考
01	不定形	(110)×(90)×(20)	灰黄色 (2.5Y 6/2)～にぶい黄色 (2.5Y 6/3)～暗灰黄色 (2.5Y 5/2)～黄褐色 (2.5Y 5/3) 粗砂混じり土 + 5層ブロック	北側を掘削で切られ、東側は調査区外に延びる。

(溝)

番号	法量 (cm) 幅×長さ×深さ	埋土	出土遺物	備考
01	20×36×196×12	上: 黄灰色 (2.5Y 6/1)～黄褐色 (2.5Y 5/3) 粗砂混じり土 下: 黄灰色 (2.5Y 6/1)～2.5Y 5/1) 細砂質土	土師器	北側確認トレンチに切られる。 南側調査区外に延びる。
02	10×194×5	上: 黄灰色 (2.5Y 6/1)～2.5Y 5/1)～暗灰黄色 (2.5Y 5/2) シルト質土 下: 灰白色 (2.5Y 7/1)～灰黄色 (2.5Y 7/2) シルト質土	なし	北側掘削に切られる。 南側調査区外に延びる。

(第2遺構面検出ピット)

番号	平面形	法量 (cm) 長径×短径×深さ	埋土	備考
01	楕円形	42×34×7	上: 灰黄褐色 (10YR 6/2)～にぶい黄褐色 (10YR 6/4) 粘 性砂質土 下: 褐灰色 (10YR 6/1) 細砂質土・灰黄褐色 (10YR 6/2) ～にぶい黄褐色 (10YR 6/3) 砂質土	上層は柱痕か。
02	楕円形	38×30×7	上: 灰黄褐色 (10YR 6/2)～にぶい黄褐色 (10YR 6/3)～ にぶい黄褐色 (10YR 5/3) 砂質土 下: 灰黄褐色 (10YR 6/2)～にぶい黄褐色 (10YR 6/3) 砂 質土・褐灰色 (10YR 6/1)～灰黄褐色 (10YR 6/2) 細砂質土	上層は柱痕か。
03	楕円形か	14×(10)×3	褐灰色 (10YR 6/1)～灰黄褐色 (10YR 6/2) 砂質土	SP04埋土に似る。
04	楕円形	26×20×4	褐灰色 (10YR 6/1)～灰黄褐色 (10YR 6/2) 砂質土	SP03埋土に似る。

(第3遺構面検出ピット)

番号	平面形	法量 (cm) 長径×短径×深さ	埋土	出土遺物	備考
05	楕円形か	25×(20)×7	a: 褐灰色 (10YR 6/1)～灰黄色 (2.5Y 6/2) 細砂～中砂 b: 褐灰色 (10YR 6/1) シルト	土師器	西側調査区外に延びる。 b層に遺物集中。
06	楕円形	20×16×34	黄灰色 (2.5Y 5/1) + 黄褐色 (2.5Y 5/3) シルト質土	土師器	
07	楕円形	27×22×36	上: 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) シルト質土 下: 黄灰色 (2.5Y 5/1) シルト質土	土師器	上層は遺物多い。 SP06埋土に似る。
08	円形	直径20×20	黄灰色 (2.5Y 6/1)～灰黄色 (2.5Y 6/2) + 黄褐色 (2.5Y 5/4)～黄褐色 (2.5Y 5/6) 粗砂混じり土	土師器	5層起源の埋土。
09	不整形	30×(25)×25	黄灰色 (2.5Y 6/1)～にぶい黄色 (2.5Y 6/4) シルト質土	土師器	北側を掘削に切られる。
10	楕円形	36×30×20	黄灰色 (2.5Y 6/1)～灰黄色 (2.5Y 6/2) シルト質土	なし	
11 東	楕円形	28×20×50	上: 黄灰色 (2.5Y 6/1)～にぶい黄色 (2.5Y 6/3) シルト 質土 下: 黄灰色 (2.5Y 6/1)～黄褐色 (2.5Y 5/4) 砂質土	土師器	
11 西	楕円形	40×36×43	上: 黄灰色 (2.5Y 6/1)～黄褐色 (2.5Y 5/3) 粗砂混じ りシルト質土 下: 黄灰色 (2.5Y 6/1)～黄褐色 (2.5Y 5/4) 砂質土	土師器	
12	楕円形	30×26×30	黄灰色 (2.5Y 6/1)～にぶい黄色 (2.5Y 6/3) 砂混じり シルト質土	土師器	SP11東の埋土上層に似る。
13	円形か	15×(12)×20	黄灰色 (2.5Y 5/1)～暗灰黄色 (2.5Y 5/2) 粘性砂質土	土師器	南側調査区外に延びる。
14	略円形	22×20×11	黄灰色 (2.5Y 6/1)～灰黄色 (2.5Y 6/2) 粗砂質土	なし	
15	略円形	20×18×13	黄灰色 (2.5Y 6/1)～にぶい黄色 (2.5Y 6/3) 砂混じり シルト質土	土師器	SP12埋土に似るが砂の含 有はやや少ない。
16	円形	直径26×25	黄灰色 (2.5Y 6/1)～にぶい黄色 (2.5Y 6/3) 砂混じり シルト質土	土師器	SP12埋土に似る。
17	楕円形	21×16×17	灰白色 (2.5Y 7/1)～灰黄色 (2.5Y 7/2) 砂混じりシル ト質土 + 5層ブロック	土師器	SP17～19の埋土に似る。
18	長楕円形	52×26×16	灰白色 (2.5Y 7/1)～灰黄色 (2.5Y 7/2) 砂混じりシル ト質土 + 5層ブロック	土師器	SP17～19の埋土に似る。

番号	平面形	法量 (cm) 直径×短径×高さ	堀 土	出土遺物	備 考
19	略円形	22×20×11	灰白色 (2.5Y 7/1)～灰黄色 (2.5Y 7/2) 砂混じりシルト質土 + 5層ブロック	土師器	SP17～19の埋土似る。
20	楕円形	32×28×31	黄灰色 (2.5Y 6/1)～にぶい黄色 (2.5Y 6/3) 砂混じりシルト質土	土師器	SP12埋土に似る。
21	略円形	20×17×14	黄灰色 (2.5Y 6/1)～灰黄色 (2.5Y 6/2) シルト質土	土師器	
22	円形	直径24×20	黄灰色 (2.5Y 6/1)～にぶい黄色 (2.5Y 6/3) 砂混じりシルト質土 + 灰白色 (N 7/0)～灰色 (N 6/0)	土師器	確認トレンチ底面で検出。SP12埋土に似る。
23	円形	直径20×31	黄灰色 (2.5Y 6/1)～灰黄色 (2.5Y 6/2)～褐灰色 (10YR 6/1)～灰黄褐色 (10YR 6/2) 砂混じりシルト質土	土師器	確認トレンチ底面で検出。
24	不定形	48×33×39	a: 黄灰色 (2.5Y 6/1)～褐灰色 (10YR 6/1) 砂質土 + 5層ブロック b: 黄灰色 (2.5Y 6/1)～灰黄褐色 (10YR 5/2) シルト質土 c: 黄灰色 (2.5Y 6/1)～にぶい黄褐色 (10YR 5/4) シルト質土	土師器	確認トレンチに掛かる。堀土下位に鉄分沈着あり。
25	円形か	34×(26)×16	黄灰色 (2.5Y 6/1)～にぶい黄色 (2.5Y 6/3) 砂混じりシルト質土	土師器	北側を確認トレンチに切られる。SP15埋土に似る。
26	円形	直径30×27	黄灰色 (2.5Y 6/1)～にぶい黄色 (2.5Y 6/3) 砂混じりシルト質土	土師器	SP12埋土に似る。
27	円形	直径23×32	黄灰色 (2.5Y 6/1)～にぶい黄色 (2.5Y 6/3) 砂混じりシルト質土	土師器・黒色土層	
28	円形	直径22×24	黄灰色 (2.5Y 6/1)～にぶい黄色 (2.5Y 6/3) 砂混じりシルト質土 + 灰白色 (N 7/0)～灰色 (N 6/0)	土師器	SP12埋土に似る。
29	円形	直径18×26	黄灰色 (2.5Y 6/1)～にぶい黄色 (2.5Y 6/3) 砂混じりシルト質土	土師器	SP15埋土に似る。
30	円形	直径15×18	暗灰黄色 (2.5Y 5/2)～黄褐色 (2.5Y 5/3) 砂質土	土師器	
31	円形	直径18×16	黄灰色 (2.5Y 5/1)～暗灰黄色 (2.5Y 5/2) 砂質土	土師器	
32	楕円形	18×14×6	灰白色 (2.5Y 7/1)～にぶい黄色 (2.5Y 6/3) 砂質土 + 5層ブロック	土師器	SP33埋土に似る。
33	略円形	14×13×4	灰白色 (2.5Y 7/1)～にぶい黄色 (2.5Y 6/3) 砂質土 + 5層ブロック	なし	SP32埋土に似る。
34	楕円形	15×10×8	黄灰色 (2.5Y 6/1)～灰黄褐色 (10YR 6/2) 砂質土	土師器	東壁沿いサブトレンチに切られる。
35	楕円形	(30)×(18)×9	上: 黄灰色 (2.5Y 6/1)～灰黄褐色 (10YR 6/2) 砂質土 下: 黄灰色 (2.5Y 6/1)～褐灰色 (10YR 6/1) 砂質土 + 5層	土師器	北側をSK01に切られる。SP36埋土に似る。
36	円形	直径10×7	上: 黄灰色 (2.5Y 6/1)～灰黄褐色 (10YR 6/2) 砂質土 下: 黄灰色 (2.5Y 6/1)～褐灰色 (10YR 6/1) 砂質土 + 5層	土師器	SP35埋土に似る。
37	略円形	30×28×23	灰白色 (2.5Y 7/1)～黄灰色 (2.5Y 6/1)～にぶい黄色 (2.5Y 6/3) 砂混じりシルト質土 + 灰白色 (N 7/0)～灰色 (N 6/0)	土師器	SP12埋土に似る。
38	略円形	16×14×13	灰白色 (2.5Y 7/1)～黄灰色 (2.5Y 6/1)～にぶい黄色 (2.5Y 6/3) 砂混じりシルト質土 + 灰白色 (N 7/0)～灰色 (N 6/0)	なし	SP12埋土に似る。
39	円形	直径21×7	灰黄褐色 (10YR 6/2)～暗灰黄色 (2.5Y 5/2)～黄褐色 (2.5Y 5/3) 粘性シルト土	なし	
40	円形	直径30×19	灰色 (5Y 6/1～N 6/0) 砂質土	土師器	
41	円形	直径15×8	黄灰色 (2.5Y 5/1) シルト土	なし	上部をSD01に切られる。
42	円形	直径19×16	黄灰色 (2.5Y 5/1) シルト土	土師器	上部をSD01に切られる。

※弥生時代後期末～古墳時代初期の土器については、便宜上、「土師器」と表記している。

表2 打出岸造り遺跡第56地点Ⅱ区検出遺構観察表

SD (鞆痕) ※SD01～04は本文に詳述。

番号	法 量 (cm) 幅、長さ、深さ	埋 土	出土遺物	備 考
05	40～90、(250)、5	褐灰色 (7.5YR 6/1)～灰黄褐色 (10YR 6/2) 砂質土	土師器小片	中世後半段帯の鞆痕と判断。南東端で検出。
06	60、(50)、5	褐灰色 (7.5YR 6/1)～灰黄褐色 (10YR 6/2) 砂質土	—	中世後半段帯の鞆痕と判断。南東端で検出。
07	44、(240)、4	褐灰色 (7.5YR 6/1)～灰黄褐色 (10YR 6/2) 砂質土	土師器小片	中世後半段帯の鞆痕と判断。南東端で検出。
08	(15)、(72)、4	褐灰色 (7.5YR 6/1)～灰黄褐色 (10YR 6/2) 砂質土	土師器小片	中世後半段帯の鞆痕と判断。南東端で検出。
09	10、(100)、8	4層と共通。	土師器小片	中世後半段帯以前の鞆痕。南西端で検出。
10	20、(260)、12	4層と共通。	土師器小片	中世後半段帯以前の鞆痕。南西端で検出。
11	12、(200)、7	4層と共通。	土師器小片	中世後半段帯以前の鞆痕。南西端で検出。
12	12、(90)、6	4層と共通。	—	中世後半段帯以前の鞆痕。南西端で検出。

SK (土坑)

番号	平面形	法 量 (cm) 幅、長さ、深さ	埋 土	出土遺物	備 考
101	(半円形)	85、(18)、26	第13区西畔 ① 灰黄色 (2.5Y 7/2)～浅黄色 (2.5Y 7/4) 砂質土 ② 灰黄色 (2.5Y 7/2)～浅黄色 (2.5Y 7/3) 粗砂混じり砂質土 ③ 灰黄色 (2.5Y 7/2)～浅黄色 (2.5Y 7/3) シルト質土 ④ 灰白色 (2.5Y 7/1)～灰黄色 (2.5Y 7/2) 粗砂質土 (褐灰色土)	土師器小片・石炭	南西部で検出。 南壁に掛かる。 ④層は柱状部埋土。
102	(略円形)	85、72、20	① 灰白色 (2.5Y 7/1)～にぶい黄褐色 (10YR 6/4)～明黄褐色 (10YR 6/6) シルト質土 ② 灰黄色 (2.5Y 6/2)～黄褐色 (2.5Y 5/3～2.5Y 5/4) 粗砂混じり土 ③ 灰黄褐色 (10YR 6/2)～にぶい黄褐色 (10YR 6/3)～にぶい黄色 (2.5Y 6/4) 粗砂混じりシルト質土 (褐灰色土)	土師器小片	南西部寄りで検出。
103	(円形)	直径28、36	① 灰黄色 (2.5Y 7/2～2.5Y 6/2)～にぶい黄色 (2.5Y 6/3) 粗砂質土 ② にぶい黄色 (2.5Y 6/4)～明黄褐色 (2.5Y 6/8) 砂質土+灰黄色 (2.5Y 7/2～2.5Y 6/2) 粗砂 (灰色土)	須恵器	南西部で検出。 柱礎部あり。
104	(長楕円形)	60、220、23	① 灰黄褐色 (10YR 6/2)～にぶい黄褐色 (10YR 6/4) 粗砂混じり砂質土 ② 浅黄色 (2.5Y 7/4)～灰黄色 (2.5Y 6/2)～にぶい黄色 (2.5Y 6/3) 砂質土 ③ 灰白色 (2.5Y 7/1)～浅黄色 (2.5Y 7/4)～黄褐色 (2.5Y 6/1)～にぶい黄色 (2.5Y 6/4) 砂質土 ④ 灰白色 (2.5Y 7/1)～灰黄色 (2.5Y 7/2)～浅黄色 (2.5Y 7/4)～明黄褐色 (2.5Y 7/6) 粗砂質土 (褐灰色土)	土師器小片	南西部で検出。 南壁に掛かる。 床面の凹凸著しく複数のピットを含む可能性あり。
105	(不整形)	80、108、23	① 灰黄褐色 (10YR 6/2～10YR 5/2)～にぶい黄褐色 (10YR 6/3) 粗砂質土 ② にぶい黄褐色 (10YR 6/4)～明黄褐色 (10YR 6/6)～黄褐色 (10YR 5/6) 粘性砂質土 ③ にぶい黄褐色 (10YR 6/4)～明黄褐色 (10YR 6/6)～黄褐色 (10YR 5/6) 粗砂 (茶色砂+褐灰色土)	土師器小片	南西部で検出。 SK117に接する。 SD01西畔で検出。
106	(扇形)	26、40、10	灰白色 (2.5Y 7/1)～にぶい黄褐色 (10YR 6/4)～明黄褐色 (10YR 6/6) シルト質土 (褐灰色土)	土師器小片	南西部寄りで検出。
107	(略九方形)	一辺48、11	① 灰黄色 (2.5Y 6/2)～灰黄褐色 (10YR 6/2) 粗砂質土 ② にぶい黄褐色 (10YR 5/4)～黄褐色 (10YR 5/6)～褐色 (10YR 4/6) 粗砂～中砂 (茶色砂+褐灰色土)	土師器小片	南西部北寄りで検出。
108	(略九三角形)	54、62、10	① 黄褐色 (2.5Y 6/1)～灰黄色 (2.5Y 6/2)～にぶい黄色 (2.5Y 6/3) シルト質土 ② にぶい黄褐色 (10YR 5/4)～黄褐色 (10YR 5/6)～褐色 (10YR 4/6) 粗砂～中砂 (茶色砂+褐灰色土)	土師器小片	南西部で北寄り検出。 SP110に切られる。
109	(略半円形)	62、(25)、6	にぶい黄褐色 (10YR 5/3～10YR 5/4) 中砂 (茶色砂)	—	南西部北寄りで検出。 南部北壁に掛かる。
110	(略円形)	44、38、8	① にぶい黄褐色 (10YR 5/3～10YR 5/4) 粗砂 ② にぶい黄褐色 (10YR 5/3～10YR 5/4) 砂質土 (茶色砂+褐灰色土)	土師器小片	南西部北寄りで検出。
111	(略円形)	56、48、10	にぶい黄褐色 (10YR 5/3～10YR 5/4) 中砂 (茶色砂)	—	南西部北寄りで検出。 南部北壁に掛かる。
112	(略円形)	直径28、5	にぶい黄褐色 (10YR 5/3～10YR 5/4) 中砂 (茶色砂)	—	南西部北寄りで検出。 南部北壁に掛かる。
113	(長楕円形)	48、180、14	灰白色 (10YR 7/1)～にぶい黄褐色 (10YR 7/2)～褐灰色 (10YR 6/1)～灰黄褐色 (10YR 6/2) 粗砂混じり砂質土 (褐灰色土・灰色土)	土師器小片	南西部で検出。 床面の凹凸著しい。
114	(長楕円形)	22、(56)、32	① 灰白色 (10YR 7/1)～にぶい黄褐色 (10YR 7/2) 粗砂質土 ② 褐灰色 (10YR 6/1)～灰白色 (2.5Y 7/1)～灰黄色 (2.5Y 6/1) 粗砂質土 (褐灰色土)	土師器小片	南西部で検出。 南壁に掛かる。

番号	平面形	法量 (cm) 幅、長さ、深さ	埋土	出土遺物	備考
115	略円形	65、70、18	① 灰黄色 (2.5Y 7/2)～明黄褐色 (2.5Y 7/6) 砂質土 ② 灰黄色 (2.5Y 7/2)～にぶい黄色 (2.5Y 6/4) シルト質土 ③ 灰黄色 (2.5Y 7/2)～明黄褐色 (2.5Y 7/6) 砂質土 + 5層 ④ 灰白色 (5Y 8/1～5Y 8/2)～浅灰色 (2.5Y 7/4)～にぶい黄褐色 (10YR 5/4) シルト質土 [褐灰色土]	土師器小片	南西部で検出。 柱底部あり。
116	不整形	70、125、9	にぶい黄褐色 (10YR 7/3)～にぶい黄褐色 (10YR 7/4) シルト混じり土 + にぶい黄褐色 (10YR 5/4)～黄褐色 (10YR 5/6) シルト混じり土 [褐灰色土]	土師器小片	南西部で検出。 床面の凹凸著しい。
117	不整形	56、72、26	① 灰白色 (2.5Y 7/1)～灰黄色 (2.5Y 7/2～2.5Y 6/2)～黄褐色 (2.5Y 5/3) 粗砂混じり砂質土 ② 灰黄色 (2.5Y 7/2)～浅灰色 (2.5Y 7/3)～にぶい黄褐色 (10YR 7/2～10YR 7/4) 中砂混じり砂質土 ③ 灰白色 (2.5Y 7/1)～灰黄色 (2.5Y 7/2) シルト質土 [褐灰色土]	—	南西部で検出。 SK106に接する。 床面の凹凸著しい。
118	長楕円形	24、114、16	にぶい黄褐色 (7.5YR 5/4)～にぶい黄褐色 (10YR 5/4)～黄褐色 (10YR 5/6) シルト質土 + 中砂混じり土 [茶色砂]	土師器小片	南西部土器溝り1とSD01の間で検出。 床面の凹凸著しい。
119	不整形	72、82、9	にぶい黄褐色 (10YR 5/3～10YR 5/4) 中砂 [茶色砂]	—	南西部で検出。
120	楕円形	28、46、46	黄褐色 (10YR 6/1)～にぶい黄褐色 (10YR 6/3) シルト + 細砂質土 [褐灰色土]	土師器小片	南西部SD01西面で検出。
121	楕円形	26、40、13	にぶい黄褐色 (10YR 5/3～10YR 5/4) 中砂 [茶色砂]	—	南西部SD01西面で検出。
122	不整形	60、90、18	① 灰黄色 (10YR 6/2)～にぶい黄褐色 (10YR 6/3～10YR 7/3) 中砂質土 ② 灰白色 (2.5Y 8/2～10YR 7/1)～にぶい黄褐色 (10YR 6/4) シルト質土 [褐灰色土]	土師器小片	北部南寄りで検出。 底面の凹凸著しい。
123	不整形	54、72、12	灰白色 (2.5Y 8/1)～黄色 (2.5Y 8/6) シルト質土 [黄灰色土]	土師器小片	北部南寄りで検出。
124	楕円形	42、78、33	灰白色 (7.5YR 8/1～7.5YR 8/2)～にぶい黄色 (7.5YR 7/4)～黄色 (7.5YR 7/6) 中砂混じりシルト質土 [茶色砂]	土師器小片	北部南寄りで検出。
125	不整形	50、62、11	① 灰白色 (2.5Y 8/1)～暗灰黄色 (2.5Y 5/2) 細砂質土 ② にぶい黄褐色 (10YR 6/3～10YR 6/4) 中砂 [茶色砂 + 褐灰色土]	土師器小片	北部南寄りで検出。 底面の凹凸著しい。
126	不整形	20、(16)、14	灰黄色 (10YR 6/2)～にぶい黄褐色 (10YR 6/3～10YR 7/3) 中砂質土 [褐灰色土]	土師器小片	北部南寄りで検出。 西壁に接する。 底面の凹凸著しい。

SP (ピット)

番号	平面形	法量 (cm) 直径、長さ、深さ	埋土	出土遺物	備考
43	円形	直径32、42	黄褐色 (10YR 6/1)～灰黄褐色 (10YR 6/2) 砂質土 [褐灰色土]	土師器小片	南東部SD01以東で検出。
44	略円形	32、28、21	灰白色 (10YR 7/1)～にぶい黄褐色 (10YR 7/2)～黄褐色 (10YR 6/1) 砂質土 [褐灰色土]	土師器小片	南東部SD01以東で検出。
45	楕円形	28、22、32	灰黄褐色 (10YR 6/2)～にぶい黄褐色 (10YR 6/3)～灰黄色 (2.5Y 7/2～2.5Y 6/2) シルト質土 炭化物を含む [褐灰色土]	—	南東部SD01以東で検出。 土はSP45と同じ。
46	円形	直径18、11	灰黄色 (2.5Y 6/2)～にぶい黄色 (2.5Y 6/3) 砂質土 [褐灰色土]	土師器小片	南東部SD01以東で検出。
47	円形	直径22、8	黄褐色 (10YR 6/1)～灰黄褐色 (10YR 6/2) 砂質土 [褐灰色土]	—	南東部SD01以東で検出。 土はSP48と同じ。
48	略円形	24、20、11	黄褐色 (10YR 6/1)～灰黄褐色 (10YR 6/2) 砂質土 [褐灰色土]	土師器小片	南東部SD01以東で検出。 土はSP47と同じ。
49	円形	直径14、13	灰褐色 (7.5YR 4/2)～褐色 (7.5YR 4/3) 細砂質土 [褐灰色土]	—	南東部SD01以東で検出。 共通する埋土の遺構なし。
50	楕円形	22、16、9	黄褐色 (10YR 6/1)～灰黄褐色 (10YR 6/2) 砂質土 [褐灰色土]	—	南東部SD01以東で検出。
51	円形	直径16、8	灰白色 (10YR 7/1) シルト質土 [灰色土]	—	南東部SD01以東で検出。
52	円形	直径18、9	灰黄褐色 (10YR 6/2)～灰黄褐色 (10YR 5/2) 砂質土 [褐灰色土]	—	南東部SD01以東で検出。
53	楕円形	26、12、10	灰黄褐色 (10YR 6/2)～灰黄褐色 (10YR 5/2) 砂質土 [褐灰色土]	—	南東部SD01以東で検出。
54	不整形	92、80、36	灰白色 (10YR 8/2)～浅黄褐色 (10YR 8/3) シルト + 灰白色 (10YR 7/1)～にぶい黄褐色 (10YR 7/2～10YR 6/4)～黄褐色 (10YR 6/1) 砂質土 [褐灰色土]	土師器・須恵器または瓦質土師小片	南東部SD01以東で検出。 SD05上面で検出。
55	略円形	25、23、31	黄褐色 (2.5Y 5/1)～暗灰黄色 (2.5Y 5/2)～黄褐色 (2.5Y 5/3)～オリーブ褐色 (2.5Y 4/3) 粗砂混じり土 [褐灰色土]	土師器小片	南東部SD01上面で検出。 埋土はSP56と同じでSP45に似る。
56	円形	直径19、17	黄褐色 (2.5Y 5/1)～暗灰黄色 (2.5Y 5/2)～黄褐色 (2.5Y 5/3)～オリーブ褐色 (2.5Y 4/3) 粗砂混じり土 [褐灰色土]	土師器小片	南東部SD01上面で検出。 埋土はSP55と同じでSP45に似る。

番号	平面形	法 量 (cm) 長径、短径、深さ	土 質	出土遺物	備 考
101	略円形	28、25、6	にぶい黄褐色 (10YR 5/3～10YR 5/4) 中砂 (茶色砂)	—	南西端で検出。
102	略円形	28、24、6	にぶい黄褐色 (10YR 5/3～10YR 5/4) 中砂 (茶色砂)	—	南西端で検出。
103	不整形	36、22、4	にぶい黄褐色 (10YR 5/3～10YR 5/4) 中砂 (茶色砂)	—	南西端で検出。
104	不整形	92、80、36	① 灰黄色 (2.5Y 7/2)～浅黄色 (2.5Y 7/3)～にぶい黄褐色 (2.5Y 6/3) 細砂質土 ② にぶい黄褐色 (2.5Y 6/4)～明黄色 (2.5Y 6/8) 砂質土+灰黄色 (2.5Y 7/2～2.5Y 6/2) 細砂 (灰色土)	土師器小片	南西端で検出。 SD09上面で検出。 柱状部あり。
105	略円形	18、16、54	にぶい黄褐色 (10YR 5/3～10YR 5/4) 中砂 (茶色砂)	—	南西端で検出。
106	不整形	23、16、3	灰白色 (2.5Y 8/1～2.5Y 7/1)～にぶい黄褐色 (10YR 6/3) シルト (褐灰色土)	—	南西端で検出。
107	楕円形	40、33、5	にぶい黄褐色 (10YR 5/3～10YR 5/4) 中砂 (茶色砂)	土師器小片	南西端で検出。
108	楕円形	24、18、4	にぶい黄褐色 (10YR 5/3～10YR 5/4) 中砂 (茶色砂)	—	南西部北寄りで検出。
109	楕円形	14、8、3	灰黄色 (2.5Y 7/2～2.5Y 6/2) 細砂 (灰色土)	—	南西部北寄りで検出。
110	楕円形	30、16、3	灰黄色 (10YR 6/2)～にぶい黄褐色 (10YR 6/3～10YR 6/4) 砂質土 (褐灰色土)	—	南西部北寄りで検出。
111	円形	直径21、3	灰黄色 (10YR 6/2)～にぶい黄褐色 (10YR 6/3～10YR 6/4) 砂質土 (褐灰色土)	—	南西部北寄りで検出。
112	略円形	20、16、3	灰黄色 (10YR 6/2)～にぶい黄褐色 (10YR 6/3～10YR 6/4) 砂質土 (褐灰色土)	—	南西部北寄りで検出。
113	円形	直径18、26	灰黄色 (10YR 6/2)～にぶい黄褐色 (10YR 6/3～10YR 6/4) 砂質土 (褐灰色土)	土師器小片	南西部北寄りで検出。 埋土はSP123・128に似る。
114	不整形	24、17、3	にぶい黄褐色 (10YR 5/3～10YR 5/4) 中砂 (茶色砂)	土師器小片	南西部北寄り側で検出。
115	略円形	18、15、5	にぶい黄褐色 (10YR 5/3～10YR 5/4) 中砂 (茶色砂)	—	南西部土器溜り1と土器溜り2の間に検出。
116	(半円形)	34、(17)、8	にぶい黄褐色 (10YR 5/3～10YR 5/4) 中砂 (茶色砂)	—	南西端で検出。 南壁に掛かる。
117	円形	直径20、37	灰白色 (2.5Y 7/1)～黄灰色 (2.5Y 6/1)～明黄色 (2.5Y 6/8) シルト質土 (褐灰色土)	土師器小片	南西部土器溜り1の東側で検出。
118	(半円形)	23、(16)、53	① にぶい黄褐色 (2.5Y 6/3)～にぶい黄褐色 (10YR 6/3～10YR 6/4) 粗砂混じり粘性砂質土 ② 灰白色 (2.5Y 7/1)～灰黄色 (2.5Y 7/2)～黄灰色 (2.5Y 6/1) 中～細砂質土 ③ 灰白～灰黄色 (2.5Y 6/4) 明黄色 (10YR 6/8)～10YR 7/6) 砂の凝集層 ④ 灰白色 (2.5Y 8/1～2.5Y 7/1) 中～細砂質土 (褐灰色土)	中世土師器片	南端SD01上面で検出。 南壁に掛かる。
119	円形	直径12、18	灰色 (7.5Y 6/1～N6/0) 砂質土。1層類似。 (灰色土)	土師器小片	南部SD01西側で検出。
120	略円形	16、14、17	灰色 (7.5Y 6/1～N6/0) 砂質土。1層類似。 (灰色土)	—	南部SD01西側で検出。
121	略円形	18、15、20	灰色 (7.5Y 6/1～N6/0) 砂質土。1層類似。 (灰色土)	—	南部SD01西側で検出。
122	略円形	20、16、22	灰黄色 (10YR 5/2)～にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 細砂質土 (褐灰色土)	土師器小片	南部SD01と土器溜り3の間に検出。共通する埋土の遺構なし。
123	円形	直径26、54	灰黄色 (10YR 6/2)～にぶい黄褐色 (10YR 6/3～10YR 6/4) 砂質土 (褐灰色土)	土師器小片	中央部土器溜り3の上面で検出。 埋土はSP113・128に似る。
124	楕円形	28、12、24	灰白色 (10YR 7/1)～にぶい黄褐色 (10YR 7/2)～灰黄色 (10YR 6/2) 細砂質土。鉄分の沈着あり。 (褐灰色土)	—	南西部土器溜り1の法面で検出。
125	略円形	43、38、33	灰白色 (2.5Y 8/1)～灰白色 (10YR 7/1)～灰黄色 (10YR 6/2)～にぶい黄褐色 (10YR 6/3) 細砂質土+灰黄色 (2.5Y 7/2)～にぶい黄褐色 (10YR 7/2) 粘性砂質土 (褐灰色土)	土師器小片	南西部土器溜り3の床面で検出。
126	楕円形	22、16、31	① 灰黄色 (2.5Y 7/2)～浅黄色 (2.5Y 7/3) シルト混じり砂質土。② 層が床土化 ③ 灰白色 (2.5Y 7/1)～灰黄色 (2.5Y 7/2) 細砂質土 ④ 灰黄色 (2.5Y 7/2)～浅黄色 (2.5Y 7/4) 細砂質土。下部が床土化 ⑤ 灰黄色 (2.5Y 7/2～2.5Y 6/2)～にぶい黄褐色 (10YR 6/3) シルト混じり砂質土 (褐灰色土)	—	南部SD01と土器溜り3の間に検出。 柱状部あり。
127	略円形	24、22、27	① 灰黄色 (2.5Y 7/2)～明黄色 (2.5Y 7/6) 粗砂～中砂混じり砂質土 ② 灰白色 (2.5Y 8/1～2.5Y 7/1) 細砂 (褐灰色土)	土師器小片	南西部土器溜り2の西側で検出。
128	円形	直径22、15	灰白色 (2.5Y 7/1)～灰黄色 (2.5Y 7/2)～黄灰色 (2.5Y 6/1) 砂質土 (褐灰色土)	土師器小片	中央部で検出。 埋土はSP113・123に似る。
129	楕円形	22、17、15	灰黄色 (10YR 5/2)～にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 細砂質土 (褐灰色土)	—	南西部土器溜り3の床面で検出。
130	円形	直径18、5	灰白色 (10YR 7/1)～にぶい黄褐色 (10YR 7/2)～灰黄色 (10YR 6/2) 細砂質土。鉄分の沈着あり。 (褐灰色土)	—	南西部土器溜り1の床面で検出。
131	円形	直径12、35	灰白色 (10YR 7/1)～にぶい黄褐色 (10YR 7/2)～灰黄色 (10YR 6/2) 細砂質土。鉄分の沈着あり。 (褐灰色土)	—	南西部土器溜り1の床面で検出。
132	(半円形)	30、10、4	にぶい黄褐色 (10YR 5/3～10YR 5/4) 中砂 (茶色砂)	—	南西部で検出。 西壁に掛かる。

※弥生時代後期末～古墳時代初期の土器については、便宜上、「土師器」と表記している。

第3章 総括

第1節 平成21年度の発掘調査3件を概括して

本書には、平成21年度に実施した国庫補助事業による市内遺跡発掘調査（確認調査）の成果を3件分収録した。ページ数に限りがあり、採録できた資料はなお不十分であるが、本書をもって記録保存調査の目的に沿った本報告とする。第2章において報告したものは、3遺跡3地点であり、それぞれの調査契機は第2章の各節において逐一詳説しているのにそれに依拠し、本節では割愛する。調査原因は3件ともに専用住宅の建築工事や宅塀造成・擁壁工事のすげに伴うものであった。このまとめでは、主として報告文の欠を多少補うとともに、過去の調査全体を踏まえた若干の考証と今後の課題などを展望し、責めを塞ぎたい。

岩ヶ平刻印群（第176地点）は、「徳川大坂城東六甲採石場XIII」として報告した。発掘調査報告書掲載分の13地点目ということになるが、実際にはなお数地点が断片的に報告されており、今後も石切場関係については調査記録の公的発信の厳密を期するため、XIV以降も固有の石場報告番号をサブタイトルとして踏襲、公述されることを調査関係者にもこの際喚起しておきたい。表紙の節サブタイトルに報告番号を意識的に付した理由もそこにある。

岩ヶ平刻印群は、埋蔵文化財包蔵地内における掘出書との整合性を図り、平成17年度に統一方式を定め、地点番号を振り直している。以後は発掘調査の有無や刻印石・矢穴石など石材の存否に関わらず、その方式で地点番号を採って、取り扱いや保護活動を行っており、本日現在、既に200地点近くの多さを数えている。

本地点は市街地と直面する段丘端の谷あい地であり、採石活動を行っているエリアとしても最南限付近に位置する点、自然地形が残っているだけに、分布調査を委ねる成果も見込まれた。結果的には、原位置を保つ良好な刻印石1石を中心とする確認石材の記録保存調査を実施した。明確な石切丁場遺構を確認することはできなかったが、同様の地形環境を保持する周辺の様相を掴む上で一定の成果がみられた。

芦屋川扇状地の右岸面は埋蔵文化財の宝庫といえ、複合度の高い遺跡が連続して濃密な分布を示している。この地区では複合遺跡として著名な芦屋廃寺遺跡の第113地点の事前調査を実施した。同遺跡内で隣接する第111・116地点と直接関係する地点であり、基本土層・遺構面・遺構内容や包含層の遺物相などの比較・対比が3地点突き合わせで行われることが不可欠であり、報告にあたって一部それを試行している。工事中の不時発見で急遽遺跡範囲の認識が高まる契機をなし

た第111地点で堅穴住居跡や土坑・ピット、濃密な包含層などが確認された実態に基づき、範囲拡大された地域の一面であり、この3地点の調査を総合して、その判断に誤りなきことが立証されたと考える。

打出岸遺跡（第56地点）は、周知遺跡内部を対象として実施した慎重工事扱いの専用住宅建設現場を事業者からの連絡を受けて念のために工事立会した際、遺構と遺物が確認されたため、取り扱い変更の厳しい状況下、事業者に期間の協力を求め、合意に達したので、事前調査の実施に踏み切ったものである。結果として、建物等の建設予定地西半において多くの遺構・遺物を確認することになり、遺跡の性格や広がり、当地方の古墳出現期の集落の具体相を正しく理解する上に貴重な成果が得られたことを強調しておきたい。

以下では、これらの諸成果と既往調査との擦り合わせなどを行いつつ、現段階で整理し得たことを相対し、向後の考証の足掛かりとした。（森岡）

第2節 岩ヶ平丘陵最南限付近で行われた刻印石周辺の調査（因伯鳥取藩池田家石場関連）とその意義について

(1) 調査地点をめぐる立地環境と鳥取藩池田家の丁場制範囲について

岩ヶ平刻印群（第176地点）として調査を実施した本地点は、岩ヶ平・六麓荘台地の縁辺部であり、急傾斜して西宮市域の市街地に接続する段丘端の斜面地である。現状は山林であって、分布調査の際確認された「㊦」を有する刻印石1石の遺存状態を調べることを主眼に事業地全体の確認調査を遂行した。刻印「㊦」は、因伯鳥取藩池田新太郎光政32万石が所用したことが推定されるもので（註1）、当家は徳川大坂城第1・2・3期工事すべてに関わり、担当延べ間数は254間を数える〔村川1970、古川欄2003、森岡2008b〕。本石切場においては、同家筆頭家老伊木三十郎所用の人名刻印を伴出することが多く〔古川1992〕、分布領域は二次的移動の石材を加味すれば、岩ヶ平・六麓荘台地上において少なくとも南東―北西方向に350mは広がる。これに本地点のごとく石曳き道との関連が強い石材群まで包括させると、さらに同方向南側に700mばかり延びることになる〔藤川1979、森岡・坂田2005a〕。合算すれば、1km前後に及ぶ。

さて、調査地の現状を現地観察すれば、その立地は段丘面を開削、下刻する通称ドンドン川の沖積地へと接続する開口部左翼側の斜面地であり、この川自体が東南行して現在西宮市西部を流れる夙川に合流するた

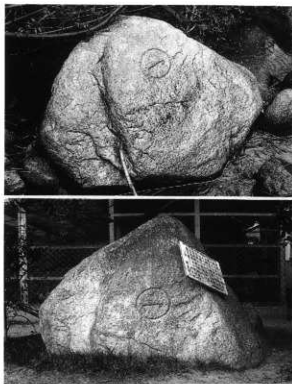
め、西宮浜に海出する石曳き道の機能を担っていたことを以前推測した〔森岡・坂田2005a、森岡2008b〕。昭和45年（1970）10月、この谷間口付近から120m程上流に遡ったドンドン川の川底から、通称富士山をデフォルメした「㊦」が彫られた巨石の刻印石が発見され、直後石工が入って保存措置としての切断作業がなされた。その時に撮られた藤川祐作氏提供の写真3枚を石切場調査の研究史沿革を叙述する中で紹介している〔森岡・竹村編2006〕。旧状を伝える貴重なものであるが、刻印石の所在地籍は岩園町104番地であり、自然石・自然面に彫られたものであって〔藤川1976・1979〕、古川久雄氏は横30cm、縦27.5cmの刻印寸法を計測している〔古川2003〕。この切り取り刻印の現物資料は移設され、現在、芦屋市立美術館前庭に保存されており〔森岡・古川1992〕、今日でも計測や採拓の跡跡観察が可能である。

(2) 池田家と関わる刻印石の広がりについての評価と本地点刻印石の性格付け

調査地点で確認された1石の刻印石は、従前の調査・研究で同様な刻印を持つ資料が蓄積されつつある。ここでは、今後確認調査を進めた場所と直接関連しそうな類型に関し、粗雑な検証を少し進め、本地点で確認された良好な刻印石の性格について、若干言及する。

当該調査地からさらにドンドン川を遡ること130m程度の所で、刻印石がかつて見つかつており、池田家が所用した「㊦」が彫られている。この刻印石は、現在、市立岩園小学校内に移設保存されており〔藤川1979〕、実見可能である。刻印の法量は、縦21cm、横23cmを測るもので〔古川2003〕、心持横方向が長い。このたび、関連刻印石として重要な位置を占めるため、藤川祐作氏提供の写真を示しておきたい（第1図）。

さらに本川の上流部では、市道の十字路を挟んで北方40mの地点、岩園町45番地において「☆」と「㊦」が併刻された刻印石（自然石・自然面）があり、同地帯には池田家所用の「㊦」の彫られた自然石の刻印石が遺存する。これらは遺憾ながら共同住宅建設のため消滅しており、刻印自体の大きさを示す基礎データを欠く〔古川編2003〕。上記の刻印石と関連して、同谷地帯の下流側において広義的には谷に面する岩園町57番地2（岩ヶ平刻印群第70地点）において、専用住宅建築に伴い、緊急調査がなされており、正「井」を持つ刻印石1石を含む欠穴痕を有する石材8石が採石遺構と思しき土坑状の落ち込みから出土し、ドンドン川に面した石切丁場の一つが近辺に存在した蓋然性は大きいものと思量される〔森岡・竹村・坂田2006〕。したがって、開析谷間口部近くに至るまで石切丁場の点的、ユニット的な存在形態が広がっているとして大過なく、南限に関する情報も丘陵端となる本地点の実態と深く結まることが予想された。



第1図 岩ヶ平刻印群ドンドン川流域川底でみられた池田家所用刻印の一例（上）現地（下）展示

刻印「井」の所用大名や家臣を特定することは、現有資料において困難であるが、岩ヶ平刻印群中に斜「☆」の刻印を含めて5例程が既知されており、その占有率にはこの際留意しておきたい。

結果的には、当該調査地点においてアトリエとして機能する石切丁場の存在は否定された。確認調査の成果としては、むしろこの刻印石が単独で機能していたらしいことに意義がみられる。自然石であり、原位置を保つことを報告しているの、刻印面は谷地形に向けて第一義的な標識となる。

その意味については、複数考えておく必要があろう。それらを要すれば、①池田家石曳き道の独占表示、②数家＝複数採石集団に跨る石曳き道の共有、協業表示の一部、③河川左岸側での石切場専有表示、④石切場領域（丁場割）の南限明示等々。現状では決して難いものがあるし、他の解釈も本例に基づき推考する余地は残されている。本書では調査所見が重要であり、事実報告の持つ可能性の広がりを尊重しておきたい。広い意味での防衛機能刻印であることは否定できないものと思われる。

ここで問題となるのが、当該地点で見出された刻印「㊦」の所用主体と岩ヶ平刻印群内での分布状況であろう。その意味について言及しなければ、この調査地点の発掘調査を行った意義も半減する。一つ一つの調査地点に拘り、事前調査を可能な限り実施してきた目的は、累積された資料の全体像と常に突き合わせつつ、

より一歩でも石切場経営の実態、真相に近づくためであり、それがまさに石切場という生産遺跡の本地域での保存理念の基層を形成するからに他ならない。

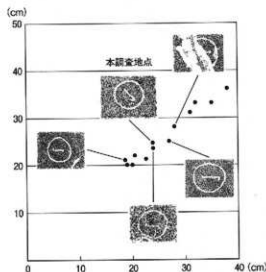
本刻印と所用大名との関係については、鳥取藩池田家とみる従来の見解を妨げない。最も大きい根拠は、刻印「㊦」は、例えば岩ヶ平刻印群第32地点3号石材のごとく単独性の高いものが多いが、第32地点1号石材、第45地点1号石材のように、家老刻印「伊木」と共存関係にある例も認められ、大名池田家が併刻させて使用する蓋然性はきわめて高い。また、藤井重夫・古川久雄両氏の調査成果の一つに、大阪城石垣において直径20cm内外の小型刻印「㊦」が刻印「㊦」と比較的共同の分布を示し、さらに岡田保造氏が鳥取県法美郡国府町所在の岡益の石室にみられる丸にS字の大規模刻印「㊦」に関して、鳥取藩池田新太郎光政期の刻印と論断していること（岡田1982）も、傍証、補強の具体例として有効なものである。実際、前者の現象は、芦屋市域の石切場においても追認することができ、岩ヶ平刻印群第124地点にあっては、1号石材自然面において、文字刻印「伊木三十郎 石ば ニしの宮内」と刻印「㊦」とが共存しており、池田家臣団とも一定の親縁性を示す点（古川1992、森岡・坂田2008）は、注目されてよい。

そこで再度、この刻印石について、本例の観察結果を提示しておきたい。石材は調査地の中央付近で確認されており、3層の大阪層群に原位置を保って密着するもので、2層を形成する段丘礫層中の礫が選ばれたものと推定される。大きさは1.1m×1.56m、高さは最低0.7mを測る自然石で、正面をかなり意識した石材であることが窺える。刻印自体は正円に精緻に彫られた美しいもので、その直径は均質で24cmを計測する。円内は「片鉤一」が彫られている。

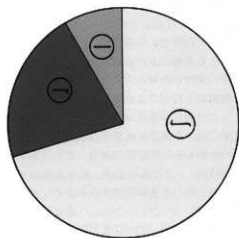
丸に一の刻印の法量については、かつて刻印種のさらに大枠円形系統に基づき、属性の備わり方の有無をデータ的に解析したことがある（森岡・坂田2005c）。今回抽出された刻印「㊦」については、縦横の実長が判明している例は少なく、本例を含めても僅か12例程にとどまる。その円圏の大きさの範囲は、最小が20cm×20cm、最大が38cm×36cmの中に収まるもので、縦軸、横軸の法量グラフを作成しても当然のことながら、 $Y = X$ の45°上向の直線上の上下に沿うように収斂する。正円や正方を目指した刻印としては、当たり前なことなのだが、刻印には必ず縦・横の数値の揃さぶりが認められ、幾何学的な完全体のものはけっして多くはなく、かようなグラフも一定の意味を持つ。刻印「㊦」の多くが径20～25cmに収まることは（7例）、何某かの標準値が存在するものとして注意されてよい（第2図）。巨大なものやきわめて小型の刻印が少なくても大きな特徴と言えようか。その中において、第176地点の本例は標準類型に属しつつ

も、コンパスを用いたかのように精度高く、彫りの幅や深さも安定感があり、加えて標本的な確実性も備わっている。整美という言葉が似つかわしい。返す返すも移設保存できなかったことが今でも悔やまれる刻印石である。

本刻印は、圏線の内部に「一」を彫ることを常とする。丸内の一は鍵の手状になっており、これまでのものを加えると、3例存在する。14例中では少ないが、一文字の一（押さえ終わり）は1例しかないので、10例を数える両鍵パターンが主体を占める点からは稀少と言えるものである（第3図）。



第2図 鳥取藩池田家所用刻印岩ヶ平刻印群
内法量分布および主要刻印拓影（縮尺1/32）
〔拓影は本書および芦屋市文化財調査報告書第44集所収古川久雄
採拓資料、芦の牙グループ手拓資料使用〕



第3図 鳥取藩池田家所用刻印の型式別占有率
（岩ヶ平刻印群の刻印型式別統計）

(3) 刻印群内のグルーピングと丁場割想定をめぐる離散刻印石の性格

岩ヶ平刻印群（第176地点）は、石切場の内部構造についての手懸りの得られる採石集団の地形的にも境界部分と目される地点である。主として芦の芽グループ員の分布調査の段階から、岩ヶ平刻印群は住宅地にあるという特殊な遺存状況が注目され、本来最も内容の把握が困難な場所に展開していると言つてよい。山林にも迫る宅地開発の波が次々と及ぶにしたがい、徳川大坂城関連石切場の中にあつては、細切れながら全国でも格段に発掘調査例を擁するものとなつてきており、発掘法など新しい提言の数々と新情報の発信はここを起点とするものが俄然多くなつていくのが現状である。石切場における集団関係の基礎資料掌握もかつては刻印群を「採石支群」と呼び換え、その下位単位として「採石小支群」と仮称したこともあったが、それは刻印種の一定エリア集中を念頭に置いた暫定的なグルーピングであつた〔森岡1994、芦屋市教委1994〕。

それは、学史的にみれば、「八十刻印群」として再認識〔藤川1976〕された「採石場としての岩ヶ平」〔藤川1979〕が奥山刻印群の分布状況の実態〔森岡・藤川1980、芦屋市教委1980〕をその検出刻印数や種類の多様性に基づき、「一藩が全域を占有したとは到底考え」難いとし、「複数の小グループ（藩）が、領域を分け合い、または共有しつつ採石を行った」との見解〔古川1992〕を導いたことは、今日回顧的に追れば、当時40個前後の刻印石の分布に歴史的な意義を持たせようとした重要な研究の流れと評価される。それを受けて分布状態に有意性を看取し、厳密に記号化した刻印石の分布を改めて検討した結果、限定区域ながらA・B・C・D・Kの5種の刻印には、使用石材に特定選地の領域が認められ〔森岡1994、芦屋市教委1994〕、領界の侵犯を互いに意識するような石場の土地割が想定できるようになったわけである。当時、池田家所用刻印は、B・B'で表示されているが、領域性の一部が見え始めた段階でしかない。

こうした石切場における専有加工場の確保をめぐる採石集団の痕跡が発信する一定の秩序は、これまで盛んに発掘調査を行ってきた岩ヶ平刻印群の調査・研究を要として先鋭化の動きが一層強まり、確認数70を数える段階には、小浜藩京極家と鳥取藩池田家の専有採石領域の存在とその境界線の推定、これに加えて三藩（松江藩堀尾家・唐津藩寺澤家・熊本藩加藤家）のおよそ石切丁場の存在が叙述されるようになった〔森岡・古川2002〕。そして、これら一連の調査・研究の到達点〔古川2003〕での普及と言え、奥山山頂主尾根から派生する南斜面山尾根を中心に単独分布をみせる奥山刻印群K地区（長州藩毛利家石切場）の悉皆調査成果〔古川1998、森岡編1998、芦屋市教委1998〕

はこれに先んじて補強するものとなっている。前後して、越前福井藩松平家の芦の芽グループ分布調査データの再評価や唐津藩寺澤家の石切丁場の面的調査や分布調査成果〔古川編2003〕などの発信を受けて、〔森岡・坂田2006c〕では最新データのビジュアル化に意を注いでいる。その過程で刻印表示の目を目的とした当初から石場を離れることのない「勝示石」「境界石」「結界石」なる用語の定立や概念規定も随時並行してなされ〔古川2003、竹村・白谷編2006、森岡2006・2008b・2009、森岡・坂田2008、森岡・竹村編2006、芦屋市教委2008〕、所用藩不明刻印の抽出や石切場における刻印の役割、刻印を有する自然石の存在形態などの分析に及んで今日に至っている。そして、現状では、併刻刻印の意義づけに主要家臣団への注目〔古川1992〕、組頭や石工棟梁などより階層的な下位集団の存在を示唆するなど、階層的、職掌的な検討へと歩を進めている〔森岡2009〕。近年発表されつつある〔多賀2009・2010〕の地道な研究は、それを牽引するものとして高く評価されている。

本地点の調査は、こうした課題と検証とも深く関わる場所であり、第2章の報告部分もその目的に沿って記述されている。勝示のみを最後まで企図したものであったかどうかは、なお検討の余地があり、後考を期しと思う。

（森岡）

第3節 芦屋廃寺遺跡の広がりと同様

現在時点で芦屋廃寺遺跡の調査も第116次の取り扱いを行うに至っている。複合遺跡としてきわめて複雑な様相を呈しており、草叢の環境下にあつて常に求められてきた古代寺院跡の寺域中核の正確な範囲の追求以外に、複合遺跡としての構造の解析をたえず行つていかねばならない。堂宇が並び建つ中心伽藍が既に市街地と化した廃寺の宿命でもあり、その成立前と継続期の周辺集落の様態などをいかに把握するかなどが目的とすべき課題である。

今般、事前調査の対象となった第113地点でもその観点から検討してみると、弥生時代～近世の遺構面が数面確認され、とくに第3・4遺構面においては、標高45.0～45.2mの扇状地緩傾斜地に堅穴住居や掘立柱建物から成る古墳時代の集落の展開が想定された。近傍では近似した在り方を既に第48地点（三条町124番地2）が示しており、標高38～41mの扇状地において、B-1区で4世紀代の土師器を伴う住居跡1棟、B-3区で住居跡4棟、D-1区では6世紀代に限定し得る方形堅穴住居跡6棟、大型掘立柱建物跡1棟が検出され〔今村・町田1997〕、全体として7世紀前半以前の居住域の重層性こうした扇状地緩傾斜面に広く展開するようである。結果として、これまでに広く調査では、金属器加工工房の一角と思しき遺構が検出

されるという成果も得ており、古墳時代集落としての複雑な展開も今後、考えていかねばならない。(森岡)

第4節 待望の居住域がみつかった打出岸遺跡とその性格をめぐって

(1) 『考古小録』とその著者、紅野芳雄について

本遺跡の周知される背景を知る上に欠かすことのできないもの、人が、『考古小録』とその著者紅野芳雄である。紅野は言わばこの遺跡の発見者であり、遺跡名の初出文献が彼の著書『考古小録』においてである。厚さ1cm程のこの書物は、限定式百部で昭和15年(1940)4月25日に西宮史談会から発行された。

紅野芳雄は西宮町の町長紅野太郎の長男として明治26年(1893)に西宮の地に生まれ、大阪の茨木中学校に通い、卒業後は金融関係の仕事に就いた(浪速銀行西宮支店に勤務)。西宮は酒所として有名であるが、大正8年には酒造会社の経営に踏み切った。紅野の考古活動は明治41年(1908)に始まっている。茨木中学校に入学したのは明治39年(1906)のことであるから、同校2年生の冬休みのことであった(吉井1940)。同時代の人士、考古ボーイたちに、田岡香雪、吉井良尚や田澤金吾がおり、この書が遺著として、掛け替えのない郷土史料として顧みられる機縁となった。

『考古小録』の母体となった各地の遺跡の踏査活動は、大正6年(1917)から始まっている。備忘のため日夜残らず書き続けた日誌の記録はノート3冊に及び、紅野の死後、西宮史談会が遺作、遺著として刊行したのが『考古小録』なのである(紅野1940)。実際に足を運び、日々変わる遺跡の姿や今では想像もつかない各所で露頭し、採集される遺物の秀逸性、蓄積がやがてその遺跡の性格をも語り始める貴重な記録であるが、阪神間の文化財担当者でさえ、最初から最後まで熟読し、その発掘する密度のある内容に耳を傾けるものは少ない(註2)。全3冊の『考古小録』以外に、図類なども豊富な『考古図録』『考古雑録』などが現存し、西宮市立郷土資料館に収蔵されている。享年46歳で亡くなった紅野の命日は昭和13年(1938)4月25日であるが、遺跡現場へ足を運んだとみられる最後の踏査日は4月20日であり、補記が4月22日になされている。辰馬悦蔵は紅野採集資料を一等的な価値をもつものとして評している(辰馬1940)。

(2) 昭和9年、打出岸遺跡の発見

岩ヶ平遺跡を歩いた紅野は、昭和9年(1934)3月14日、作道中の工事現場で本遺跡を発見した。弥生土器片を遺物包含層中に見出したものであるが、その翌日から始まった踏査活動は、3月15日・20日・7月8日・11日・18日と続き、翌昭和10年(1935)7月18日、8月2日・18日・29日・30日、9月1日・3日・11

日・27日にまた夏から秋にかけて熱心に遺跡踏査を行っている。昭和9年に6回、同10年に9回、通算15回の踏査となるが、正確を期すれば19回に及ぶ採集活動を数える。記録は大変貴重なもので、土層断面図や当時としては精緻な土器実測図なども後世に伝えられている。

(3) 紅野踏査諸記録の分析、検討

上記した打出岸遺跡の古記録を周知の埋蔵文化財として取り扱うべく行政的要請と市内の弥生遺跡の現状分析を目的に検討を進めたのは随分時が経ってからのことであるが(村川・森岡1976)、それまでも芦屋の自治体史編纂初期の段階に「石器時代遺跡」として名称や内容が紹介されている(魚澄・武藤1956)。今それらを加味しつつ、[村川・森岡1976]に拠りながら、紅野の踏査記録を分析し、遺跡相と関わる若干のことに言及したい。

紅野日誌に基づけば、遺跡の中心部は、阿保親王塚古墳より西へ200m余の所に位置し、緩やかに屈曲する宮川の右岸段丘上に存在する(第5図)。現在遺跡地帯には人家が建ち並び、住宅地となっていて、紅野が遺物を採集した頃の面影を知るよしもないが、道路敷設の両側切通しの北側で、地表下35~100cmの位置に弥生土器の濃密な包含層が遺存しており(第4図)、連続せず南側ではやや稀薄となっている。地表下100cm以下では粘土質の土層が露呈し、その部分からは口縁部残片で、波状文様を有する1点、壺形土器の胴部上半片1点などが出土している。個々の採集地点は、第1表のとおりであるが(村川・森岡1976)、要するに遺物を包含する土層は道路切通しの主として北側崖面への集中が著されるもので、この道路の以北一帯に広がっていたことが知られる(第1表)。遺物は土器類が中心であり、他に畑地の地表の精査により、石鏃1点、土師片1点が採集されている。記載で注意すべきことは、サヌカイト片が1点も見出されなかったことが強調されている点であり、土器類の帰属する時期(後述)を暗示しているよう。

(4) 紅野芳雄採集遺物の様相

当時の採集遺物は、第1表のとおりであるが、紅野自身の整理に基づけば、完形の壺1、口縁部片2、底部13、飯厨部上半残欠3、胴部下半残欠4、完形高杯1、高杯脚部3、須恵器1が含まれている。須恵器は包含層中に微量混在しているようであるが、包蔵の主力をなしていない。断片ながら(村川・森岡1976)では、1片の赤褐色の土器片を紹介している(P185図84、『考古小録』からの転載)。2帯の櫛波状文を施す壺形土器の口縁部とみられる破片であるが、紹介の当時、弥生土器と考えて触れている。しかし、現段階で検討を加えると、この破片は二重口縁の立ち上がり部分であり、やや硬直な櫛波状文の形質も庄内式併

に社会が急速に要請した水系単位の広域用水の水利システムの円滑化と大いに連動した動きであったと理解できる。紀元2〜3世紀の交わりを包含するであろうこの小期、宮川右岸の水田生産地帯の配水差配に主要な役割を果たしていた集落とみて大過なく、今次調査で検出された日常遺構の様相をかなり欠く一連の土器溜まり遺構も水利に係わる祭祀などと間接的には絡む要素を顕現するものであって、継続的な機能分析がなお必要な物証と言えるのではなかろうか。実態なお鮮明な大原遺跡の小区画水田などの関与も現段階では考慮の内に入れておきたい。

(6) 土器相の地域性と古式土器器群年上の位置

最後になったが、本遺跡の第56地点の調査では多くの古式・古墳時代移行期の土器類が出土した。これらの土器群の詳細観察については、既に遺構・層位ごとに記述を終えたので、以下では、土器にみられる地域相や特性、古墳出現段階と絡む層年上の位置付けなどについてのラフスケッチを箇条書きにより行い、総論の役目を果たしておきたい。

○遺跡は宮川右岸に立地するが、土器の窯地土は単々丘台地上に存在する遺跡ともよく類似し（久保遺跡・小松原遺跡・若宮遺跡など）、宮川水域の在地の土器を主体に構成される。1.5km西方の芦屋川水域やさらに西の神戸市東灘区を流下する住吉川水系の諸遺跡とはかなり趣きを異にした胎土・焼成感を示し、搬入品自体はきわめて少ない。「山の土器」「里の土器」といった二項対立的な粗区分に取って照らせば〔森岡1980、森岡編2003〕、後者のグループに入るものと考えてよい。したがって、指呼の間にある集落同士でも日常的な交流は土器を見る限り少なく、本集落の機能する意味が稲作農耕社会の中でより特化されていることを示唆する。

○ただし、多くは日常生活に供した器種が含まれており、広口壺や細頸壺、二重口縁壺などの器種個数に比べると、壺形土器が圧倒的に比率が高く、全体として後期末以降の組成推移を示している。

○外来的な土器には、北四国系、淡路・紀伊系、丹波・丹後系、北近畿系、東摂系などの要素が看取されるが、基本は遠来者が本遺跡近辺で製作した「臨地製土器」〔森岡1999〕が主力をなし、典型的な搬入品は少ない。しかし、人の往来を明示することは確かであって、打出岸遺跡の集落が一定の求心性を保持していたことは注目されてよいだろう。

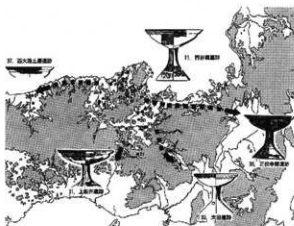
○報告資料中、本地域では初めての検証となった丹波・丹波系の高杯は、高野陽子のこれまでの研究〔高野2001a・2001b・2006〕でもよく知られているが、本資料の分析・検討ではその偏年の位置を考える上でも有効なものであり、向後に正確な胎土分析

が不可欠な土器の形式（フォーム）として、資料間の時間差も考慮、詮索する必要がある。

○丹波・丹波系（北近畿）の系譜の異なるこれらの土器は、他器種とセット関係を保つものではなく（非様式）、単器種でこの器形が製作ないしは搬入されたものであり、型式を異にするものを包括している。その影響に幾分時間的流れを見込んでいる。それは丹波高野編年〔高野2006〕による掘門線文系土器様式後半段階の大山式特有の有段口縁台付鉢から西谷式の有段口縁高杯への同系統内型式変遷と深く関わる。SD04下層（灰色土）では、西谷2式新段階併行期とみられる有段口縁高杯が複数点出土しており、各地域の土器編年の併行関係の現状〔森岡・西村2006〕からは、弥生時代末〜古墳時代初頭（古段階）と触れ合う。庄内式の古い部分と丸々閑説し得る西谷3式併行期になることはまずない形態なので、SD04下層土器群の中心時期の一点は上記したようになるだろう。ただし、遡る方については、西摂第3様式期〔森岡・竹村2006〕の在地焼や淡路型壺の独特の製作手法、直口細頸壺の型式などからみて、弥生時代後期末には引き上げられよう。

なお、有段口縁高杯の出白は、高野陽子氏のご教示により、丹波そのものではなく、丹波周辺にあるものと考えているが（第6図）、搬入品と断案し得る胎土情報を欠く点を断っておく。SD04灰色土上部出土土器は、西摂4様式の高杯や西摂5・6様式段階の壺・鉢などが認められ、その点も下層土器群自体の年代下層の方を押さえることが可能である。

○土器溜り1中層は、SD04下部土器群よりは新しく、その傾向は一部西摂6様式に下るものの、中心時期は西摂5様式にある。高杯脚部の著しい中実化や



1. 大井川流域（丹波系） 2. 山崎山遺跡（高野系） 3. 新渡戸遺跡（高野系） 4. 高野陽子遺跡（高野系）
5. 丹波系高杯（高野系） 6. 丹波系高杯（高野系） 7. 丹波系高杯（高野系） 8. 丹波系高杯（高野系）
9. 丹波系高杯（高野系） 10. 丹波系高杯（高野系） 11. 丹波系高杯（高野系） 12. 丹波系高杯（高野系）
13. 丹波系高杯（高野系） 14. 丹波系高杯（高野系） 15. 丹波系高杯（高野系） 16. 丹波系高杯（高野系）
17. 丹波系高杯（高野系） 18. 丹波系高杯（高野系） 19. 丹波系高杯（高野系） 20. 丹波系高杯（高野系）
21. 丹波系高杯（高野系） 22. 丹波系高杯（高野系） 23. 丹波系高杯（高野系） 24. 丹波系高杯（高野系）
25. 丹波系高杯（高野系） 26. 丹波系高杯（高野系） 27. 丹波系高杯（高野系） 28. 丹波系高杯（高野系）
29. 丹波系高杯（高野系） 30. 丹波系高杯（高野系） 31. 丹波系高杯（高野系） 32. 丹波系高杯（高野系）
33. 丹波系高杯（高野系） 34. 丹波系高杯（高野系） 35. 丹波系高杯（高野系） 36. 丹波系高杯（高野系）
37. 丹波系高杯（高野系） 38. 丹波系高杯（高野系） 39. 丹波系高杯（高野系） 40. 丹波系高杯（高野系）
41. 丹波系高杯（高野系） 42. 丹波系高杯（高野系） 43. 丹波系高杯（高野系） 44. 丹波系高杯（高野系）
45. 丹波系高杯（高野系） 46. 丹波系高杯（高野系） 47. 丹波系高杯（高野系） 48. 丹波系高杯（高野系）
49. 丹波系高杯（高野系） 50. 丹波系高杯（高野系） 51. 丹波系高杯（高野系） 52. 丹波系高杯（高野系）
53. 丹波系高杯（高野系） 54. 丹波系高杯（高野系） 55. 丹波系高杯（高野系） 56. 丹波系高杯（高野系）
57. 丹波系高杯（高野系） 58. 丹波系高杯（高野系） 59. 丹波系高杯（高野系） 60. 丹波系高杯（高野系）
61. 丹波系高杯（高野系） 62. 丹波系高杯（高野系） 63. 丹波系高杯（高野系） 64. 丹波系高杯（高野系）
65. 丹波系高杯（高野系） 66. 丹波系高杯（高野系） 67. 丹波系高杯（高野系） 68. 丹波系高杯（高野系）
69. 丹波系高杯（高野系） 70. 丹波系高杯（高野系） 71. 丹波系高杯（高野系） 72. 丹波系高杯（高野系）
73. 丹波系高杯（高野系） 74. 丹波系高杯（高野系） 75. 丹波系高杯（高野系） 76. 丹波系高杯（高野系）
77. 丹波系高杯（高野系） 78. 丹波系高杯（高野系） 79. 丹波系高杯（高野系） 80. 丹波系高杯（高野系）
81. 丹波系高杯（高野系） 82. 丹波系高杯（高野系） 83. 丹波系高杯（高野系） 84. 丹波系高杯（高野系）
85. 丹波系高杯（高野系） 86. 丹波系高杯（高野系） 87. 丹波系高杯（高野系） 88. 丹波系高杯（高野系）
89. 丹波系高杯（高野系） 90. 丹波系高杯（高野系） 91. 丹波系高杯（高野系） 92. 丹波系高杯（高野系）
93. 丹波系高杯（高野系） 94. 丹波系高杯（高野系） 95. 丹波系高杯（高野系） 96. 丹波系高杯（高野系）
97. 丹波系高杯（高野系） 98. 丹波系高杯（高野系） 99. 丹波系高杯（高野系） 100. 丹波系高杯（高野系）

第6図 丹波系高杯の波及経路〔高野2001a〕

窯・鉢の底部形態の変化、矮小化などの特性から判断される。土器溜り1下層土器群はやや古く、直口細頸壺は西暦4様式の時期を示し、壺や高杯も概ね同調する。無論、これら中・下層の資料が庄内式に併行することは、第31図の壺や鉢の外周平行タタキの線型に少量伏する庄内河内型壺の影響度からみて明らかであろう。資料の乏しい土器溜り2・3については、所見を示せないが、土器溜り1の下層土器群と触れ合いをみせる時期のものとみて大過ない。這槽群として有機的な関係が見出せる。

- この段階の土器群を保有する本遺跡において、特筆すべきことは、猪名川以東の諸遺跡と比べ、庄内式併行期の中河内生駒西館産土器の搬入品がきわめて稀少なことである。類似する色調の二、三の土器片は散見されたが、確例は全くなく、大坂平野との集落間交流は不活発と言える。その動向は、第9地点のように中河内地域の人々の関与のみられる製作技術を吸収した庄内河内型壺の技術的地化が庄内式併行最新段階になって初めて出現することを思えば、今回報告を試みた一括土器群の相対編年上に占める位置が庄内式段階でも前半～中頃までに収まることと表裏の関係にあるといえ、時期比定のことよく理解されるのではなかろうか(第2表)。

- 弥生集落のキャッチメントエリア程度での土器の移動範囲(人の日常的動き)は、なかなか実証性に乏しく、長い間留保されている場合が多いが、褐色系土器群・灰色系土器群といった総量を見ての大別は不可能ではなく[森岡1980]、その裏付けに自然科学的(岩石学・鉱物学的)な胎土分析は客観性を備えることもあって、本市では先駆的に採用を試みている[辻・矢作・辻・田中・バリノ・サーヴェイ株式会社2003]。[森岡1980]で示した考古学館の問題提起を受け、議論の柱に最も適確な資料(土器片)を抽出し、①胎土の粒度組成傾向、②花崗岩類岩片の混入状況、③石英・長石の混入状況、④鉱物片・岩石片の種類からみた傾向、⑤薄片観察による土器の推定焼成温度などの諸観点から比較分析し、遺跡固有の多産土器のもつ属性を客観化する方法である。近年は、土器以外に植籾や瓦など多岐にわた

る分野の胎土分析で実践されつつあり、その初の試みが[森岡2003]の寺田遺跡出土土器の分析であった。その時の資料は打出岸造り遺跡第32地点出土の庄内式併行期の壺体部片で、色調灰褐色～明灰褐色(白色岩片点、砂粒目立たず)の特徴を示すものであるが、客観的には①極細粒砂より細砂の粒径が多く含まれる傾向、②極粗粒砂～中粒砂との粒径を主体とした組成で、出現頻度は高い。③若宮遺跡と類似した傾向を示し、寺田遺跡多産土器との対峙。石英の細粒化、カリ長石のピークが極細粒砂～細粒砂に顕在。④鉱物・岩石種における共有度の高さ、⑤素地を構成する主要粘土鉱物であるセリサイトの加熱変化が乏しく、石英・長石類にも加熱変化の認められないものから、一部セリサイトの非晶質化がみられるものまでの広がりがあり、焼成温度も800℃以下の資料と900℃前後の資料の両極が認められるようである。当第56地点の資料の性格も大きく変わるものではないので、参考までに記載した次第である。

(森岡)

第5節 結びにかえて

以上、平成21年度に実施した国庫補助事業対象地の発掘調査成果などを遺跡ごとに見てきた。

明治時代初期に文化財を保護するという考えが日本の社会に台頭してから100年余り、昭和25年(1950)の文化財保護法施行(法律第214号)から一昨年は60年の歳月が経つという節目の時期を意識する昨今である。この間、文化財の保護を取り巻く環境は大きく変化し、同時に社会の価値観や国民の文化意識も随分と様変わりした。文化財の捉え方も文化遺産、文化資源としての保存や活用、さらには景観という概念をも包括した広域的で柔軟な保護活動の動きなど、埋蔵文化財の社会に占める価値や活用の将来像も変革期に入っていることを如実に実感する。

専用住宅の建設事業に伴って実施されるこうした補助金適用の事業もより後世に歴史的価値が引き出せるよう、運用方法や制度などを機会あるたびに見直し、日夜模索しなければならない。

(森岡)

註記

- (註1) 池田家の歴史的系譜は複雑であるが、輝成時代の池田氏所領が姫路52万石の他に、子息・弟の拝領した岡山28万石(忠雄)、淡路6万石、鳥取6万石(長吉)などを有する100万石クラスの大名である。伊木家則印と深く係わる池田新太郎光政は、姫路藩利隆の長男で、姫路→鳥取→岡山の名番を転勤、元和3年(1617)には、因幡・伯耆に入り、その後は寛永9年(1632)、忠雄の長男光伸が幼少であったため、岡山藩と関係になる経緯がある。伊木家則印の主光政の年代観から見て、大坂城徳川再興期間との触れ合いがよく理解されることと思われる。

- (註2) 幸いことに、筆者と上田洋子は、昭和49年(1974)に、武蔵野委員長・村川行弘委員の指示により、『考古小銀』の毎年日録の全文に目を通し、当時の遺跡単位にしたい記述内容を完全に分解するとともに、遺構・土層・遺物などの実態、点数のカード化を進めて個別の傾向を把握した。その結果は、直後に刊行をみた『新修戸塚市史』資料編に反映されたが、とくに弥生時代(村川・森岡1976)の叙述では、地図限外や地名考証を進めつつ遺跡名の踏査や復活、内容の記載に基礎資料として活用を図った。打出岸造り遺跡に関しても、最も具体性が伝わってきたのは、紅野の『考古小銀』であった。

起説の年月日からすると、著者16歳の頃であったことは田岡香澄が強調するところであり、46歳が晩年となる[田岡1940]。

西暦分期 遺跡名	後期後半期Ⅰ	後期後半期Ⅱ	後期後半期Ⅲ	庄内式期Ⅰ	庄内式期Ⅱ	庄内式期Ⅲ	庄内式期Ⅳ	布留式期Ⅰ	布留式期Ⅱ	文獻
打出穴・茨り 遺跡						第1地点NR-2ス・ハ層				森岡・木暮1996
		第9地点河川重4					第9地点河川重3			矢口・北原・森岡・木暮1996
				第32地点大溝1上層						矢口・北原・森岡・木暮1996
					第32地点大溝2下層					森岡・辻2007
						第56地点SD04灰色土上部				森岡・辻2007
										白谷・森岡2011
				第56地点SD04灰色土下部						白谷・森岡2011
						第56地点土器層り1中層				白谷・森岡2011
										白谷・森岡2011
				第56地点土器層り1下層						白谷・森岡2011
西暦編年	西暦1様式	西暦2様式	西暦3様式	西暦4様式	西暦5様式	西暦6様式	西暦7様式			森岡・竹村2006
時期小区分	西谷1式(新)	西谷2式(新)	西谷3式	西谷4式	西谷5式	西谷6式	西谷7式	古墳時代前期		森岡・西村2006
丹後編年	西谷1式(新)	西谷2式(新)	西谷3式	西谷4式	西谷5式	西谷6式	西谷7式	西谷8式		高野2006

第2表 打出穴遺り遺跡 古墳出現前後の土器変遷

引用・参考文献目録

- 芦屋市教育委員会 1980 『芦屋市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表（第1分冊）』（芦屋市文化財調査報告第12集）
- 芦屋市教育委員会 1994 『平成5年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 六龍荘町94番地（八十塚古墳群・徳川大坂城東六甲採石場）』（芦屋市文化財調査報告第25集）
- 芦屋市教育委員会 1996 『平成7年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査 - 震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認（試掘）調査 - 概要報告書 寺田遺跡（第40・41・47・52・55・57地点） 芦屋廃寺遺跡（W地点・第29・38地点） 月若遺跡（第20・25・28・30・33地点） 打出岸造り遺跡（第1地点） 打出小樋遺跡（第17地点） 金津山古墳（第9地点） 久保遺跡（第15地点） 山芦屋遺跡（S8地点）』（芦屋市文化財調査報告第27集）
- 芦屋市教育委員会 1998 『徳川大坂城東六甲採石場Ⅰ - 芦屋墓園拡張工事に伴う奥山刻印群K地区内の事前発掘調査 -』（芦屋市文化財調査報告第31集）
- 芦屋市教育委員会 1999 『芦屋廃寺遺跡（第62地点）発掘調査実績報告書 - 平成11年度震災復興埋蔵文化財調査 -』 参照録 芦屋市教育委員会 2006 『平成11・12年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査 - 震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査 -』（芦屋市文化財調査実績報告集3）
- 芦屋市教育委員会 2001 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図利用の手引き』（芦屋市文化財調査報告第40集）
- 芦屋市教育委員会 2002 『平成13年度国庫補助事業 徳川大坂城東六甲採石場Ⅱ 岩ヶ平刻印群（第11次）発掘調査報告書』（芦屋市文化財調査報告第42集）
- 芦屋市教育委員会 2005 『徳川大坂城東六甲採石場Ⅳ 岩ヶ平石切丁場跡 - 宅地造成工事に伴う埋蔵文化財事前調査の記録と成果 -』（芦屋市文化財調査報告第60集）
- 芦屋市教育委員会 2006a 『徳川大坂城東六甲採石場Ⅴ 岩ヶ平刻印群（第85地点）発掘調査報告書 - 長州藩毛利家石切丁場跡における発掘調査の成果 -』（芦屋市文化財調査報告第61集）
- 芦屋市教育委員会 2006b 『徳川大坂城東六甲採石場Ⅵ 岩ヶ平刻印群発掘調査報告書 第32・33・45・67・70・79・81・91地点 - 平成9・11・14・15・16年度国庫補助事業 -』（芦屋市文化財調査報告第64集）
- 芦屋市教育委員会 2007 『平成12年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 - 震災復興に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果 - 城山南麓遺跡（C・D地点） 西山町遺跡（第7地点） 芦屋廃寺遺跡（第71地点） 六条遺跡（第13地点） 津知遺跡（第24・31地点） 打出岸造り遺跡（第32地点） 四ツ塚（第7地点） うの塚（第1地点）』（芦屋市文化財調査報告第65集）
- 芦屋市教育委員会 2008 『平成18年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 三条台下遺跡（第2地点） - 徳川大坂城東六甲採石場Ⅶ 岩ヶ平刻印群（第122・124・126地点）』（芦屋市文化財調査報告第73集）
- 芦屋市教育委員会 2009a 『平成14年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 - 震災復興に伴う埋蔵文化財発掘調査とその成果 - 城山南麓遺跡（E・F・G地点） 冠遺跡（第23地点） 芦屋廃寺遺跡（第81・88地点） 月若遺跡（第74地点） 寺田遺跡（第144地点） 津知遺跡（第123・187地点） 打出岸造り遺跡（第38・39地点） 久保遺跡（第47・48地点） 打出小樋遺跡（第36・37地点）』（芦屋市文化財調査報告第78集）
- 芦屋市教育委員会 2009b 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図利用の手引き』（芦屋市文化財調査報告第80集）
- 芦屋市教育委員会 2010 『兵庫県芦屋市 芦屋廃寺遺跡（第115地点）発掘調査概要報告書』（芦屋市文化財調査報告第87集）
- 勇 正康・藤岡 弘 1976 『古墳時代』『新修芦屋市史』資料篇1 考古・古代・中世 芦屋市役所
- 伊藤康晴 2009 『鳥取藩主池田光仲と池田家一門』『姫路城の“創業者”池田家三代の遺産』（播磨学研究所編）神戸新聞総合出版センター
- 今泉三郎 1977 『芦屋物語』康寿倶楽部
- 今村道雄・町田利幸 1997 『芦屋廃寺遺跡（第48地点）』『平成8年度 年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

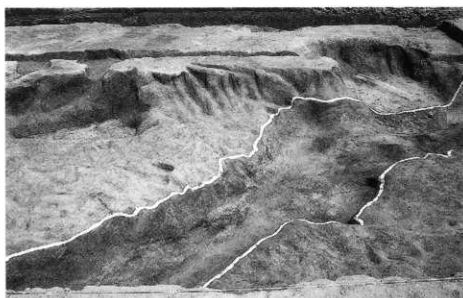
- 魚澄惣五郎・武藤 誠 1956 『芦屋市史』本編 兵庫県芦屋市教育委員会
- 岡田保造 1982 『「岡田の石堂」の刻印』『古代学研究』97号 古代学研究会
- 北垣聰一郎 2005 『城郭普請と石材の搬入出』『天下普請を支えた石材の調達 - 東六甲徳川大坂城石切丁場跡 -』現地検討会資料 主催：大阪歴史学会 後援：日本考古学協会・文化財保存全国協議会・関西文化財保存協議会・歴史資料ネットワーク
- 倉地克直 2009 『姫路・岡山・鳥取三都の縁 池田光政における「家」と「公儀」』『姫路城の「創業者」池田家三代の遺産』(播磨学研究所編) 神戸新聞総合出版センター
- 紅野芳雄 1940 『考古小録』西宮史談會
- 小森俊寛 編 2005 『京から出土する土器の編年の研究 - 日本律令的土器様式の成立と展開、7～19世紀 -』製作・発行：京都編集工房 印刷：真陽社
- 坂江 涉 2008 『古代の西摂・神戸と本庄地域』『本庄村史 歴史編-神戸市東灘区深江・青木・西青木のあゆみ -』本庄村史編纂委員会
- 先山 徹 2005 『地質学・岩石学的にみた六甲山の御影石』『天下普請を支えた石材の調達 - 東六甲徳川大坂城石切丁場跡 -』現地検討会資料 主催：大阪歴史学会 後援：日本考古学協会・文化財保存全国協議会・関西文化財保存協議会・歴史資料ネットワーク
- 島 之夫 1929 『芦屋の里』宝蔵館
- 田岡香逸 1940 『編者言』『考古小録』紅野芳雄遺著 前掲
- 高野陽子 2001a 『土器の交流 - 近畿北部と東海 -』『第9回 春日井シンポジウム2001年「東海学」を深める - 弥生から伊勢平氏まで -』春日井市教育委員会
- 高野陽子 2001b 『北近畿における弥生時代後期前半の土器とその時間列』『京都府埋蔵文化財論集』第4集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 高野陽子 2006 『第I部 古式土器編年集成 丹後地域 - 擬凹線文系土器の様式と変遷 -』『古式土器の年代学』財団法人 大阪府文化財センター
- 多賀左門 2009 『東六甲探石場城山刻印群「十曜紋と一」の刻印』『歴史と神戸』第48巻6号 神戸史学会
- 多賀左門 2010 『攝津 大坂城(15) - 東六甲探石場 -』『城と陣屋』54号 日本古城の会
- 多賀左門ほか 2006 『大坂城 石垣調査報告書(二)』築城史研究会
- 高橋一夫 2003 『手槍形土器』『初期古墳と大和の考古学』学生社
- 竹村忠洋・白谷朋世 編 2006 『徳川大坂城東六甲探石場V 岩ヶ平刻印群(第85地点)発掘調査報告書 - 長州藩毛利家石切丁場跡における発掘調査の成果 -』『芦屋市文化財調査報告第61集』芦屋市教育委員会
- 辰馬悦蔵 1940 『跋』『考古小録』紅野芳雄遺著 前掲
- 辻 康男・矢作健二・辻本裕也・田中義文・バリノ・サーヴェイ株式会社 2003 『付録 芦屋市内に所在する考古遺跡の自然科学分析』『平成12・13年度国庫補助事業 寺田遺跡(128地点)発掘調査報告書 - 集落東端部の様相と知見 -』『芦屋市文化財調査報告第47集』芦屋市教育委員会
- 中村博司 1986 『徳川大坂城普請参加大名の編成について』『大阪城天守閣紀要』第14号 大阪城天守閣
- 西村 歩・池峯肇彦 2006 『第I部 古式土器編年集成 和泉地域』『古式土器の年代学』財団法人 大阪府文化財センター
- 藤井重夫 1982 『大坂城石垣符号について』『城と陣屋』22号〈日本城郭史研究叢書8〉名著出版
- 藤川祐作 1969 『大坂築城石と芦屋』『芦の芽』16号 芦の芽グループ
- 藤川祐作 1972 『摂津大坂城(6) - 芦屋山中の探石場 -』『城と陣屋』65号 日本古城友の会
- 藤川祐作 1976 『八十刻印群の復元 - 徳川大坂城の研究三』『わだち』12号 兵庫県立芦屋高等学校史学研究部 OB会
- 藤川祐作 1979 『Ⅲ 付論(2) 探石場としての岩ヶ平』『芦屋・八十塚古墳群岩ヶ平支群の調査』(芦屋市文化財調査報告第11集) 芦屋市教育委員会

- 藤川祐作 1991 「六甲山系の徳川大坂城採石場と積み出し地 - 芦屋市呉川町発見の新資料を中心に -」『歴史と神戸』第168号 神戸史学会
- 古川久雄 1992 「岩ヶ平刻印群における池田家筆頭家老人名刻印の発見」『蘆橘』通巻65号 芦の芽グループ
- 古川久雄 1998 「奥山刻印群K地区における毛利氏所用刻印の分布と意義」『徳川大坂城東六甲採石場Ⅰ - 芦屋墓園拡張工事に伴う奥山刻印群K地区内の事前発掘調査 -』〈芦屋市文化財調査報告第31集〉芦屋市教育委員会
- 古川久雄 2003 「Ⅳ. 徳川幕府による大坂城再築と東六甲採石場」『徳川大坂城東六甲採石場Ⅲ 岩ヶ平刻印群(第12次)発掘調査報告書 - 芦屋市六麓荘浄水場高区配水池(水道施設)築造工事に伴う唐津藩採石場跡の発掘調査 -』〈芦屋市文化財調査報告第44集〉芦屋市教育委員会
- 古川久雄 編 2002 「徳川大坂城東六甲採石場と岩ヶ平刻印群」『平成13年度国庫補助事業 徳川大坂城東六甲採石場Ⅱ 岩ヶ平刻印群(第11次)発掘調査報告書』〈芦屋市文化財調査報告第42集〉芦屋市教育委員会
- 古川久雄 編 2003 「徳川大坂城東六甲採石場Ⅲ 岩ヶ平刻印群(第12次)発掘調査報告書 - 芦屋市六麓荘浄水場高区配水池(水道施設)築造工事に伴う唐津藩採石場跡の発掘調査 -』〈芦屋市文化財調査報告第44集〉芦屋市教育委員会
- 細川道草 1963 『芦屋郷土誌』芦屋史談会
- 村川行弘 1962 『大坂城と芦屋』〈芦屋市文化財調査報告第2集〉芦屋市教育委員会
- 村川行弘 1970 『大坂城の謎』学生社
- 村川行弘 1971 「第二章 考古学上からみた芦屋」『新修芦屋市史』本篇 芦屋市役所
- 村川行弘・藤岡 弘 1970 『芦屋廃寺址』〈芦屋市文化財調査報告第7集〉芦屋市教育委員会
- 村川行弘・森岡秀人 1976 「弥生時代」『新修芦屋市史』資料篇Ⅰ 芦屋市役所
- 森 郁夫 1998 『日本古代寺院造営の研究』法政大学出版会
- 森岡秀人 1980 「土器からみた高地性集落と下山遺跡の生活様式」『藤井祐吉追悼記念考古学論叢』刊行会
- 森岡秀人 1994 「Ⅲ. 総括」『平成5年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書(八十塚古墳群・徳川大坂城岩ヶ平採石場)』〈芦屋市文化財調査報告第25集〉芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1996 「第8章 総括 - 平成7年度の震災復興調査の成果と課題 第4節 打出岸造り遺跡の実態について」『平成7年度国庫補助事業 阪神・淡路大震災復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 芦屋廃寺遺跡(W地点) 芦屋廃寺遺跡(第29地点) 月若遺跡(第20地点) 月若遺跡(第28地点) 打出岸造り遺跡(第9地点) 久保遺跡(第15地点)』〈芦屋市文化財調査報告第28集〉芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1999 「摂津における土器交流拠点の性格」『庄内式土器研究』XXI 庄内式土器研究会
- 森岡秀人 2001 「摂津国免原郡兼屋郷・賀美郷考証覚書」『考古学論集』5 考古学を学ぶ会
- 森岡秀人 2003 「淡路型叩き甕」の提唱と摂津」『初期古墳と大和の考古学』学生社
- 森岡秀人 2006 「第1章 発掘調査の動機と経過」『徳川大坂城東六甲採石場Ⅶ 岩ヶ平刻印群発掘調査報告書 第32・33・45・67・70・79・81・91地点 - 平成9・11・14・15・16年度国庫補助事業 -』〈芦屋市文化財調査報告第64集〉芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 2008a 「第1章 考古学が語る本庄地区周辺の地域史」『本庄村史 歴史編 - 神戸市東灘区深江・青木・西青木のあゆみ -』本庄村史編纂委員会執筆
- 森岡秀人 2008b 「築城石・石切場と切石規格化をめぐる一試考」『権原考古学研究所論集』15 八木書店
- 森岡秀人 2009 「三 六甲山系における徳川大坂城石切場とその特色」『別冊ヒストリア 大坂城再築と東六甲の石切丁場』大阪歴史学会
- 森岡秀人 編 1998 「徳川大坂城東六甲採石場Ⅰ - 芦屋墓園拡張工事に伴う奥山刻印群K地区内の事前発掘調査 -』〈芦屋市文化財調査報告第31集〉芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 編 2003 「平成12・13年度国庫補助事業 寺田遺跡(第128地点)発掘調査報告書 - 集落東端部の様相と知見 -』〈芦屋市文化財調査報告第47集〉芦屋市教育委員会

- 森岡秀人・坂田典彦 2005a 『徳川大坂城東六甲採石場Ⅳ 岩ヶ平石切丁場』〈芦屋市文化財調査報告第60集〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・坂田典彦 2005b 「Ⅴ（１）石切技術の革新とその具体例」前掲〈芦屋市文化財調査報告第60集〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・坂田典彦 2005c 「Ⅴ（３）検出刻印をめぐる二、三の問題」前掲〈芦屋市文化財調査報告第60集〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・坂田典彦 2008 「第2章 発掘調査の概要 第2節 岩ヶ平刻印群（第124地点）」『平成18年度国庫補助事業 三条会下遺跡（第2地点）－徳川大坂城東六甲採石場Ⅶ－ 岩ヶ平刻印群（第122地点） 岩ヶ平刻印群（第124地点） 岩ヶ平刻印群（第126地点）』〈芦屋市文化財調査報告第73集〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋 2006 「第Ⅰ部 古式土師器編年集成 摂津地域」『古式土師器の年代学』財団法人 大阪府文化財センター
- 森岡秀人・竹村忠洋・坂田典彦 2006 「第4章 発掘調査の成果 第5節 岩ヶ平刻印群（第70地点）の調査」『徳川大坂城東六甲採石場Ⅶ 岩ヶ平刻印群発掘調査報告書 第32・33・45・67・70・81・91地点－平成9・11・14・15・16年度国庫補助事業－』〈芦屋市文化財調査報告第64集〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋 編 2006 『徳川大坂城東六甲採石場Ⅶ 岩ヶ平刻印群発掘調査報告書 第32・33・45・67・70・79・81・91地点－平成9・11・14・15・16年度国庫補助事業－』〈芦屋市文化財調査報告第64集〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・西村 歩 2006 「第Ⅳ部 総括 古式土師器と古墳の出現をめぐる諸問題－最新年代学を基礎として」『古式土師器の年代学』財団法人 大阪府文化財センター
- 森岡秀人・藤川祐作 1980 『芦屋市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表（第1分冊）』 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・古川久雄 1992 「芦屋市立美術館野外歴史資料展示における近世考古資料の一例－兵庫県芦屋市呉川町出土の大坂城再築関連石材について－」『肝腹』（関西大学博物館学課程創設三十周年記念特集） 関西大学
- 森岡秀人・古川久雄 2002 「Ⅴ.まとめ」『平成13年度国庫補助事業 徳川大坂城東六甲採石場Ⅱ 岩ヶ平刻印群（第11次）発掘調査報告書』〈芦屋市文化財調査報告第42集〉 芦屋市教育委員会
- 矢口裕之・北原 治・森岡秀人・木南アツ子 1996 「打出岸造り遺跡（第9地点）の発掘調査」『平成7年度国庫補助事業 阪神淡路大震災復興・復興に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』〈芦屋市文化財調査報告第28集〉 芦屋市教育委員会
- 吉井良尚 1940 「序」『考古小録』紅野芳雄遺著 前掲

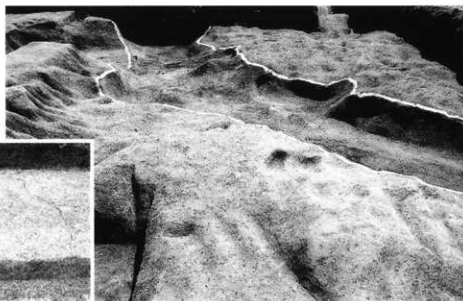


I 区掘削状況(南から)



I 区完掘削状況(南から)

(右) I 区完掘削状況(西から)



(下) SD03検出状況(南から)





II区全景(東から)



II区南部遺構検出状況(東から)



II区掘削状況(南から)



II区南部完掘状況(東から)



Ⅱ区SD01検出状況 (南から)



Ⅱ区SD01掘削状況 (北から)



Ⅱ区SD01掘削状況 (南から)



Ⅱ区南壁SD01土層 (北から)



1トレンチSD01土層 (南から)



SD04検出状況(南から)



SD04上層掘削状況(南西から)



SD04完掘状況(東から)



SD04下層掘削状況(南西から)



SD04下層遺物出土状況(部分)



Ⅱ区南東部遺構検出状況(東から)

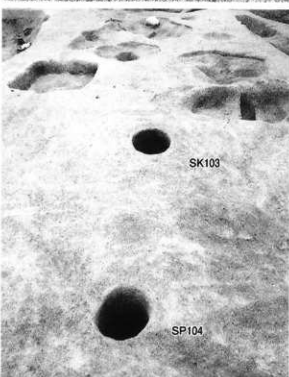
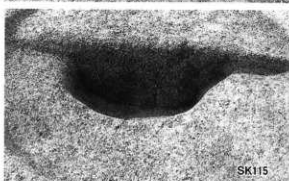


Ⅱ区南東部遺構掘削状況(南から)



Ⅱ区南東部遺構掘削状況(東から)

図版 6 打出岸造り遺跡(第56地点) 土坑・ピット



SK・SP掘削状況



土器溜り 1～3 掘削状況
(北東から)



土器溜り 1～3 掘削状況
(西から)

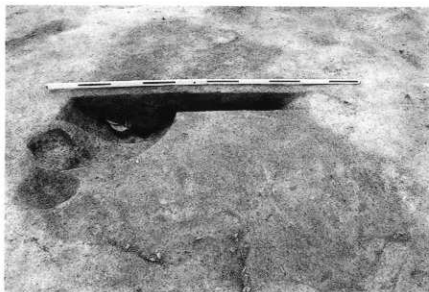


土器溜り 1～3・SD01 掘削状況
(南から)

図版 8

打出岸造り遺跡(第56地点)

土器溜り1 (1)



土器溜り1検出およびサブトレレンチ掘削状況(北東から)



土器溜り1中層掘削状況(北東から)



土器溜り1下層掘削状況(北東から)



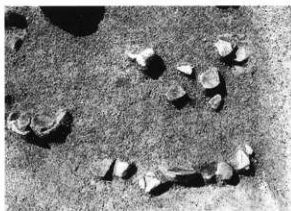
土器溜り1 土層断面 (北東から)



土器溜り1 中層遺物出土状況 (北西から)



土器溜り1 中層西部土器出土状況 (南東から)



土器溜り1 中層南東部土器出土状況 (南東から)



(左) 土器溜り2 検出状況 (北東から)

(上) 土器溜り2 掘削状況 (北東から)



土器溜り2 掘削状況
(南から)



土器溜り2 西端土器出土状況 (南から)



土器溜り2 中央部土器出土状況 (南東から)



土器溜り3 掘削状況(南から)



土器溜り3 掘削状況
(西から)



土器溜り3 土器出土状況(西から)



土器溜り3 土器出土状況(南から)



土器溜り1・2完掘状況(北西から)



土器溜り2断ち割り状況(西から)



杭跡(北西から)



Ⅱ区南壁土層断面(北西から)

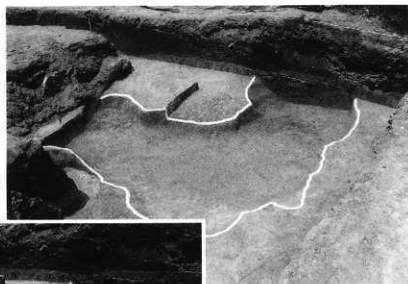


Ⅱ区北南壁土層断面(南西から)

2トレンチ・2トレンチ拡張部
SD02検出状況 (南西から)



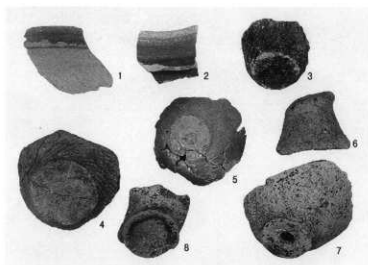
2トレンチ・2トレンチ拡張部
SD02完掘状況 (南東から)



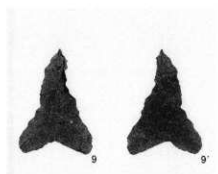
2トレンチ・2トレンチ拡張部SD02完掘状況
(南から)



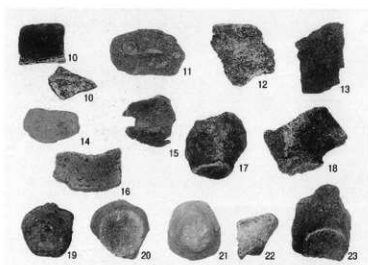
東区SD02完掘状況 (西から)



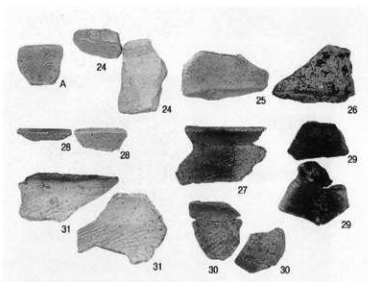
包含層、SK・SP、SD01 出土土器



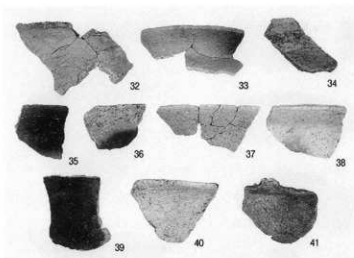
SK101 出土石鏃



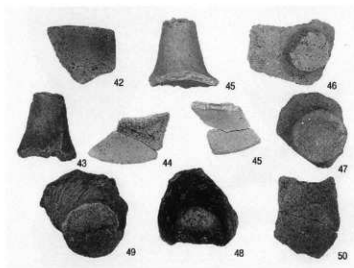
SD04 褐色土出土土器



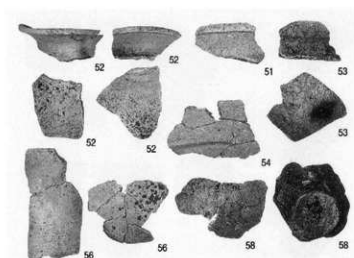
SD04 灰色土上部出土土器（1）



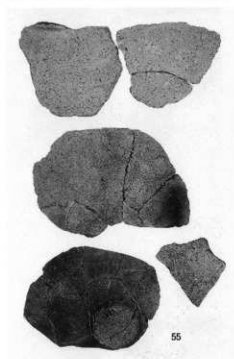
SD04 灰色土上部出土土器 (2)



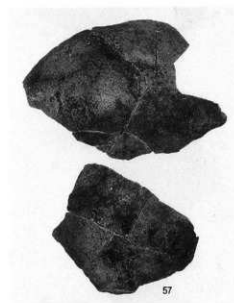
SD04 灰色土上部出土土器 (3)



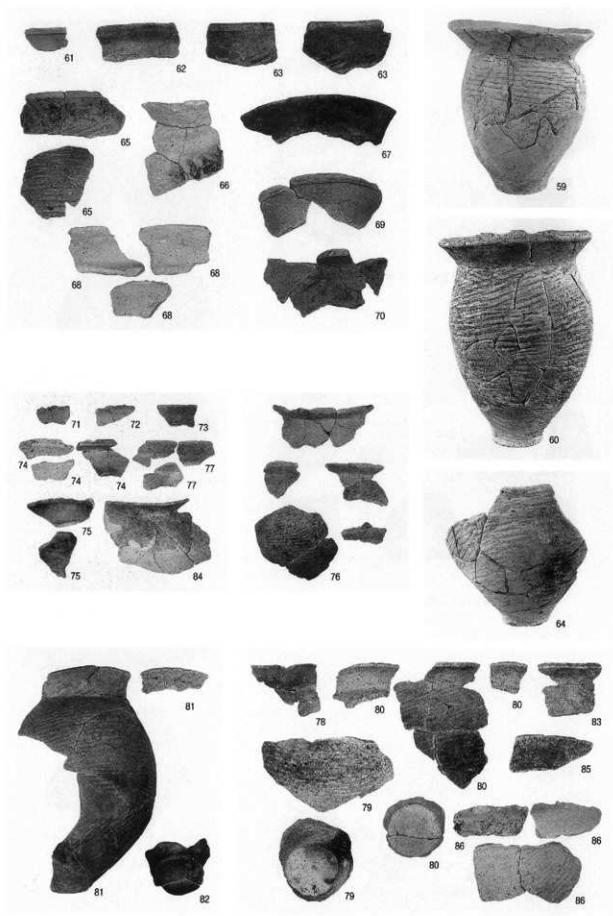
SD04 灰色土下部出土土器 (1)



SD04 灰色土下部出土土器 (2)



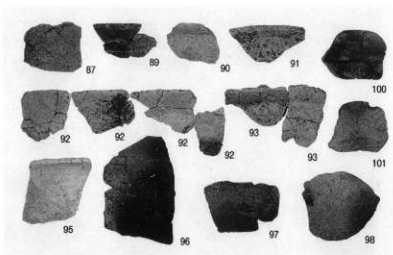
SD04 灰色土下部出土土器 (3)



SD04 灰色土下部出土燵



SD04 灰色土下部出土鉢(1)



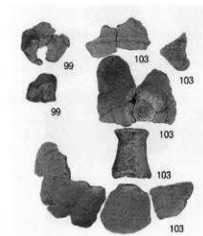
SD04 灰色土下部出土壺・鉢・高杯



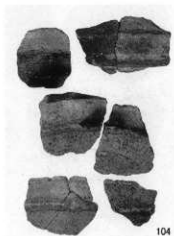
SD04 灰色土下部出土鉢(2)



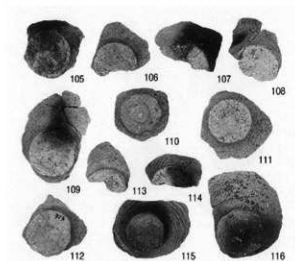
SD04 灰色土下部出土高杯(1)



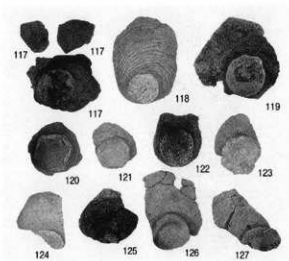
SD04 灰色土下部出土高杯(2)



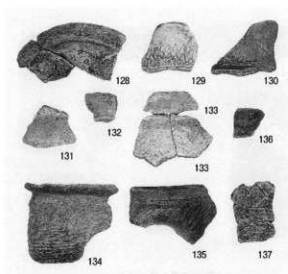
SD04 灰色土下部出土手繪り形土器



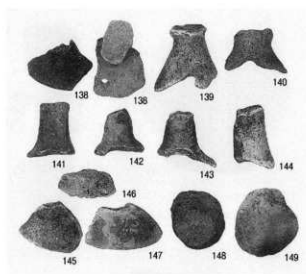
SD04 灰色土下部出土土器底部(1)



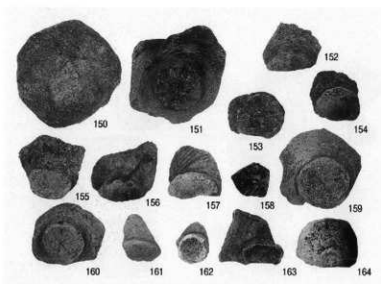
SD04 灰色土下部出土土器底部(2)



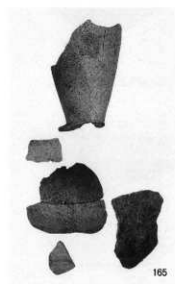
土器溜り1 中層出土土器 (1)



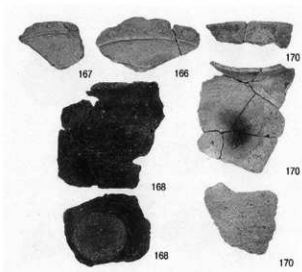
土器溜り1 中層出土土器 (2)



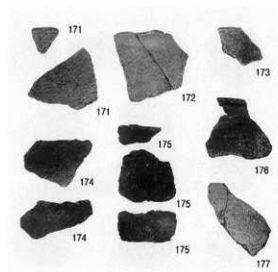
土器溜り1 中層出土土器 (3)



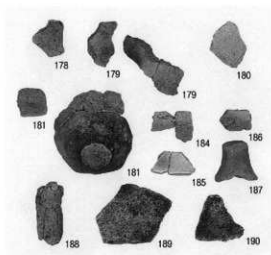
土器溜り1 下層出土土器



土器溜り1 下層出土土器 (1)



土器溜り1 下層出土土器 (2)



土器溜り1下層出土土器(3)



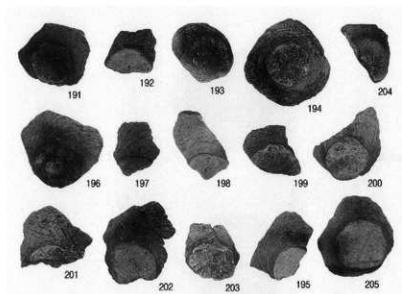
土器溜り1下層出土甕



土器溜り1下層出土高杯(1)



土器溜り1下層出土高杯(2)



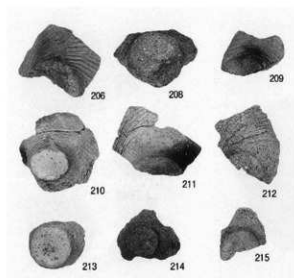
土器溜り1下層出土土器底部(1)



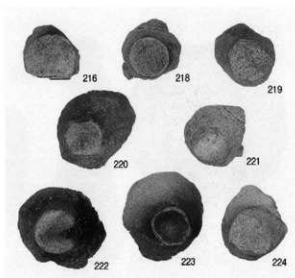
土器溜り1下層出土土器底部(2)



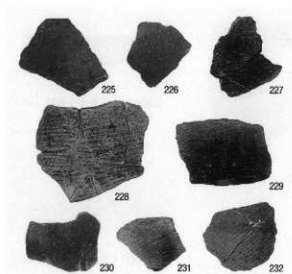
土器溜り1下層出土土器底部(3)



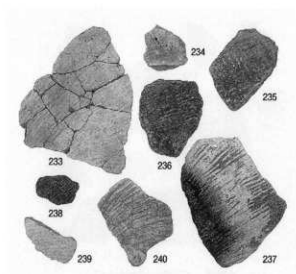
土器溜り1下層出土土器底部(4)



土器溜り1下層出土土器底部(5)



SD04 出土土器



SD04・土器溜り1出土土器



土器溜り2出土鉢



土器溜り3出土甕(1)



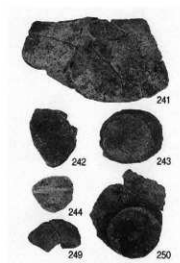
土器溜り2出土器台



土器溜り3出土甕



土器溜り3出土甕(2)



土器溜り2・3出土土器

報告書抄録

ふりがな	へいせい21ねんどこっこほじょじぎょう あしやしないいせきはつかつちょうさがいようほうこくしょ
書名	平成21年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書
副書名	岩ヶ平刻印群（第176地点）－徳川大坂城東六甲採石場XIII－ 芦屋鹿寺遺跡（第113地点） 打出岸造り遺跡（第56地点）
巻次	
シリーズ名	芦屋市文化財調査報告
シリーズ番号	第88集
編著者名	（執筆・編集）森岡秀人・坂田典彦・白谷朋世（執筆）天羽育子
編集機関	芦屋市教育委員会社会教育部生涯学習課（文化財担当）
所在地	〒659-8501 兵庫県芦屋市精進町7番6号 TEL. 0797-38-2115
発行年月日	2011年（平成23年）3月31日

所収遺跡名	岩ヶ平刻印群（第176地点）		発掘調査担当者		森岡秀人・坂田典彦	
所在地	兵庫県芦屋市岩岡町26-3、26-12、27、28-1					
コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
市町村	34度74分84秒	135度31分40秒	20090629～20090714	36.5m ²	個人住宅建設	
遺跡番号						
28206						
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
岩ヶ平刻印群（第176地点）	生産	江戸時代（初期）	刻印石	なし	刻印石1石を確認した。	
要約	本調査地は、岩ヶ平刻印群西部の石曳き道の一つと目されているどんどん川の左岸に位置し、正円の中に「一」が彫られた刻印をもつ石材を1石確認した。本石材は、刻印以外の加工痕がなく、石垣用材として使用されたのではなく、磨石石と考えられる。現在のところ、鳥取藩池田家所用の刻印と推定している。					

所収遺跡名		芦屋庵寺遺跡 (第113地点)		発掘調査担当者		森岡秀人・白谷朋世	
所在地		兵庫県芦屋市三条町81番地4					
コード		北 緯	東 経	調査期間		調査面積	調査原因
市 町 村	遺跡番号	34度73分72秒	135度29分50秒	20090706～20090723	29.1m ²		個人住宅建設
28206							
所収遺跡名	種 別	時 代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
芦屋庵寺遺跡 (第113地点)	集落跡 生産	弥生時代 古墳時代 中世	ビット・耕作痕	弥生土器・土師器・ 須恵器・瓦器・陶器・ 磁器 (中国白磁・中国青磁)	弥生時代～古墳時代の集落遺跡の広がりと、中世以降の耕作地開発の痕跡を確認した。		
要 約		今回の調査では、弥生時代～中近世の遺構面を4面確認した。とりわけ、古墳時代以前に比定される第3・4遺構面では、掘立柱建物や堅穴建物を推測し得るビット群を検出した。調査地点の成果は、第111地点や第116地点とも深く関係する。					

所収遺跡名		打出岸造り遺跡（第56地点）		発掘調査担当者		森岡秀人・白谷朋世							
所在地		兵庫県芦屋市大原町83番地1											
コード		北緯		東経		調査期間		調査面積		調査原因			
市町村		遺跡番号		34度73分81秒		135度30分98秒		20090427～20090527		296.0m ²		個人住宅建設	
28206													
所収遺跡名		種別		時代		主な遺構		主な遺物		特記事項			
打出岸造り遺跡（第56地点）		集落跡		弥生時代（後期末）～古墳時代（前期初頭） 中世		土坑・ビット・溝・流路・杭跡・耕作痕		弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・陶器・磁器（中国青磁）・瓦・石器		弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の一括性の高い土器群を伴う遺構を検出した。当該期の打出岸造り遺跡の集落域の一角が推定可能となった。			
要約		弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の遺構（土坑・ビット・溝・流路・土器溜り）等を検出した。遺構は弥生第Ⅴ様式末～庄内式古段階併行の時期のもの（SD04）と庄内式中段階併行の時期のもの（土器溜り1～3）に区別できる。なお、出土した土器には、淡路や北近畿の形態・技法を用いた在地産の「陸地製土器」も確認され、人的交流の跡をとどめている。											

芦屋市文化財調査報告 第88集

平成21年度国庫補助事業
芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書

平成23年（2011）3月31日 印刷発行

発行者 芦屋市教育委員会

〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号
TEL 0797-38-2115

編集者 芦屋市教育委員会社会教育部生涯学習課（文化財担当）

〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号
TEL 0797-38-2115

印刷所 ウニスガ印刷株式会社

〒677-0054 兵庫県西脇市野村町大坪471
TEL 0795-22-3226

